

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikers 英雄と不屈の心（Fate×なのは）

デュオ・イグニス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 英雄と不屈の心 (Fate×なのは)

### 【Nコード】

N33110

### 【作者名】

デュオ・イグニス

### 【あらすじ】

ある時遠坂家の整理を手伝っていた衛宮士郎、セイバー、アーチャー。

そして家主の遠坂凜はシュバインオーグの遺産の一つを発見する。

——それは、並行世界への転移魔法の結晶——ロストログア——メタスタシスだった……。

魔法少女リリカルなのはStrikers英雄と不屈の心、始まります

http://ncode.syosetu.com/n50888  
x/↑質問コーナーです

## 始まりはいつもドジから（前書き）

この小説は15禁要素を含む描写があります。

年齢不相応な方は回れ右でお願いしますm（| |）m

また二次創作が苦手な方も同様の処置でお願いいたします。

## 始まりはいつもドジから

I am the bone of my sword.  
———体は剣で出来ている。

Steel is my body, and fire is  
my blood.

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand  
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death.

ただの一度の敗走はなく、

Not known to Life.

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create  
many weapons.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never h  
old anything.

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray, unlimited blade  
works.

その体は、きっと剣で出来ていた。

固有結界、Unlimited Blade Works《無限  
の剣製》・・・それは、エミヤシロウに唯一許された魔術の名称。

それは、たくさんの剣を内包した世界。

そして、この世界（無限の剣製）内での俺は最強。

何故なら——イメージしたのは常に最強の自分。

俺は闘うものではなく、生み出すもの。

だが、闘えるのなら闘うしかない世界に身を浸したのもこの魔術あつてこそ——。

「ちよつと士郎！真面目に掃除してるっ！？」

そんな遠坂の罵声にて俺は我に返った。

「あ・・・ああ、悪い少しボーっとしてたようだ。  
すまん遠坂。すぐに作業に戻るよ」

言い終える前に行動に移し、暗い倉庫の中をランプ片手に模索する。

「こんなときにまで上の空とは余裕のようだな、衛宮士郎」

「そういうアンタも一々突っかかってくるあたり余裕ありあまってるんじゃないのか？」

まるで同一人物の会話とは思えないぐらい刺々しい会話が遠坂邸（倉庫）で火花を散らす。

「こら！そこっ喧嘩している暇があったら手を動かさないよッ！

「！」

そして今日2度目の遠坂の罵声に二人揃って気まぜくなる。

「まったく、シロウもアーチャーも・・・今日くらいはまじめにしないと後からがひどいですよ？」

「あ、ああ・・・」

「たしかに・・・」

なんで俺たち3人が掃除に明け暮れているかというそれは2時間前にさかのぼる・・・。

「・・・は？宝石・・・ですか？」

「そうなのよ・・・たしかに前に倉庫で見たはずなんだけど、あの時探してたのは他のものだったから後にしようと思ったら見つからなくなって・・・」

「ふむ・・・、それで一日中アーチャーが倉庫をあさってここまで疲れ果てているわけですか」

「あはは・・・まあ、そういうこと。

で、アーチャーだけじゃいつまでたってもらちが明かないから士郎とセイバーにも手伝ってもらおうと思って呼んだわけ」

「んな・・・俺たちは雑用係か？」

「別に嫌ならいいのよ？衛宮君。その代わりちよつとばかしいつもの修行の内容が変わるけど問題ないわよね？」

・・・。。

「・・・遠坂」

「ん、なに？衛宮君」

「それは・・・脅迫という奴ではないか？」

「何よ、選択肢は与えてるじゃない。人聞きが悪いわねえ！。

・・・それとも衛宮君は私が無・理・や・り衛宮君に探し出せと言つてるとでも？」

・・・まったく、その通りなのですが、遠坂さん。

まあ、そんなことを口にしたら命がいくつあっても足りないわけ  
で。

ぐうとうなりながらも必死にこらえる。

「わ・・・わかったよ。

やればいいんだろ、やれば」

「物分かりがよくてよろしい。・・・アーチャー」

「・・・心得ている。作業を再開する」



「アーチャー、あなたにしては物分かりがいいですね」

「なに、あの馬鹿と一緒にだね。マスターに弱みを握られているというだけの話さ」

「・・・アーチャーなにかいった？」

見た目は極上の笑顔だが、その笑みの背後には黒い影が現れている。

・・・アーチャー、こればかりは同情するぞ。

・・・そんなわけで作業を始めたのだが、思った以上に遠坂邸の倉庫は複雑で物がどこにあるのか判別しづらい。

いい加減、黙々と作業してきた疲れで、行使し続けていた目が休憩を求める。

微妙に睡魔に襲われながらもまた一つ大きな段ボールをどかすと暗闇に隠れた小さな箱を発見する。

「ん、これは・・・？」

大きさには反比例した重いふたを無理やり近くこじ開けるとそこには深紅色の宝石が一つ嚴重に保管されているかのような形で台座にちょこんと乗っていた。

「おい、遠坂」

「なによ？いい加減本気で探し・・・あ」

「お前が探してた宝石って、これか？」

「え、ええ！良く見つかったわね」

「探せって言ったのは遠坂だろ・・・」

「見つかったのですか？シロウ」

声で気づいたのか、セイバーとアーチャーが暗闇の中こちらに歩み寄る。

アーチャーのほうなんかは「やれやれ・・・」と呟きながら微妙に不服そうにこちらを睨めつけている。

「で、遠坂。この宝石一体何なんだ？」

「キシユアの遺産の一つよ。

詳しいことはまだよくわからないんだけど、とても重要なお宝ってこと」

「キシユアってあのシュバインオーグのか・・・？また変なことが起こるんじゃない・・・」

「そんなのまだ決まってるじゃない。

憶測で物事を言うのはあまり良くないわよ、衛宮君」

「だが・・・」

「凜、この坊主のいうことにも一理ある、以前そのキシユアの遺産で私たちがどれほど大変な目にあったか・・・まさか忘れてるわけではあるまい」

「と・・・当然でしょ。」

でも一方的に決めつけて宝の持ち腐れなんかしたらもつとあれじゃない」

そういいながら遠坂の指が宝石に触れる。

――A n f a n g.

「・・・え？」

「なっ!？」

「クッ――!？」

「・・・!」

遠坂が触った途端機械音のように、だが鮮明に言葉が紡がれ光を放つ。

そのあまりにも眩しさに俺たち4人はつい、目をつぶってしまった――。

## 始まりはいつもドジから（後書き）

さて、初めての更新です。

はじめまして、デュオです。

他の場所でお世話になったことがある方はお久しぶりです。

最近なんとなくこういう書き方が増えてきたなあと身にしみるわけですが、どうでしょうか？

説明不十分なところが多くてあれですが、どうか目をつむってやってください（あ

## M o t h e r s & C h i l d

「なのはママ、フェイトママおかえりなさい〜!!」

「ただいま、いい子にしてた？」

「帰るの遅くなっちゃってごめんね、ヴィヴィオ」

ドアを開けた途端元気に駆け寄ってくる愛娘を抱き上げる。

甘えたい年頃のヴィヴィオにとって、こうやって二人のママに甘えられる時間というのは早朝と夜だけ。

きっと本当はもっと接してあげなきゃいけないのだろうけど、私もフェイトちゃんも軍属の公務員ということもあって、そう簡単に時間をとることができずにいた。

アイナさんとザフィーラのおかげで仕事中にヴィヴィオのことを心配しなくても済むのはいいことだけど、出来ればもう少し一緒にいてあげたいという気持ちもまったくないとは言いきれない。

「うん! ヴィヴィオいい子にしてたよ!!」

「そっか、えらいねヴィヴィオは」

フェイトちゃんがよしよしと頭を撫でる。

ヴィヴィオはフェイトちゃんからこうやって頭を撫でられるのが大好きだった。

そして、それを知っているフェイトちゃんは褒めるたびにいつも頭を優しく撫でる癖がついていた。

「それじゃヴィヴィオ。寝るのには早いし3人で何かして遊んじゃおっか」

そう言うと、今までも元気だったヴィヴィオがさらに笑顔になっていくのが下からのぞきこんでもよくわかる。

もちろんヴィヴィオからの答えは、

「うん!!」

だった。

「じゃあヴィヴィオ何して遊びたい？」

「うーん、えーとね、あれやりたい!」

ヴィヴィオが指さしている方向を私とフェイトちゃんは向くとそこには……。

「ゲーム……?」

「あんなの買ってあげたっけ……?なのは」

「ううん……最近買ってあげたのってアイナさん達とかと一緒にできるようなってトランプやすごろくだけだったと思うんだけど……」

「私も新しくぬいぐるみは買ってあげた覚えはあるんだけど・・・えーと・・・」

本来この部屋にあるはずがないゲーム機があることに二人揃って首をかしげる。

「ヴィヴィオ・・・あれ、どうしたの？」

「えとね、今日ユーノお兄ちゃんが遊びに来てくれてプレゼントって」

「え、ユーノ君今日来てたんだ」

それなら訓練視きに来てくれればよかったのに・・・と思うが、ユーノ君のことだから邪魔してはまずいだろうと、いらぬ気づかいをしているということが目に見えてきて苦笑する。

私たちが子供の頃からユーノ君は変に気づかいが過ぎるところがあったことを思い出す。

「そういえば、これ日本のゲーム機じゃないかな？」

「どれどれ・・・あっ！本当だー！これ私たちが子供の頃のゲーム機だよ」

懐かしげに機械を覗くと隣にソフトまで準備してあることに気づく。

ユーノ君らしく、それは私たちが4人で遊んでいたときに盛り上

がっていたゲームの数々だった

「懐かしいね、これ。」

みんなでどうやってなのはを攻略しようかと策を巡らせて必死だったな・・・」

「にやは・・・ゲームに関しては自信あるもんねっ！  
じゃヴィヴィオ一緒にあそぼっか！」

「うん！！はやくやろうっなのはママ、フェイトママ」

ご丁寧にコントローラーも4つそろえてあり、みんなで遊べるように準備されていた。

今度ユーノ君にお礼をしないと思いつつ、ディスクをゲーム機のトレイに置いた。

「な・・・なのは、手加減してね・・・」

「あはは大丈夫だよフェイトちゃん」

その後、私とヴィヴィオは勢いに乗っちゃって3時間ほどコントローラーを握り続けた。

フェイトちゃんが1時間過ぎたあたりで「もうそろそろ寝た方がいいんじゃない？」と言ったらしいんだけど私もヴィヴィオもハマりすぎてしまってまともに話を聞いていなかったらしい。

一緒に3時間どっぷりつき合わせられたフェイトちゃんは微妙に不服そうに文句を漏らした。



「・・・もう！なのははすぐ格闘ゲームとなると我を失っちゃうんだから！」

「ご・・・ごめんフェイトちゃん」

お互い眠い目こすりながら反省する。

ちなみにヴィヴィオは3時間たった時点で睡魔に負け、名残惜しそうにベッドの真ん中で今は眠っている。

「今度から気をつけてね。」

ゲームにハマるのはいいけど、長時間するのは体に毒なんだから・・・」

心配げに見つめるその視線に照れと同時に申し訳なさが身にしみる。

「うん、肝に銘じとく。」

フェイトちゃんにも迷惑かけちゃったし・・・こんな遅くまで」

「あ、えと私は大丈夫だよ。」

でもなのはいつも教導で動き回ってるんだから体少しでも長く休めない」と

「それはフェイトちゃんも同じだよ。」

執務官としていろんなところに呼ばれてあまり休憩できてないんですよ？」

「そうでもないよ、事故処理には追われているけどJS事件中と比

べたら大分楽になったから」

「そう・・・？ならいいんだけど」

嘘をついているようでもなさそうなので、一安心する。

「じゃ・・・私たちも寝よっか、フェイトちゃん」

「あ・・・うん、そうだね。おやすみなのは」

「おやすみ、フェイトちゃん」

二人でヴィヴィオを囲むように川の字になってベッドに入る。

そのままやはり疲れがたまっていたのかすぐに私もフェイトちゃんも眠りに落ちた。

「ねえ、なのはっ！なのはってば・・・！」

「なのはママ！！」

「んっ・・・」

「朝だよ、なのは！」

朝練にこのままだと間に合わないよっ」

「ふえ・・・も・・・もう、そんな時間なの？」

まだ少し残った眠気で意識が朦朧とする中、やっとフェイトちゃんとヴィヴィオが視界に入る。

「大丈夫？なのは」

眠気覚ましのためかフェイトちゃんがホットミルクを手渡してくる。

それを受け取り、少し口に含むと、甘さと暖かさで頭にスイッチが入る。

この甘さは・・・蜂蜜でも入れたのだろうか？

「ありがと、フェイトちゃん」

「ううん、気にしないで」

「なのはママ、お時間大丈夫？」

「・・・と、いけない。

ホントにぎりぎりかなー・・・ごめん、ヴィヴィオ。

なのはママ今から急いで行ってくるね」

「うん、いつてらっしゃい！」

ヴィヴィオもまだ眠気が抜けてないのか目をこすりながらも元気に言ってくれる。

「なのは、教導の後、私今日は予定ないからヴィヴィオと3人で朝食にしよう？」

「あ、うん！わかった。終わったらすぐに行くから先にいって！」

「うん、いってらっしゃいなのは」

髪をサイドテールに結びながらバタバタと訓練場へと向かう。

教官が遅刻とあつては生徒に顔見せできないというものだ。

「ごめん、ヴィータちゃん！遅れたっ」

「お・・・おう！やっとなたか」

といっても何とか朝練5分前に訓練場にはたどり着く。

だけど、やっぱりというかなんというか、フォワード4名は既に来ていた。

「皆もごめんねー」

「い、いえ・・・問題ありません」

「そうですよ！時間にはまだ余裕ありましたし」

「いつも僕たちより早いですから今日くらい気にしないでください」

「そうですよ、なのはさん。私も今来たばかりですし」

それでも教官として一番最初に来て準備ができなかったというのは少し申し訳なく思う。

「ま、気にすんなよ。アタシもいるし」

「にやはは・・・ありがと、ヴィータちゃん」

「こ・・・この！だから、頭を撫でるなっ！！」

つい手がヴィータちゃんの頭に行き撫でてしまう。

「ごめんごめん。」

・・・さてと、じゃあ今日の訓練いこっか！！」

「」「はい！！」「」

4人の実にそろった返事が広い訓練場に轟いた――。

## 戦技教導隊

「「「ありがとうございます!!」「」」」

体がボロボロだというのに声はまだ元気がありあまっているかの  
ように、訓練場に響く。

私はその声が大好きだ。

だけど、この子達に教えることは日に日になくなっていき、この  
機動六課も試験運用期間がもうすぐ終わり解散となる。

だから終わる前に出来る限りのことを教え、育てていきたい。

「うん、お疲れ様。

じゃあクールダウンして朝食にいつてね」

「「「はい!」「」」」

笑顔で見送ると、隣で満足そうにそれを見つめるヴィータを見や  
る。

姿こそ小学1、2年生に勘違いされかねない彼女は実際は大人の  
部類に十二分に入る人物であり、威厳すらあった。

——まあ、見た目通りに子供っぽいところもあるんだけどね。

「ん、なんだよ?」

「なんでもないよ。」

「そういやはやてちゃんももうそろそろ食堂に行くころじゃない？」

「そういやそうだなーお前はヴィヴィオとか？」

「うん、あとフェイトちゃんも一緒にね」

「そっか。」

「じゃあ一緒に食堂までは行くか」

言いきる前にヴィータちゃんはバリアジャケットを解き一瞬のうちにいつもの制服姿へと変わる。

それにならい、私もバリアジャケットを解き元の教導官服に戻る。

お互い軽く目くばせをした後、無意識のうちに隣を歩く。

「なあ、なのは」

「ん、何？ヴィータちゃん」

「機動六課はもうすぐ解散するだろ？」

「うん、そうだね」

「だから・・・その、寂しくないのか？」

なのははどの生徒に対しても入れ込むのは知ってるけどよーそれにしたってあいつらを特別視して今まで以上に頑張っているようにしか見えねえ」

少しギクリとくる。

最初は無意識だったけど、言われてみれば確かに、そうかも思える。

たぶん、私は今までのどの教導よりもたった4人の育成に・・・そう、今まで以上に全力全開で当たっていると思う。

別に他の教導は手抜きしていた、というわけではない。

どれをとったって愛情を込めて、でも手加減なく教え込んで。

それを私はやってきたはずだ。

そしてもちろん寂しいか寂しくないかなんて。

「うん、もちろん寂しいよ。

でもね、戦技教導官の仕事は優秀な魔導師をたくさん送りだすことだから。

私は笑顔で4人を卒業させたいと思ってるよ」

その思いはもちろん事実で、きっと聞いてきたヴィータちゃんさえも同じ考えだろうと思う。

「そっか。

その言葉聞いて安心した」

私よりも遅く教導官の資格を取った彼女も、立派な教導官なのだ。った。



その後他愛のない世間話で盛り上がる中、食堂に着いた私とヴィータちゃんはそれぞれの待ち人の元へと駆け出す。

「遅くなってごめん！ヴィヴィオ、フェイトちゃん！」

先に来て待っていてくれた二人に軽く謝礼して席に座る。

「なのはママおかえり」

「おかえり、なのは。」

そんなに待ってないから、気にしないで」

優しく私とヴィヴィオに微笑んだ後、フェイトちゃんは2人分の定食とヴィヴィオ専用のランチを頼む。

「そういえばフェイトちゃん。

今日は休みなんだよね？」

「あ、うん。

なんならなのはの教導手伝おうかなって思ってたんだけど」

「無理しなくてもいいよ」。

ヴィータちゃんはもちろんのことだけど、昼からはシグナムさんもエリオの稽古つけるって言ってるし」

「だからこそだよ」

私だってライトニング隊の隊長だもの。エリオとキャロの面倒ぐらいは余裕がある時は見てあげないと」

「まあ、フェイトちゃんが手伝ってくれるのは助かるし、あの二人も顔には出さなくても喜ぶとは思うけど、いいの？」

「うん、逆にこっちがお願いしたいぐらい」

運ばれてきた料理に軽く手をつけながら、フェイトちゃんが苦笑する。

子供の頃から他人に優しくするのが大好きなフェイトちゃんにとって、子供であるエリオとキャロのために何かしてあげたいというのは当然のことなのだろう。

「ヴィヴィオものはママのお手伝いするー！！」

「あはは、嬉しいけどヴィヴィオには無理だよー」

「ちよつとヴィヴィオには速いかなあー」

ダメだしされて不服なのか微妙に口をとがらせる。

それを見ながら二人して笑う。

機動六課にとってはとてもゆったりとした空気が流れていた。

## 戦技教導隊（後書き）

どうも、1週間遅れの更新となりました。

平凡を描くのって実は苦手です。・・・ネタが思いつかずサーセン  
^^;

次の話はもう少しまともに書ければと思います。

## メタスタシス

昼になり、本日の教導を考えながら訓練場に向かっていた私とフ  
イトちゃんは久しぶりに聞く警報に顔をこわばらせた。

「第一級警戒態勢・・・!？」

それは、JS事件以来見ることのなかった久しぶりのALERT  
だった。

「いっ・・・!!」

まるで放り投げられたかのように地面に突き飛ばされ、口の中が  
鉄の味で吐き気がする。

どうやら衝撃で少々内出血したらしい。

動きたくないと反抗する体を無理やり近くねじ伏せ立ち上がり、  
口の中に広がる血を吐きだすと、あたりを見回す。

すると、自力で助かったアーチャーがマスターである遠坂を抱き  
かかえようとしているところが見える。

どうも、遠坂は気を失っているらしく、大人しく頭を垂れている  
わけだが・・・。

――・・・む。

何というか、むかつくのだ。

別にアーチャーが悪いというわけではない、だがその行動に対して何故か無性に意味もなく腹が立つ。

だが、そんな俺には気づいてないのか、いつの間にか鎧を装備したセイバーがこちらに向かって駆け出してきたのを見ながらアーチャーはそちらへと歩みよる。

もちろん俺も少しふらふらする体を押さえつけながら、セイバーの元へと駆け寄った。

「なんだ、お前も無事だったのか、衛宮士郎」

そいつはやっと俺の存在に気付いたかのように、心底残念そうにつぶやきやがった。

「そう簡単に死ねるかよ。」

それで、遠坂は大丈夫なのか？」

「何、少々打ち所が悪かったただけの話。

少し休めば気を取り戻すだろう」

「そうか」

「それよりも、一体ここは・・・？」

「空気の匂いが違う。ここは俺たちが知る地球ではないな」

「地球じゃないって・・・」

つまり、異世界に飛ばされたのか・・・？あの宝石の力で。

「んっ・・・」

かわいらしい吐息が聞こえたと思ったら遠坂はゆっくりと目を開け、自分の顔に妙に近い位置にあるアーチャーの顔をまじまじと見る。

「お目覚めか、マスター」

「なっ・・・!？」

どうやら自分の置かれている状況を正しく理解したらしい遠坂は一瞬にして顔を赤くし、アーチャーの腕から逃れようとじたばたする。

それが普通の少女ならば何とも思わなかっただろうが、相手はあの遠坂凜だ。

既に降ろそうとしていたにもかかわらず、ただひたすらに腕から離れることを考えているだけの遠坂による魔力のこもった一撃が鳩尾にクリーンヒットし、自然、腕は遠坂から離れた。

・・・おまけに、アーチャーはひざを地面につき、下腹を抱える始末だ。

ざまあ、みろと少し思ってしまう自分にびっくりしつつも悟られないようにそっぽを向く。

「ご、ごめんアーチャー・・・つい」

「グッ・・・！つい、で君は魔力を込めるのか！！」

「だからごめんっていつてるじゃないのよ！」

「まあまあ、今はそのようなことよりもここがどこなのかを調べることが先決かと」

見るに見かねてか呆れ顔を隠さずに二人を力づくで引き離すとセイバーはわざとらしいまでの大きな溜息をついた。

「セイバーの言うとおりだ。

遠坂も目を覚ましたことだし、本題に入るとしよう」

「ああ」

「え、ええ・・・」

渋々、といった感じに二人は微妙に距離をとりながらもこちらに視線だけは向けてくる。

「まあ、まずはここがどこか・・・だな」

「そうですね、飛ばされた原因はこの宝石のせいといって過言ではなさそうですし」

そう言っているの間に回収したのかセイバーは深紅の宝石が台座にはまった箱を取り出す。

あの時のように光り輝くわけでも言葉を発するわけでもない。

ただ、存在するだけの宝石かのように本来の宝石としての光沢だけを放っている。

「なあ遠坂この宝石について何か情報はないのか？ シュバインオーグの遺産なんだろう」

「うーん、このことかはっきりしてないんだけどキシュアの日記の中にこんなことが書かれていたわ。

『血のように紅き宝石は時空を旅行する力なり。世界の秩序が狂うとき再びその力は復活するであろう』」

記憶をたどりながらも鮮明に紡がれる言葉はまさしくこの宝石のことを言っているようだった。

だがそれにしたって・・・。

「時空旅行・・・？」

「世界の秩序が狂うとはこれまた・・・」

滅茶苦茶な話だとは思う。

だいたい何のために作られたものなのか微妙にわかりづらいし、世界が禍に瀕した時に呼び出されるべき存在はアーチャーの話が本当なら、英雄と呼ばれた存在・・・アーチャー流に言う“掃除屋”たる『守護者』のはずだ。



いったい時空を渡るためだけの力に一体何の意味があるというだろう。

「ふむ、衛宮士郎お前の考えには欠点がある」

「人の心を読むなよ。」

「・・・欠点ってなんなんだ？」

「たしかに秩序が狂い世界が滅びようとするときにその禍を取り除くのは守護者の役割だ。」

だが俺たちはその世界を救うわけではない、あくまで禍を取り除くだけだ」

「つまり、そんな最終決断のようなことを迫られる前に助けられる可能性があるというのなら的確あるものを他世界から呼び込んで救世主と仕立て上げる・・・というわけですか」

「おそらくその線で間違いないでしょうね。」

士郎と私がいる時は反応しなかった宝石がセイバーが近くにいたことによって反応したんだわ」

「・・・？私、ですか？」

「ええ、守護者でもなく、ただの魔術師でもなく、だけど英雄として最強とまで言われるクラスであるセイバーのクラスにいるあなたなら宝石が認め、力を発揮してもおかしくない」

「そういわれましても・・・」

少し困ったような表情を浮かべつつ、何もない平原をセイバーは

見渡す。

「まあ、でもそういうことなら。

俺たちが帰るためにもこの・・・別世界ってことになるのか。

まあ、この世界の秩序を取り戻せばいいってことだよな?」

「原理的にはそういうことだ。

こちらに來れた以上条件によって元の世界に戻ることは可能なはずだ」

「でも・・・この世界に人は住んでいるのかしら?」

見渡す限りどこまでも平原で、とりあえず近くに人の気配は感じることができない。

大体こんな平和そうな場所をどんな禍が覆っているというのだろうか。

――・・・まさか、誤作動とか言うんじゃないだろうな・・・。

もしそうだったら・・・と考えて思考を中断する。

そんなことを考えたって前に進めないのは明白だ。

「とりあえずここは住居を探すのが一番だろう」

「そ・・・そうですね」

「じゃ、手分けして探しましょうか」

「いや、土地勘のないこの場所で下手に別れてお互いを見失っては元も子もない」

「・・・たしかに」

「ではどうするのですか？アーチャー」

「私と騎士王の2人で近辺の搜索をしよう。

凜と坊主はここでまっていたまえ」

セイバーもその意見に賛成なのかこくと頷く。

それに頷き返しながら、

「わかった。

俺と遠坂はここで待ってるよ」

「ま、心配する必要はないでしょうけど気をつけてね、アーチャー」

「心得た」

返事するや否やセイバーとアーチャーは風のように何も無い平原を走り抜ける。

微妙においてけぼり扱いされた俺と遠坂はそれが視認できなくなるぐらいまで見届けた時点で何をやるでもなく、その場に座り込んだ。

## メタスタシス（後書き）

さて、今回はまたFateの4人をアップ。

意外と昔から説明ばかりな文章構成ばかりしていたので台詞ばかり  
って難しいなと感じていたり^^；

ちょっと急な展開についていけなかったらすみません^^；

心はきつと・・・

「こうやってると何だかあの時のこと思い出すわね・・・、あの時は夜だったけど」

「そうだな・・・」

あの時とは、アーチャーが遠坂を裏切りキャスターの仲間になった時のことだ。

といっても、それはアーチャーが単独でしかけた罠でもあったりしたが、実際アイツは凜を誘拐し、ただ俺との戦いを邪魔されたくないがために裏切ったのだ。

そして、アーチャーが裏切った時、負傷していた俺と、目の前で裏切られた遠坂は屈辱的にもアーチャーの交換条件によってキャスターから逃げられたわけだが、その時家に帰る途中俺たちはこうやってお互い背中合わせに座り、少し長い夜に語らった。

だが今はあの時のように俺も遠坂も悲しさや苦しさに悶えているわけでも、傷を負っているわけではない。

ただ自分にとって信頼おけるパートナーの帰りを待つだけ。

だが久しぶりに感じる完全なる二人だけの空間になんとなく声は上ずった。

ああ、惚れちまっているともさ。

だって仕方ない。昔から憧れていて、本当の遠坂を知ってもっと好きになっちゃった。

「なあ、遠坂」

「ん、何？士郎」

「これからどうなるんだろうな・・・」

「そうね、とりあえずセイバーとアーチャーが帰ってこないと何とも言えないだろうけど、帰る方法が見つからない限り、あの宝石に従って世界の危機とやらを救うしかないんじゃない？」

「簡単に言うな・・・そもそも俺たち4人の手に負えるようなものなのか？世界の危機を救うだなんて」

いくらセイバーとアーチャーが英雄と呼ばれる存在だろうと、世界を救うなんてこと無茶にもほどがあるのではないだろうか。

「まあ、たしかに土地勘のない私たち4人で行うのには限度がある可能性も否定できないわね。

そういう話も含めて二人が帰ってきて論じるとしましょ」

「ああ、そうだな」

言いながら遠坂は宝石を取り出し、趣味の宝石磨きを始める。

遠坂の魔術師は物体に魔力をため込むことが得意らしく、特に宝石は魔力をためやすいそうで、高いものではあるが余裕がある時にはいつも遠坂は自分の魔力を宝石にためている。

二人が戻ってくるまで時間もあることだろうし、俺も背中越しに感じる暖かさに気を休めた。

そんな時間が30分ほど続いただろうか、ほとんど周りに気を寄せてなかった俺たちは視認できるほどの距離になるまで自分達の領域にセイバーとアーチャー以外が入り込んでいることに気付けなかった。

とっさに気づいて遠坂と二人、立ち上がり構えるが、遠くでうっすら視認出来ていたものが近付くにつれて鮮明に見えてくると俺と遠坂は少々気が抜けてしまう。

「・・・遠坂、俺頭おかしくなったのかな・・・」

「いいえ、たぶん正常よ。私にも見えるもの・・・」

何かを使って飛んでいると思われる人物（女性）は実は実際に空を飛んでいて、しかも普通の服とはまず思えないような鮮やかな白と青を基調とした服を着ており、おまけに杖を握っている。ちなみに髪の色は茶色。

その隣には金髪の髪がとても映えるような漆黒の服に白いジャケットを着込んだ女性が飛んでいる。

ちなみに物騒なことにこちらは戦斧を握っている。

二人の女性はものすごい勢いでこちらに飛んできていた。

ついついその現実離れした状況に武器を構えることすら忘れる。

「時空管理局機動六課、高町一等空尉です」

「同じくフェイト・T・ハラOWNです。あなたたちが所有していると思われるロストログアをこちらに渡し投降してください」

「………。いきなり意味のわからない用語を立て続けに言われても理解できない……のだが。」

二人の言葉で我に返った遠坂は、学校で見せる得意の猫かぶり状態で俺をかばうような形で前に出た。

「……何というか、非常に格好がつかない状況だ。」

「……まず、私たちにはあなたたちが言っていることが理解できません。」

時空管理局というのはどういうもので、ロストログアとは一体何なのでしょうか？」

完璧に学園のアイドルスマイルで言う遠坂の言葉に二人のえーと・  
・高町さんとテストロッサさんは目を見開いた。

「時空管理局をご存じない……？」

彼女たちにはよほど信じられないような事項らしく、お互いの顔を見合わせてあからさまに驚いている。

この世界においてはよほど有名なものだろうか？

「私たち他の世界から宝石の力によってこの世界に飛ばされてしま



ったんです。

だから、この世界のことは今来たばかりなのでまったく無知識で……」

実際事実なのだがどうも……学園以外でこの性格を見ると微妙に鳥肌が立つのは俺だけだろうか……。

「宝石で別世界から飛ばされてきた……まさか、ロストログアの力……？」

「ねえ、良ければその宝石を見せてもらえる？」

「あ、はい。士郎」

「ああ……これだ」

箱のふたを開き、深紅の宝石が顔を出した。

それを注意深く二人は覗きこむ。

「……でもいいのか、遠坂。この人たちに見せちゃって」

見せてしまってから言っても遅いがなんとなく疑問を口に出す。

「仕方ないでしょう？ 私たちでわからないことももしかしたらこの方々ならわかるかもしれないし」

俺相手にも猫かぶりの状態を解いてない遠坂は見事に笑顔でそれと見つめていた。

相変わらずの猫かぶり具合に感心しながらも、たしかに思うところはある。

高町さんとテストロッサさんは宝石にやっていた視線をこちらにあげる。

「ロストログアのようですね・・・呼称名まではちゃんとした研究機関に回さないとわかりませんが・・・。この宝石は預からせてもらいますが、構いませんね？」

「それはちょっと困る。」

それがないと俺たちは帰るすべがなくなっちまう」

「大丈夫、検査が済み安全が確認されたらお返しします。それまで預かるだけです。それと・・・」

「あなたたちにもご同行お願いします。来たばかりで動揺しているかもしれませんが、この世界のことや今後のあなたたちのことを説明しなければなりませんから」

どうやら悪い人たちではなさそうだが、微妙に軍隊的なおいがする。

だが、ここは言うことを聞かねばならないだろう・・・。

遠坂も同意見らしく無言でこちらに頷き返した。

「それは構わないが・・・実は先ほど偵察に俺たちの仲間が2人行ってまだ戻ってきてないんだ。それまでここを動くわけにはいかない」

「了解、ではそれまで待ちます」

それからセイバーとアーチャーが戻ってきたのは十数分たってからのことだった。

その後、説明を求める二人に道中今までの出来事を話しながら俺たちは機動六課と呼ばれるところに高町さんとテスタロッサさんの案内のもと向かった。

## 心はきつと・・・（後書き）

さて、またまただいぶ遅れてしまった更新。

なんか、自分で書いててどっちがなのはの台詞でどっちがフェイトなのか分からなくなってきた（ry

・・・すみません^^；

## 根源の渦

機動六課につき、俺たち4人は部隊長室に通された。

ちなみに現在セイバーとアーチャーは武装を解いており、私服の状態である。

「ようこそ、機動六課へ。うちは部隊長の八神はやて」

「リインフォース？曹長であります♪」

「・・・妖精？」

部隊長の方は若干隊長というには若いようだが、素直に頷ける。

・・・だが、目の前にいる手のひらサイズの人間を見てどう反応すればよいというのだろうか・・・。

「妖精じゃないですよ♪私は融合機という・・・まあ、ユニゾンデバイスというやつです」

すまん、さっぱりわからん。

「リイン、この方々どうやらデバイスとかそういう魔法文化がない世界から来たみたいだからそんなこと急に言われてもわかんないよ」

こっちの気配を察してか、テストロッサさんがフォローを入れてくれる。

「あっ！そうなんですか？それは失礼いたしました。まあ、では今は深く考えずに人とおなじように扱ってください」

「・・・ああ、わかった。・・・と、自己紹介がまだだったな。俺は衛宮士郎」

「遠坂凜よ」

「名前というわけではありませんが、私のことはセイバーとお呼びください」

「同じく、アーチャーだ」

「剣使いに、弓兵・・・？」

俺と遠坂の背後で待機しているセイバーとアーチャーを不思議そうに高町さんが見つめる。

「あーえと、使い魔っていうのはわかるか・・・？」

「うん、わかるけど・・・それがどうしたんや？」

「二人はそれに似た存在なんだ。剣使いの使い魔だからセイバー、弓兵の使い魔だからアーチャー」

「へえー、でも動物素体じゃないんだね？」

「あくまで似ているってだけで実際は使い魔とは違うので、実際の人間ですよ」

遠坂が説明を補足すると何となく理解したのかそれ以上の追及はないようだ。

「ま、自己紹介はこれぐらいにして・・・。」

反応から察するに本当にこちらの世界の事情については無知識なようやね。

自分がどの世界から来たとかそういうことはわかるか？」

「地球」

「「えっ・・・!？」」

急に八神さんと高町さんが声をあげた。

信じられないとでも言わんばかりにお互いの顔を見合わせている。

「何か御存じなのですか？」

「御存じも何もうちと高町一等空尉は地球の日本出身や」

「「・・・はあ!？」」

今度はこっちが驚く番であった。

「でもおかしいなあ、地球は魔法文化0な世界やというのに、使い魔を連れた人間がここにきて、地球出身やなんて」

「魔法・・・?そもそも魔法なんてそんな古代の秘術を説くあなたたちの言っていることが私たちには・・・」

「・・・？その子たち使い魔もどきなんやろ？だったら魔法で精製したんやないんか？」

たしかに、セイバーとアーチャーの召喚・・・聖杯は魔法じみたものだと言っていたが・・・、というかもどきって・・・。

「俺たちが使えるのは魔術だ。魔法なんてそんなものでもない」

「魔術・・・？魔法と違うんか？」

「ふむ、我々の世界では魔法を使えるといわれている人間・・・魔法使いなど5人いたといわれているが・・・それだけだ。

後は我がマスターである凜やそのセイバーのマスターである少年のような魔術師と呼ばれる人間たちだけなわけだが・・・。そう言った人種さえも地球ではひっそりと暮らしているだけで表舞台には出てきていない。

そうだな、魔法の格を下げたものが魔術とされている。いわゆる魔法の代替品だ」

「そう、私たちの世界では魔法とは？その時代の文明の力ではどれほど資金や時間を費やそうと実現不可能の結果をもたらすもの？ということにされている。

たぶんあなたたちが言う魔法と私たちが知る魔法は別の物体でしょうね」

魔術の話となり、学園モードではなくなった魔術師である凜がアーチャーのついで説明する。

アーチャー以上に詳しい遠坂にとっては当然のことだが、今改めて聞いても魔法と魔術の差がよくわからない俺にとっては何とも言



い難い。

「ふむ、私たちも幼いころはずっと地球住まいやったけど、魔術とかはおとぎ話でしか知らんからなあー」

「にやはは・・・魔法は結構前から付き合ってるからわかるんだけど・・・」

同じ地球人であり日本人である彼女らが魔法使いである、ということの方が俺にとっては信じられないが、遠坂の話では自分たちの知る魔法ではないということになる。

この差は一体何だろうか。

「たぶん、私たちの知る地球とあなたたちが知る地球は別の世界ですね」

だから、セイバーがそんなことを言った瞬間俺は意味を理解していないものの大きくうなづいてしまった。

## 根源の渦（後書き）

最近他の小説かいてるときも微妙にセイバーさんのキャラがずれてきているような気がする……（ry

## 魔術師として

「並行世界・・・？」

「はい、理屈的にはわかりますよね？この世界と似て非なる世界。他の選択を行ったことにより枝分かれした、いわゆるパラレルワールド的なものですね」

・・・なるほど。

つまりは、？根源の渦？というわけか。

「ふむ、というよりそれしかこの場合考えられんな。

実際私とセイバーは経験のあることだからしっくりくる」

サーヴァント故の考え方ではあるが事実上そう考えるしかないのは悔しいがアーチャーと同意見だ。

「ちゅうことは帰る方法は本当にあのロストロギアのみってことやね」

「そういうことになるわね。

ロストロギアというものが何なのか私たちにはわからないけど・・・」

説明を求めるかのような遠坂の視線に、八神さんは軽く自分の部下であるテストタロッサさんを横目に見る。

「その説明は後ほど、ハラOWN執務官がするから安心してや？」

「とりあえず君たちの事情を把握しておかないと何も進めないし・  
・何でも良いから君たちがこの世界に飛ばされた原因になったって  
いう、あの深紅の宝石について何か知っていることはあるかな・  
・」

テストロッサさんが言いたくないなら強制はしないといった感じで  
そう言う。

遠坂はこちらに目配せをすると意を決して事の経緯を話した。

皆でシュバインオーグの遺産であるあの宝石を探していたこと、  
シュバインオーグの日記によればそれがメタスタシスと呼ばれてい  
ること。メタスタシスは転移魔法の結晶であり、それが発動する時  
には世界が危機に瀕している時だけだということ。

話を聞いている間、機動六課の四人は終始無言で聞き入っていた  
がその表情は時がたつとともに陰しくなっていた。

どうやら全部とは言わずとも、ある程度は少なくとも普通ならば  
信じることが出来ないはずのこのおとぎ話のような話を信じてくれ  
ているようだ。

「つまり士郎君達は、この世界の危機を察知したロストロギア・  
・メタスタシスに選ばれてこの世界まで飛ばされたってこと？」

「・・・ああ、そういう事になるようだ。俺はともかく遠坂やセイ  
バー、アーチャーは俺たちの世界では一流と呼ばれる人間だ。特に  
セイバーとアーチャーは英雄と呼ばれているほどの能力を持っている  
から、呼応しても仕方がないと思う」

そんな俺の返答に八神さんはしばらく思案した後、

「よっしゃ、それならうちらと組まへんか？」

いきなり笑顔でそんなことを言いやがった。

——なんというか、初対面にしてはなれなれしい隊長さんだな・  
・・・。

「我々がそちらと組むことによる<sup>メリット</sup>利点は？」

「うーん、せやなあ、うちらはこの土地に土地勘あるし、何よりうちらは軍人のようなもんや、どうせそういうことになるというなら動くことになる。」

その時、情報はこちらにも入ってくるし、それがロストログア関連となれば、機動六課の十八番やからな」

軍人のようなもの・・・か。だがそのような堅苦しさを感じることはない隊長達に、少なくとも嫌悪感は抱かなかった。

むしろ好感を抱きつつあった。

「（凜、どうするんだ？）」

どうすべきか思案していると、アーチャーが精神通話してくる。一応なりともマスターとサーヴァントの繋がりを保っている自分たちには精神のパスが繋がっており、それで何処にいても結界で強制

的に断たれていない限りは通じあう事が出来るのだ。

「（うーん、そうね。あちらの話は確かに利にかなっているわ。私たちだけでいろいろと行うには私たちはいくらなんでも無策すぎるっていうのは事実だし・・・）」

せめて、必要なものをすべてそろえて戦うというものならいざ知らず、急に飛ばされてこの状況だ。四人で動くには自分たちはこの世界のことも、戦うための備えもそのどれもが足りなさ過ぎていた。

後は問題として、彼女らが信頼に値する相手であるか、ということだ。

私たち魔術師は基本単独行動が多い。

代々から魔術刻印として、己が子に魔術を遺伝させ、幼いうちから人間ではない何かに仕立て上げる。

無論それは人のやることではないし、人を助ける力ではなくむしろ殺すためだけにしか行使できない力である。

破壊が時として人を救う力となる、そんなものは士郎には悪いが理想論であり、根本には結局、生み出すわけではなく、破壊するものだという確実な事実だけがある。

——ま、そんな理屈、普通の魔術師なら当然と受け入れるのだろ  
うが、残念ながら私とセイバーを除いた二人の正義の味方にとって、  
関係のないと否定するための非常識なものであった。

ではどうするか？

軽く、士郎を見やるとどうもこの意見に乗る気らしく、誰を相手にしようが信じてとも言わんがばかりの表情をしている。

・・・実際、だまされていると知っていても自分が損をするだけであれば衛宮士郎という人物は「それで助かる人がいるのなら」と、その力を行使し続けるであろう。

要するにそういう馬鹿なのだ、私の弟子は。

そんな士郎のことを嫌っていない私も私であり、既に開き直っている部分もある。

だがやはり呆れによるため息は止まることを知らなかった。

「たしかに、それによつての利点メリットはこちらに一方的に大きいでしょう。

ですが、情報が少ない今、私たちは何を信じればいいのか考えあぐねているような状況です」

意を決して言葉に出すと、士郎は予想通り驚きを顔にあらわしていた。

「と・・・遠坂！そんな言い方失礼じゃないか！！」

あまりにも予想通りすぎるその台詞に内心吹き出してしまいそうになるが今はそんな不謹慎なことをしている場合ではもちろんない。

無意識のうちに魔術師としての顔を作り、動揺している半人前以下の魔術師を師としていさめていた。

「じゃあ、どうやって信頼しろって言うのよ衛宮君？ まだであって間もない相手にこちらに一方的に良い案を出されて、それで「はい、そうですか。ありがとうございます」なんて言えると思う？」

私の勢いに押されてか士郎は本人でも無意識のうちに後退する。

「私たちは魔術師よ、士郎。魔術の原則は等価交換。

私たちはお互いに理があるという時にだけお互いに協力する。

そこに、仲間意識なんかないし、休戦を結ぶだけって話。

・・・この意味、曲がりなりにも魔術師を名乗るなら理解できるわよね？ 衛宮君」

最後に凄みを利かせるともうほとんど反抗する力すら抜けているようで、何か言わないと・・・と思いながらも言えないといった感じで視線を泳がせていた。

——ま、こっちも言い過ぎた部分はあるんだろうけど、これぐらい言わないと士郎はホイホイと誰でも信じてしまうのだから仕方ない。

そう自分に言い聞かせながら、軽く心の中でそんな士郎をほほえましく思った。



## 魔術師として（後書き）

かなり久しぶりの投稿となりました・・・^^；

文章自体はほぼノートに書いていたので問題はなかったんですがどういうお題だったけ・・・とかなり悲惨な状態に^^；すみマセン

## 懐かしい想い

そして追いうちに、やっぱりというかなんというか……。

「だからお前の考えは甘いというのだ、衛宮士郎。

いつまでも偽りの理想に溺れていないで君ももう少し成長すべきだ」

アンタもね。とおもいながらも口に出さず、少々そのころころ変わる表情を眺めた。

まったく、この二人は似ている。真逆に見える性格の根本は同じ二人。

それも当然と言ったら当然。彼らは両方“エミヤシロウ”という同一人物なのだから。

「はい、そこ。仲間割れしない」

追いつめられる士郎を見かねてか、しばらく様子見をしていた高町一等空尉が士郎とアーチャーの間に入った。

それは、一歩間違えれば自殺行為にも近い行為だったが、以外にもすんなりと、アーチャーは高町一等空尉が前に出た途端引いて見せた。

何故なら、高町一等空尉が杖を装備していたからだ。まだ、敵か味方かの判断もつかないこの状況、もちろんながら相手の能力もわからない今、ここで武力行使に出るのは得策ではないと判断したのだろう。

何よりそこまでする理由がない。

「まあ、遠坂さんの心配も当然のところやし、予測もしといたから気にせんといてや？」

そう笑顔で八神部隊長は笑って言い切った。

その笑顔が間違いもなく友に向けるような親しみのこもったものであり、微妙に戸惑いもしたがそれと同時に、この人は信頼に値する人物だと直感的に思う。

「それで、こちらに力を貸す代わりの条件は？」

魔術師として、わざとらしいまでに悪役を演じる。

きっと今士郎とアーチャーを見ればそんな私を見て苦笑いしているだろう、それぐらいまで演技はわざとだとわかるものにしておいた。

そして実際呆れながら苦笑いしている士郎とアーチャー、事の流れをただ見守っていたセイバーが同時に息をのんだ。

「簡単なことや。その間、うちの部下として働いてもらいたい、ちゆうことや」

八神部隊長の口からそう言葉が放たれた途端私と士郎の背後でサーヴァント二人が目が大きく見開いた。

「こちらにとっては手駒が増え、より楽に事件解決にことを運べる、そちらにとっては必要以外のことに駆り出されることはあっても本

来の目的とそのための情報が手に入る。

あーもちろん、その間は衣食住の心配もいらへんで？」

「どうや？という視線に顔に出さずに心中で頷く。

衣食住の分は、必要以外のことをさせることによる帳消しという事なのだろう。

そんなところにまで軽く気を回しているこの部隊長の下でなら、事はスムーズにいくだろうと、アーチャーには悪いが確信した。

「いいわ、その条件で協力関係ということで合意しましょ」

私が“休戦”ではなく“協力”といったことに反応したのか士郎の顔がやっと安堵に満ちてくる。

「そうか、受けてくれるんやな！ホンならハラOWN執務官」

「うん、了解。じゃあ部屋を移そっか。部隊長室で長話も何だし・・・  
・応接室に案内するからついてきて」

「（・・・いいのか？マスター）」

「（良いも悪いも、プラマイゼロの等価交換の原則にのっとったちゃんとした取引よ。・・・それに八神部隊長はぱっとみたところ高町一等空尉とハラOWN執務官もそうだけど、私たちとほぼ変わらなさそうだし、それにしてはベテランといっても過言じゃない。身を置く場所としては絶好な場所だし、なによりも、信頼に値するってところが一番のポイントね）」

「（ふむ、マスターがそういうのなら私に異論はないが、凜、気を抜くなよ?）」

「（アンタに言われなくても重々承知の上だから安心なさい。それじゃいきましょう?）」

先にハラOWN執務官について行った二人を追いかけるように二人で出ていく。

「ねえ、はやてちゃん」

「なんや?」

「簡単に信用しちゃっていいの? あっちの常識というものがどんなだかは分からないけど、あの英雄だって言うセイバーとアーチャー。確かに計り知れないほどの魔力を放っている。

そんな二人を使役しているっていうあの遠坂さんと衛宮君本人たちは自分たちのことを魔術師って呼んでいたけど実態は掴めないままだし……」

「なのはちゃんの不安はわからなくもないけどな。

あの四人はそういう安い人間とはちよつと違うと思うんよ」

「それは……どうして?」

なんとなく、懐かしく感じるあの四人。

だが、あったことはないはずの四人。

そして急に決まった協力関係。

話を鵜呑みにするにしてもほどがある彼らの事情。

たくさんの謎に包まれた人間がいきなり現れ、この世界の危機らやらを吟ずる。

それは、あまりにも信じることが出来ない、別次元の話であった。

「きっと、それはあちらも同じやと思う」

心を見透かされたようなセリフにハッとなる。

「なのはちゃんが慎重になっとなるのは分かる。せやけど、うちはあの遠坂さんの眼は信じてもいいと思ったんや」

「遠坂さんの・・・？」

「せや、さっぱりとしていてうちから見たってええ女や。

そんな彼女が相棒としているんや、あの士郎って言う少年も見た目通りのきつとどうしようもないくらいのお人好しに決まっとなる」

「うーん、そんなもんなのかなあ」

「そうやよ、きつと」

だが言葉とは裏腹に、心は彼らに不快感は覚えていなかった。

きつと、私もはやてちゃんと同じく、本当は彼らのことを信じて

いいと思っている。

だけど、管理局に努める公務員としての自分が失敗を出来る限り犯さないようにと過敏になる過ぎているのだろう。

「うん、じゃあ信じてみるよ。」

じゃ、私はフォワードの4人に状況説明だけ行って来るね。

・・・今日は時間ないし、この後は指定の時間までデスクワークってことで良いかな？」

「あーそやね。皆に伝えしてもらえるか？」

「了解、じゃあいつてくるね」

「はーい」

「いってらっしゃいです、なのはさん！」

「うん、ラインも頑張ってるね」

自分のことながら不器用だなと思いつつも、私とフェイトちゃんの緊急出撃により、待機させられていたフォワード4名のところに行かなくてはと待機所まで早足で向かう。

微妙に心に残った不安を振り切るかのように……………。

## 懐かしい想い（後書き）

どうでもいいのですが、自分が書くとなのはさんは他の方がよく書く同人の魔王ネタが少ないです。

少ないというかほぼないに等しいことだってあります。

まあ・・・自分があまり元々のキャラ性を失いたくないだけなのか  
もしもませんが・・・wでも逆にまじめ過ぎるような？とたまに思  
ってしまいます＞＜；



## 時空管理局

応接室に辿り着くや、4人を椅子に腰かけさせ自分も座る。

椅子に腰かけた途端説明を促すかのような視線がこちらに一気に向けられ、内心苦笑する。

「さて、何から説明すればいいかな？」

だからその視線に逆に問い返してみた。

必要以上の説明をすることはお互いにとってマイナスだから。

「まずは時空管理局がどんな組織なのかについて」

「時空管理局っていうのは………うーん、そうだね。

時空を越えた法の番人ってところかな？」

「法の番人……裁判官か？」

「うん、そういう事もやっている。簡単にまとめると警察官の代わりに、軍人が犯罪者を捕え、一緒に組織として裁判官の役割も行っているんだ。

ただ一つの世界だけを守る法の番人ではなく管理している世界……あー魔法文化がある世界のことだね。そのすべてを統括しているの」

簡単に言ったつもりだったが士郎の頭の中は既に混乱状態らしく頭がいろんな方向へと振られていた。

だが当然と言うべきか残りの3人はさほど驚きもせずに言葉の意味を受け止めた。

「ふむ、君らは……機動六課は主にその大きな組織の中で一体どういう系統の人間なのだ？」

凜の背後で待機していたアーチャーがマスターの言葉を代弁するかのように質問した。

どうやら彼はある程度既に理解しているようで確認のためといった感じの訊き方である。

彼は一体何者だというのだろうか……？ 使い魔と聞いたがそれだけでは説明がつかないような気がする。

「正式名称は『古代遺失物管理部 機動六課』。ロストログア関連の危険な任務を扱う古代遺失物管理部の機動課……まあ、実動隊のことですね。その第六の部隊という事になります」

「ではロストログアというものは？ あの大紅の宝石……凜が言うにはメタスタシス……でしたっけ、あれもロストログアと呼びましたよね」

凜とした物言いは私の部隊、ライトニング部隊副隊長であるシグナムに似ている気がして、微妙に呆けてしまう。

「……どうしたのですか？ テスタロッサ」

おまけにその呼び方だ。初対面だというのにいつも傍にいます

な錯覚さえ覚えてしまうその空気に、ついに背筋が無意識のうちにピンと立つ。

・・・とりあえず、質問に答えないと・・・。

微妙に焦りながらとりあえず謝ろうと口を開く。

「あ、すみません。えーとロストログアについて・・・でしたね。  
ロストログア

古代遺失物・・・過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で作られた遺産の総称です。多くの物が現存技術では到達できていない超高度な技術で作られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねないほど危険な物もあり、大抵発見次第時空管理局が嚴重に保管することになっています」

「たしかに、私たちを並行世界へと飛ばすほどの力・・・別の使い方を持た力として考えるとそれほどの膨大な魔力、危険以外の何物ではないわね」

呑み込みがとても速いようで彼女は事実として自分の言葉を受け止め、思考する。

「なあ、そもそも何故そんなものが遠坂の家にあったんだ？」

髪をかきあげ「もう、わけがわからん」とても言わんばかりの表情で士郎が疑問を発する。

その行動は年の割に子供っぽくて微笑ましい。

「さあ・・・。そんなことキシュアに訊いて頂戴」

投げやりな言葉に士郎は眉間にしわを寄せる。

「じゃあ最後の質問だけど・・・ハラオウン執務官」

「あ、はい。なんででしょうか？」

「答えたくないなら答えなくてもいいけど・・・、一応訊いとくわ、あなたは私たちの話を信じているのかしら？」

そう、それがもつとも彼女等にとつても私たちにとつても重要なことだろう。

協力関係といった以上信頼がおけなければ話にならない。

若いなりとも、いや、この場合はだからこそというべきか。

慢心しているような言い方ではあるが、この年で執務官となっている私がどう思っているのか知りたいという事であろう。

意を決して、頭の中で言わねばならぬことをまとめる。

今必要なのは彼女が望んでいる言葉ではなく、私の思っている“真実”である。

「そうですね、完全には正直言えません。そちらにはそちらの常識があるように、私たちにも私たちの常識がありますから。ですが・・・私は信じていますよ。そして部隊長であるはやても信じているというのだから、私は部隊長を信じて戦えます」

「・・・そっか」

その声にはわずかばかり驚きが混じっているのを感じる。

「なら、私も信頼してもらえよう最善を尽くしましょう。  
それで構わないわよね？アーチャー」

凜が自分のパートナーをからかうような笑みを向けていた。

軽くアーチャーの方を見ると気まずそうに、どうにかして凜の視線を避けようとしていた。

どうやら一番私たちを疑ってかかっているのは彼らしい。

「マスターがそういうのなら構わない、と私は言ったはずだが・・・」

しどろもどろに答える様はどうやらあのからかうような笑みは彼らにとって尋問にも近いものだったらしい。

セイバーが少しそんなアーチャーを見て微笑んでいることが少し不思議であり、その事からも見て取れた。

だが一人、士郎は難しそうな顔をしてアーチャーを睨みつけた。

「アーチャー・・・お前、まだ疑って・・・！」

「だまれ衛宮士郎。サーヴァントは自分のマスターを第一に考えねばならない。——ならば、最初は疑ってかかるのも当然の処置というものだ」

「なにっ・・・!？」

このまま放置していれば身内同士でまたもや争いかねないと思い止めにかかるうと立ち上がると、それよりも前にセイバーが二人の間に入った。

「シロウ、アーチャー、いい加減にしてください。テストロッサが困っているでしょう。」

それにシロウ、今回はアーチャーが正しい。私たちサーヴァントは主なしでは現界することすらかなわない。ならば出来る限りマスターに降りかかる火の粉は我々が払わなければならない」

セイバーに真顔で責め立てられ、士郎の気が薄れていくのを感じる。

「・・・わかってはいるんだが・・・でもな」

「ストップよ衛宮君。そんなことは私もセイバーもわかっている。・・・アーチャー、アンタもよ。士郎が反抗すること知っててそう仕向けたでしょ」

アーチャーの視線が「最初は君が仕向けたものだろう・・・」といつている気がしたが、凜はそれを見向きもしない。

微妙に同情したく思うが、口に出したらまたいろいろなことになりそうな気がして、慌てて口を噤む。

「面目ない。たしかに私も大人げなかった。すまないなハラオウン執務官」

少し凜に不満は残っているようだったが、こちらに素直にアーチャーが謝ってくる。

それを見て気にし続けるのが馬鹿らしく思ったのか、士郎もすまないと頭を垂れた。

「い……いえ、昔……知り合いにもよくケンカし始める方はいましたし……慣れていきます」

笑顔で返すと士郎は安堵のため息とつきながら、笑顔で返してくれる。

何とも無邪気な少年だ。

「とりあえず、私たちは機動六課でお世話になる間はあなたたちの部下だし、全面的に協力する。それでOKよね？ ハラオウン執務官」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。

後、あなた達は局員ではないんですから堅苦しく階級で呼ばなくていいですよ。はやてやなのは、他フォワードの子たちも気にしないので」

「そう？じゃあそうさせてもらうわ、よろしくフェイト」

「はい、凜」

中途半端なところまで上げられた手に、期待に答えるように少し強く、だが優しく握る。

この時、魔術師とサーヴァントを名乗る二人と二騎は正式に機動六課の仲間となった。



## 時空管理局（後書き）

どうも、連続で投稿するという珍しいことが起こっているのは・・・  
今が冬休みだからです（爆）

ところで、皆さんの小説のように改行はした方がいいでしょうかねえ

あまりサークルで描いている時も気にしたことがなかったので、どうするべきかと。

ちなみにサークルでもF a t e xなのはやっています（ただなのはA・Sの頃です）

この前4章まで終わったところ・・・といった感じだったり^^;

蛇足で言うところの小説はこの段階でちょうど個人的に1章が終わったという気分です。

## 善は急げ？

その後軽い雑談をしながら、客室に案内し、一旦4人と別れた。

話している限りは普通の人間と変わらないし、特に凜と士郎とは年も近いことで親近感は湧いた。

帰りに部隊長室に寄り、はやてに報告を済ませ自室に戻る。

「あ、フェイトちゃんおかえりー」

先に自室に戻っていたなのはレイジングハートと共にフォワードメンバーの身体チェックを映像でこれでもかというぐらいに入念に行っていた。

今日の午後の訓練が中止となりデスクワークに従事して午後を通したフォワード四名はまだ凜達のことを知らない。

たぶんなのはから報告としては聞かされてはいるだろうが、こればかりは顔を合わせない限り何とも言えないところだろう。

「ただいま、なのは」

「どうだった？あの四人」

映像を切ってベッドに腰かけるとなのははさっそくそう切り出した。

「そうだね。私はそんなに心配いらないと思うな。こちらへの協力

も約束してくれたし・・・何よりあの人たち強いと思うよ」

見ている限り士郎と凜はただの一般人にしか見えない。

だが、それは一般人から彼らを見たときの感想だ。

私やなのはから見れば感想はまた変わってくる。

彼らは普通に動いているようで、ちょっとしたはずみには戦闘に慣れた余韻を残すかのような動作を無意識に行っている。

彼らがそうなのだからセイバーとアーチャーは論外だ。

剣と弓を持たせれば彼らに敵うものがどれほどいるだろうか。

それほどまでの気が全身から滲み出ている。

だがその一方で彼らは自分の力に酔いしれたり、傍若無人な態度を取ることもない。

自分の力を誇ることはあれど、溺れることはないのだ。

敵に回せばかなり厄介であるが、仲間となるとこれほど強いものはいないだろう。

少なくとも私は彼らを信じてみたい。

疑ってばかりでは何も進めないと思うから。

「・・・そっか。それじゃあ明日。模擬戦でもやってみようか」

「うん、そうだね。……ってええ!？」

彼女等のことを考えながらなのは言葉に相槌を打とうとすると、急にこの場で聞くはずがない言葉が耳に飛んで来、頭が真っ白になる。

「フワード四人と部隊長チーム四人、それと士郎君達四人。これをごちゃまぜにしてチームを二つに分けての大型の模擬戦」

「なっ……なんで、そんないきなり!？」

それ以前に凜達はそんなことを承認するのであろうか。

「正直に言うとな、彼女等の戦力を把握しておきたいんだ。はやてちゃんとフェイトちゃんが信じるって言うんだもん。私も信じることにする。そのためには一緒に地で戦えるようにどれだけの能力があるか知っておきたいの」

それは……たしかに。

「と……とりあえず、その前に4人が良いかどうか訊かないと……」

「ああ……そっか。じゃあ今から行こっフェイトちゃん!」

「え……い、今から……!？」

やる気満々のなのはに半ば引きずられるように、今までいた客室へと向かう。

我が友ながら言い出したら行動に移らないと気が済まない困った友達である。

もしかしたら今日一番かもしれない青息吐息を、腕を掴んで私を引っ張っていく友人へと送った。

だが、そのまっすぐな所は私たちにとって憧れの対象的なところであり、頼りにしている部分でもある。

そんなのは好きだし、そうじゃなければなのはじゃない。

かつてと変わらない、そんな友人の振る舞いに、ため息をつきながらも悪くないと心中思う。

「模擬戦・・・？」

急に高町さんが放った言葉が頭の中で渦を巻き、オウム返しに呟いた。

「つまり、私たちの戦力を知りたいってそういう事？」

「うん、そういうこと♪」

上機嫌で言う高町さんの後ろでテストロッサさんが苦笑する。

「ごめんね急に。なのはがどうしても皆の能力が知りたいって」

本当に申し訳なさそうに頭を下げるテストロッサさんを見るあたり、このようなことは良くあることらしい。

「ふむ、そういうことなら私は構わんが・・・どうだ？凜」

「私も最近あまり実戦なかったし・・・いいんじゃない？そっちの二人が良いのなら」

ニヤリとしながら遠坂がこちらを見る。

・・・こんなときまで、コイツは俺の反応を見て楽しんでいるのか。

「私は構いません。ですが凜と士郎までこのような事で戦う必要は・・・」

「あーいや、俺も遠坂がやるってんなら模擬戦に参加すること自体は構わないし、セイバーもそこまで気にしなくていい。ただ・・・」

「ただ？」

「そんなことしたって・・・意味はあるのか？」

「え、どうして・・・？」

心底不思議そうに見る高町さんとテストロッサさんの視線に逆はこちらがおかしなことを言っている気分になる。

「まあ、たしかに坊主のいつていることに一理はある。

つまり衛宮士郎が考えているのは、模擬戦とはいえ戦うという事は

お互いを傷つけることになる。そんなことをしてもし、すぐに戦うという事になった時動けなくなっては本末転倒だ。というところか」

「・・・む、だから人の心を読むなんての・・・」

何処まで忠実に俺の考えを言い当てるんだよ、こいつは。

「あー大丈夫だよ。

非殺傷設定だし、いざという時は出動できるぐらいの力は残してその時点で出来る限りの全力全開で戦おうってことだから」

・・・非殺傷設定・・・なんだよ、それ。

「・・・あ、もしかして。

士郎達の世界ではデバイス自体が存在してないっていうし・・・もしかして、そういう能力を魔力ダメージだけにそっくり変えるという事は出来ないのかな？」

いや、逆にそんなことできるんですか、この世界の魔導師という奴は。

## 善は急げ？（後書き）

今日の更新はもう一話分続きますー。

ここでそのまま繋げてよかったんですがいつもより長くなったのでいつも文章量でしていった方が個人的に良かったので^^;



## 前夜祭・・・？

デバイス・・・っていうのはたしか、高町さんとテストロッサさんが持っていた武器のことらしいが・・・。

「・・・む、わけがわからなくなってきた」

「士郎がない頭で一氣にたくさんの物事を考えようとするからよ」

ここまで常識が違うというのに未だ平然とした顔で聞いていた凜はなんだかわいそうな物を見るような眼でこちらを見ている。

「じゃあ・・・遠坂は理解しているのか？」

「当たり前でしょ？それに私たちも厳密にはできなくもないわよ。非殺傷設定っていうものじゃないけど」

「ん、そうなのか？」

——そんなの初耳だぞ・・・。

「凜、私たちも士郎と同じくそのような方法知らないのですが」

「あーうん、それは士郎もだけど知らないのは仕方ないわ。

こういうのは聖杯戦争ではまず使わないものだし、使える魔術師は極僅かだもの」

「極僅か・・・って、それじゃあ俺は出来る筈がないがセイバーやアーチャーだって同じじゃないか」

「問題ないわよ。私一人が使えば自分にだって相手にだってかけられる魔術だから」

・・・なるほど。

「さすが遠坂だな」

「べ・・・別に、これぐらい一流を魔術師を名乗る者として当然なんだから・・・！」

「そっ・・・そうか」

——・・・あれ、遠坂なんか怒ってるのか・・・？顔が少し赤いような・・・。

「えーと、問題は解決したのかな？」

事の推移を見守っていた高町さんが控えめな感じで言う。

「あ、はい。そのようです」

「そっか、じゃあ4人とも参加してくれるってことかな？」

「ええ、私たちとしてもそちらの戦力がどれほどのものか知りたいと思っていたところだし・・・という形式の模擬戦なのかしら？」

「大雑把に言うとな機動六課の前線メンバー、スターズ隊とライトニング隊合計8名に士郎君達を加えて二つのグループに分けての混合大型模擬戦だよ。ルールはいたって簡単で仲間以外を非殺傷設定で

全員撃墜したグループの勝ち」

つまり、誰が誰と組むなんてことは分からないわけか……。

「わかったわ。グループ分けはそちらに任せるけど、その模擬戦いつやるのかしら？さすがに今からは勘弁してほしいんだけど」

「あそれはご心配なく。

模擬戦は明日の朝からですので、今日はもう遅いですし、夕食を取って休んでください。今日はいろいろあって疲れているでしょうし」

「そうですか。

……そういえば、夕食といっても何処で食べればいいのでしょうか？」

遠坂がそう言うのとテストロッサさんがしまったといった感じで、申し訳なさそうに、頭を下げる。

「……フェイトちゃん伝え損ねてたんだね」

高町さんが苦笑しながらテストロッサさんをからかう。

「……そうみたい。ご……ごめんね、皆」

どうやら本気で忘れていたらしい。

「最初から聞かなかったこちらが悪いですし、気にしないでくれテストロッサさん」

「ありがとう士郎」

「あ、じゃあ折角だし、私たちと一緒に夕食どうかな？  
私たちも一度自室に寄ってから夕食の予定だったし」

と、いきなり高町さんがそう提案してきた。

「そうね。衛宮君問題ないわよね？」

「問題あるわけないだろ？良かったら是非こちらからお願いします」

「うん、じゃあ一緒にいこ？あー後、ヴィヴィオっていう私の子も一緒に食べるから」

「あ、ああ……。……。って子供!？」

「え、あーうん。私その子の保護責任者なの」

「そして私がなのはとヴィヴィオの後見人だよ」

「へ……。へえー」

高町さん俺たちと変わらないぐらいの年で養子なんているのか・  
・、すごいな。

「じゃあ、ヴィヴィオ連れてくるからフェイトちゃんと待ってて！」

言っと、高町さんが部屋を出る。

「なんか、テンション高かったな……。高町さん」

「・・・たぶん、模擬戦のこと、士郎達が承諾してくれたからだよ」

「そうなのか？」

「うん、なのはは戦技教導隊の教官だもん。  
興味あるんだよ。皆の実力に」

「それでは、手を抜くわけにはいきませんね。  
私も非才の身ですが、全力でお相手しましょう」

いや、セイバーが非才だというのなら俺はいったい何なんだろう  
か？

「とりあえず、お互い頑張りましょ？フェイト」

「はい！まだチーム分けされていないので敵か味方かわかりませんが、どちらになっても模擬戦とはいえ本気でやらせてもらいます」

笑顔で言い合う二人は何となく生き活きしているようにも見える。

遠坂とテストロッサさんは結構気が合うところがあるようだった。

・・・性格は全然真逆といっていいくらい違うような気がするが。

それから数分して高町さんがテストロッサさんよりも少し深い金  
髪の6歳ぐらいの小さな女の子を連れてきた。

深紅色の右目と碧色の眼が無邪気にこちらを見つめている。

たしか、こういうのをオッドアイというのだったっけ……。初めてみるな。

「ヴィヴィオ、この人たちが今日からしばらく六課でお仕事することになった人たちだよ。ほら、挨拶してみようか？」

「高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします」

幼さの混じる可愛らしい声で挨拶してくれる。

「ヴィヴィオか、可愛いな。俺は士郎、よろしくな」

「遠坂凜よ。宜しくね、ヴィヴィオ」

「セイバーです。よろしく」

「アーチャーだ」

「よくあいさつで来たね、偉いよヴィヴィオ」

テストロッサさんがヴィヴィオの頭を優しくなでる。

「うん！」

「じゃあ行こうか皆」

「ごはん♪ごはん♪」

ウキウキで高町さんの手を取り、歩き出すヴィヴィオの横をテスタロッサさんが歩く。

その後ろを4人で付いて行った。

## 前夜祭・・・？（後書き）

タイトルが何故か今日は？がつく、どうもデュオです。  
人数が多いと頭の中が混乱してきて悲惨なことに・・・って今から  
もっと増えるんじゃない（あ

ところで、話はかわりますが、昨日佳音様の小説を読みに行きました。

子供士郎、アチャかわいいなんてつい思いながら読んでいたのですが

そういや以前友人から

> i 1 6 3 6 7 — 2 2 6 2 <

> i 1 6 3 6 8 — 2 2 6 2 <

こんな画像をもらっていたのを思い出しました。

どっちにしろかわいいな（爆



## 主夫衛宮 前篇

その後・・・俺たちは何も問題なく食事をして部屋に戻る・・・はず、だったんだが・・・・・・・・・・。

現在、何故か俺はエプロンをつけて機動六課厨房に立って料理をしている。

「あ、これおいしい♪」

上機嫌で食べてくれるテストロッサさん。

「あーほんとだあー!!」

それと同じく、気に入ってくれたみたいでテストロッサさんとヴィイオちゃんと一緒に食べる高町さん。

「(もしかもしや・・・、ごつくん。) ふむ」

あー・・・、そして一番の原因はこいつだ。我らが腹ペコ王様。

こくんこくんと頷きながらいつものように食べている。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。何故、こんなことになっているのか。

それを説明するに当たっては1時間ほど遡らなければならない。

「はい、到着だよ」

学園の食堂と同じかそれ以上の大きさの部屋には様々な料理の匂いがしみ渡っており、食欲をそそる。

沢山の部隊員達がそこで食事をしていた。

「4人とも何か好き嫌いはある？」

空いた席に着くやテストタロツサさんが唐突に聞いてくる。

「いや、俺は何でも大丈夫だよ」

「私も」

「・・・凛に同じく、私もある程度普通の食事ならば」

・・・いや、アーチャー。何処で食べてもそんなお前が想像するようなものは普通の食堂では出ないと思うぞ。

少なくとも、どっかの駄目駄目女教師の料理とかじゃない限り。

「私もタコ以外ならばなんでも・・・」

「あ、セイバーさんタコ駄目なんだ？」

「ええ、まあ・・・ですが、それ以外なら嫌いな食べ物はありません」

ん」

「そっか、じゃあ適当に頼んでくるけど、良いかな？」

テストロッサさんは立ち上がり、確認する。

「あ、すまん。気にしなくても俺が注文ならしてくるぞ？」

「ううん、いいの。」

まだ慣れてないだろうし、私が人数分頼んでくるから」

「えーと、じゃあお言葉に甘えさせてもらうな」

「うん、じゃあ行って来るね」

「ありがとね、フェイトちゃん！」

それから数分後テストロッサさんが4人の機動六課の隊員を連れて戻ってきた。

「おかえりーフェイトちゃん。」

あ、スバルたちも今から夕食？」

「はい！えーとなのはさん・・・そちら方々は・・・？」

4人の視線がこちらに釘付けとなる。

特に高町さんに？スバル？と呼ばれた女性はまじまじとこちらを興味津々に見つめてくる。

「今日から機動六課に協力してくれることになった民間協力者の方々だよ。」

さっき、話はしたよね？」

高町さんが説明すると、スバルさんはパンつと手を打ってなるほどといった感じで敬礼してくる。

「あ！こちらの方々がそうなんです！初めまして！！スターズ隊フロントアタッカーのスバル・ナカジマ二等陸士です」

「同じくスターズ隊所属センターガード、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング隊所属ガードウイング、エリオ・モンディアル三等陸士であります！！」

「同、ライトニング隊フルバック、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

青い髪をショートに切り揃えた、ムードメーカー的なりの子がスバル。

オレンジ色の長い髪をツインテールにした、4人の中で一番生真面目そうなのがティアナ。

この中で唯一の男であり、紅色の髪を男にしては長めながらさっぱりとそろえている十代前半と思える少年がエリオ。

エリオと同じ年だと思われるピンク色の髪をショートにカットしているほんわりとした空気を持つ少女がキャロ。

・・・ちなみにルシエさんの頭に何か生き物がのっているが・・・あれは一体・・・。

つい、ルシエさんの頭に乗っている生き物をちら見していると、視線が合う。

「キュクル〜」

かわいい叫び声をあげるといきなりその小さな姿に比例する翼で飛ぶ。

「あ、この子は私の竜でフリードリヒといいます。  
フリード、皆さんにご挨拶♪」

「キュクル〜♪」

軽く頭を下げながら、またフリードリヒは喉を鳴らすように叫ぶ。  
というか・・・竜の子だったのか。

「あーえと、俺は衛宮士郎。今日から世話になることになった。よろしくな」

「遠坂凜です。よろしくね」

「アーチャーだ」

「セイバーです」

「アーチャーさんとセイバーさん。変な名前だねー！」

呑気に声を上げるナカジマさんは、言った瞬間ランスターさんに軽く頭をたたかれている。

「この、バカスバル！失礼でしょーが！！」

「い・・・痛いよティアー！」

「すみません、この子いつもこんな感じで・・・」

「あ、いえ気にしないでください。

そういえば何処かの誰かさんも初めて名乗った時そのようなこと言ってた気がしますし・・・」

と、セイバーの視線がこちらへと向く。

「・・・む、あの時はその・・・すまなかった」

い・・・意外とセイバーそういう事も覚えてるんだな。

とりあえず、セイバー相手に失言は出来るだけしないようにしよう、うん。

「あーそういえば、皆。

明日の訓練のことなんだけどね？模擬戦をやることにしました」

「模擬戦・・・ですか？いつものように、隊長達と私たちフォーワード4名の・・・」

ん、うっすら今危険な香りが漂ったのは気のせいか・・・？

「ううん、今回は隊長達とスバル達、そして士郎君達全員での模擬戦だよ」

だから今回は混ぜこぜである程度平均的なパラメータ振りかな？」

「そっ・・・そうなんですか。

では、衛宮さん達も模擬戦に参加するんですね」

エリオがポツリとつぶやく。

「あ、ああ。精一杯頑張るんでよろしくな。それと丁寧語じゃなくて良いぞ？ 同じ男同士仲良くしようぜエリオ」

「は、はい！ 士郎」

笑顔で返すと、そんな俺を見ながら遠坂がニヤける。

「む、何だよ・・・？ 遠坂」

「いや、別に？」

・・・嘔吐け。絶対何か企んでいるだろ・・・。

そんな話をしている間に料理が運ばれてくる。

「そういえば、皆は料理頼んだの？」

「いえ、まだです」

「じゃあよかったら一緒に食べよ？  
席は丁度4人分空いてる事だし」

「「「はい！！」」」

それからまた数十分たち、ナカジマさん達の分の料理が届いた。

・・・それはいい。だが・・・その・・・。。

「すごい量だな・・・ナカジマさんとエリオ・・・」

山盛りにもほどがある量について、そんな感想が口から洩れた。

正直、セイバー意外にこれほどの量を普通に平らげるような奴がいるとは・・・思っていなかった。

「えー！？これぐらいまだ少ない方だと思うけど・・・」

「いつもこれぐらいは食べてます！」

ちなみにセイバーは俺たちと一緒にナカジマさん達の分が届くまで食べるのを待ってくれていたが、正直に言えばいつ、我慢できずに食べてしまうか心配で心配で気が気でなかったのはまた別の話である。



## 主夫衛宮 前篇（後書き）

続きますw

というより、また長くなりました^^;

今回は結構皆テンションが高いです（苦笑

## 主夫衛宮 後篇

ちなみにセイバーの食欲をしらぬテストアロツサさんは並盛で頼んでいる。

・・・悲劇が待ってないといのだが。

そう思いながらも自分の食事に手をつける。

「そういやセイバーはこういう食事はあまり経験なかったよな？どうだ？」

「そうですね。新鮮ではあるのですが・・・何となく物足りない気がします」

「それは・・・量的な意味で？」

途端、むっと唸ったかと思うと、顔を少し赤らめた。

「失敬ですね・・・たしかに量的な意味もほんの少しあるかもしれませんが」

あ、やっぱりあるのか。

「私が言っているのは味付けなどのことです」

「まあ・・・そうよねえ、毎日衛宮君の料理を食べているセイバーにはこういう軍食はあわないのかもしれないわ」

「ん、そういうものなのか？」

「騎士王殿は今やグルメマスターの称号がよく似合うほど味に凝っているからな・・・さてさてどうする気だ衛宮士郎」

いや、何でここで俺に振るんだよ。

「どうするったって・・・どうすればいいんだ？」

気付けばいつの間にか皿をからっぽにしたセイバーがこちらをじっと見ている。

「あ、士郎君料理上手なの？」

そんな会話を聞いていた高町さんが話題にのってくる。

「まあ、ある程度料理は出来るが」

「シロウの料理はどれも凝っていて美味です」

「まあ・・・たしかに和食は私の上かもね」

と、普段ならとても喜ばしい遠坂の評価も今はプレッシャー以外の何物でもない。

「へえ、二人とも料理上手なんだ」

テストロッサさんまでもが興味津々に耳を傾けていた。

「ヴィヴィオ、士郎お兄さんの、料理食べてみたいな」

「・・・え？」

「あ、私も食べてみたいかも」

「うん、私も興味あるなあー」

「あ、私も食べてみたいですー！」

「「私も（僕も）」」

しかも、今まで必死に大盛りのナポリタンを食べていたナカジマさんとエリオ、そしてそれを見ながら苦笑していたランスターさんとルシエさんまでもがそんなことを言う。

「べ・・・別に料理するのは良いんだが・・・場所や材料がないし」

「それなら問題ないで!!！」

「・・・んなっ!？」

いつの間にか背後に八神さんが立っていらっしやった。

「は・・・はやてちゃんいつの間に・・・」

「いや何、うちも今から休憩がてら夕食にしようと思うて来てみた  
ら、なんやなのはちゃん達のところが騒がしかったんでなあ」

それでも出来れば普通の現れてほしかったぞ・・・。

「あ、それではやて問題ないってどういう事？」

「簡単な話や♪ここの厨房を使えばええんやよ」

「・・・はい？」

今、何かおかしなことをおっしゃられませんでしたか・・・？部  
隊長。

「別におかしなことなんか言っておらへんよ、士郎君」

「皆して人の心を読まないでくださいっ！  
だいたい皆さんの調理の迷惑じゃないですか」

「あーそういうことなら大丈夫やよ♪」

何が大丈夫なんだろう・・・。

「おばちゃん！ちよつとここにいる士郎君が皆に料理振る舞いた  
いっていつとるから厨房使わせてえな！」

「はいよー！はやてちゃん！！」

「おおきに！！」

・・・。

部隊長殿はこういう時でもフリーパスですか、そうですか。

「というわけや！」

「いや、何がというわけなんだよっ！」

「・・・シロウ、出来れば私はシロウの料理を食べたいです。  
・・・駄目でしょうか？」

いや、駄目じゃないんだけどさ・・・、セイバー。

そんな皆で期待色の眼差しで見ないでくれ・・・。

「ここで期待に答えられなかったら男として失格だぞ、衛宮士郎」

「うっせえ！ならお前がやればいいだろう！！」

「残念ながら彼女等は私ではなく衛宮士郎の料理をご所望なんでな」

「あら、アーチャーがつくっても私は良いけど」

「・・・謹んで遠慮させてもらおう、凜」

ところで・・・遠坂もまだ食う気なのか、その言い方は。

「・・・はあ、じゃあお言葉に甘えさせてもらって簡単な料理を作らせてもらうけど・・・何人分作ればいいんだ？」

言った途端、セイバーやヴィヴィオはもちろんながら高町さんやテストロッサさん、フォワードの4人とはやてまでもが手をあげた。

まあー当然ながらアーチャーが手を上げることはない。

「じゃあ、少し待っててくれな」

というのがだいたいの経緯だったりする。

その後、結局何やかんやいいながらサバの味噌煮や、生姜焼き、卵サラダなど、あまり時間をかけずに済む料理で数種類作って持っていたわけだ。

ちなみにヴィヴィオにはお子様ランチよろしくオムライスを作ってみた。

皆の反応もなかなか好評で嬉しいことこの上ないのではあるが、些か過大評価しすぎな声さえも飛んでいる。

「でもホント上手やねえ、士郎君。

特にこのサバの味噌煮。こっちじゃ作る人あんまおらへんから久しぶりに食べたわ」

「あ、そうなのか？」

「うんーこういうのは日本特有の和食だもん、今じゃ珍しく感じるよ」

と、地球の日本育ちの御二方。

「でも、本当においしいな、はやてと結構料理の腕前で張り合うんじゃない？」

「うーん、どうやろうなあ。最近はどうやって食事は気軽に作らずとも食べれるから料理なんてずっとしとらんし」

微妙に敗北感を覚えたのか、八神さんが明後日の方向を見ている。

「いや、俺なんかまだまだだよ。中華料理は作ったことないし」

「そうなんか？」

「ああ、だから中華料理は遠坂が得意だよ」

「何故、だからなのか分からないけど・・・、そうね。私は和食より洋食の方が得意だし」

興味深げに俺と遠坂を八神さんが見る。

「そや、士郎君。六課にいる間、厨房でも働いてみんか？」

「え・・・いや、それはちょっと・・・」

いきなりの八神さんの発言に少しびっくりする。

「ちょっと・・・なんや？」

「いや、何というか・・・それは勘弁してもらえたらと」

「「「「「えー！」「」「」「」」」」

途端六課メンバーからのブーイングの嵐がこちらへと雨のように注がれる。



・・・正直、こちらが「えー・・・」な気分なんです。

「ちなみに士郎君に拒否権はなかったりするんやけど？」

「・・・なっ!？」

「機動六課にいる間は、士郎君もうちの部下やで？上官の命令は絶対や♪」

「・・・」

「・・・なあ、八神さん」

「はやてでええよ、何や？」

「そう言うのって職権乱用というんじゃないか？」

「当然の権利ってもんやよ♪」

「・・・この無理やりまでな押し通し方・・・遠坂と同じ匂いがするぞ・・・」

なんて口が裂けても言えません、はい。

この日から、しばらくの間俺、衛宮士郎は半ば強制で機動六課の厨房を受け持つこととなった。

ちなみに今まで料理を作っていたおばちゃんは掃除係にしばらく  
兼勤だとか・・・。

無茶苦茶だな・・・おい。

## 主夫衛宮 後篇（後書き）

さて、番外編に近いのりでしたが、何とか夕食の乱終了・・・ん、もしかしてこれが始まり？

ちなみに何度も士郎だというのに呼び方を「なのは」「フェイト」「スバル」にしてしまい打ち直す羽目に（苦笑

そして、はやて無茶ぶりです^^；

## 虚空ノ双刃

「それじゃ、明日は模擬戦、士郎君達もよろしくね」

食堂で各自解散という形で私とフェイトちゃんはヴィヴィオを連れて部屋に戻った。

現在ヴィヴィオはお腹いっぱいになって既にベッドで寝ている。

それにしてもはやてちゃん、悪ノリが過ぎるよ、とつい思い出して苦笑してしまう。

「なのは、明日の模擬戦のグループ分けは決まってるの？」

「うん、決まってるようちよっと待ってね」

レイジングハートに頼み、バルディッシュへとデータを送信する。

それを一通り眺めると、少し心配そうにフェイトちゃんはこちらを向いた。

「ねえ、なのは・・・これ、大丈夫・・・なのかな？」

「訊くと思ったよ」

「え、じゃあどうして・・・！？」

「私もこの選択は大分迷ったんだけどねえ」

何が問題か、というのは結構簡単な問題。

私がチーム分けするにあたっての人選である。

1組目のメンバーは私、高町なのは、シグナムさん、スバル、キヤロ、遠坂さんとセイバーさん。

2組目はフェイトちゃん、ヴィータちゃん、ティアナ、エリオ、士郎君、アーチャーさん。

さて、問題なのは二組目の士郎君とアーチャーさんなのだ。

今日会ったばかりの私たちでさえよくわかるぐらいに、この二人は仲が悪い。

いや、ただ仲が悪いという言葉だけでは言葉足らずだろう。

お互いの存在を認められないといった感じなのだ。

人ではない何かを見つめるような二人の視線が、何となく悲しく感じる。

だがだからこそ、この二人は敵同士にしてはいけない。

なんとなくだがそう思うのだ。

「あの二人・・・似ていると思わない？フェイトちゃん」

「・・・え？どっちかといったら真逆なんじゃないかな・・・」

そう、たしかに真逆だ。

悲しいぐらいに心がすれ違っている。

まるで・・・。

「まるで、友達になる前の私たちみたい」

「・・・・・・!？なのは・・・」

きっと彼らに足りないものは言葉。

私たちと同じでとっても不器用なのだ。

どんなに言葉を交わしてもそれが偽物じゃ意味がない、私はそう思う。

でも今は彼らがぶつかっていい時ではない、彼らはまだ本当の気持ちぶつけて分かりあえるほどの域に達せていないのだ。

「でも、きっと大丈夫。

私たちがそうだったように、士郎君とアーチャーさんもいつかはお互いを認めることが出来るようになると思うんだ。

私たちみたいにね」

「う・・・うん! そうだね」

フェイトちゃんが頷きながら笑う。

「さて、フェイトちゃん。

私も明日の模擬戦・・・本気で行くよ？」

「それはこっちも同じだよ？簡単には負けないからね」

「うん！」

「はやて、今日から民間協力者になったって奴らどんな連中なんだ・・・？」

「あー二人はまだ会ってないんやったね、面白い人達やで」

「私とヴィータは本局に行っていましたので・・・一応高町からの報告で聞きましたが」

「そかそか、じゃあ明日の件も聞いているんか？」

明日の件とはもちろん、模擬戦のことだ。

「ああ、大型の混合模擬戦だろ？」

なのはのテンションがすごいことになってたぞ・・・」

「せや、二人とも頑張ってたなあ」

「はい、興味もありますしね」

「だな、模擬戦自体にはさほど興味はねーけど、これから一緒に戦う事になるってんならどれぐらいの力があるかは知っておきたいし」

ヴィータがそういうとシグナムが軽く笑みをこぼす。

「まあとりあえず、明日が楽しみやね！」

「おう！」

「はい」

「・・・シロウ、今日も鍛錬をするのですか？」

外で鍛錬をしようと客室から出ると隣の部屋で眠っていたはずのセイバーが部屋から出てくる。

「ああ、日課だしな」

「あまり遅くまでやらないように、明日は朝から模擬戦なのですか」

「分かってるよ、お互いこんなの久々だし頑張ろうな」

「シロウに言われるまでもありません。

セイバーのクラスに恥じない戦いをして見せましょう」

「ああ！じゃあ行って来るよ」

「・・・はい、シロウ」



朝、模擬戦前のトレーニングをと思い、訓練場に向かい早めに部屋を出た。

天気はとてもいい快晴で絶好の模擬戦日和といったところだろう。

だが、先客がいた。

赤銅色の髪を揺らしながら少年は双剣を構えていた。

「はぁっ！」

少年は声を荒らげながら少年にしか見えない何かと戦うかのように次々と剣戟を繰り返す。

迷いのない剣戟は次第に速度を速め、少年は息切れをする中懸命に何かに囚われているかのように繰り返した。

と、少年と目があった。

彼は手を止め、こちらへと改めて振り返る。

「あんた・・・機動六課の隊員の一人か？」

「ここにいるということは、そういう事になるな。貴様こそこんなところで何をしている？」

「俺？見ての通り鍛錬さ。」

しばらく戦ったりとかそういう世界から離れていたし・・・まあ稽

古はつけてもらっていたけど」

「そうか・・・。」

もしかして貴様、昨日来たという、民間協力者か？」

「ああ、一応そうだ。俺は衛宮士郎、アンタは？」

「私は烈火の将シグナム。ライトニング隊の副隊長であり、階級は二尉だ。よろしく頼む」

衛宮は笑顔でこちらに「よろしく」と返してくる。

まるでさっきまでの必死さはその顔にはない。

「シグナムも今日の模擬戦に？」

「ああ、楽しみにしているぞ。先程の剣戟、あれはなかなかのモノだ」

「そっ・・・そうか？そんな風に言ってもらえたのは初めてだ。ありがとうな」

「事実をいったままで、礼を言われる筋合いはない」

「そっか、でもありがとう」

そう言うとき衛宮は双剣を消した。

何か他の物体に変わるわけではなく、実際にそれは粒子のように消え去ったのだ。

これが報告にあった魔術というものであるのか？

「もうそろそろ高町達もやってくる」

「お、もうそんな時間なのか？」

「いつからやっていたんだ？」

「4時ぐらいからかなーあまり寝つきがよくなかったから一人でも練習しとこうかと思って」

なるほど、どおりでまだ肩で息をしているはずだ。

「高町達が来るまで休んでおいたほうがいい。  
そのままでは模擬戦に響くからな」

「あ、ああ・・・そのつもりだよ」

衛宮はその場に座り込む。

それから十分ほどたつと高町がテストロッサと共に出てきた。

「あ、シグナムさん士郎君。早いね！」

「おはようシグナム、士郎」

「おはよう、高町さん、テストロッサさん」

「高町とテストロッサだって予定時間より30分早いぞ」

「うん、私はいつもだいたいこのぐらいに出てきているからね」

「それでも、少し早い方だけどね」

テストロッサが苦笑しながらもそう付け足す。

「じゃあ皆が来るまでしばらくのんびりするのでしょうか？」

「うん、そうだね」

「「ああ」」

高町とテストロッサは二人肩を並べて壁にもたれかかる。

私もそれに倣い、壁に体を預けた。

その後しばらくしてヴィータとフォワード4名、衛宮と同じ民間協力者と思われる3名がゆっくりと歩いてくるのが見えた。

## 虚空ノ双刃（後書き）

えー一応模擬戦前の会話的なものを・・・ひとつ。

シグナム視点は始めてで、テストロツサは違和感ないのですが高町と書くのは微妙に違和感がありました。（言葉に出すときは全然違和感がないのにw

士郎君はこんなときでも日課の鍛錬をやめたりしない努力家というところを実はアピールしたいがために書いたんですけどね（爆

## Stand by Ready?

「」「おはようございます!」「」

まだ早朝だというのに、いつも通り元気な声が機動六課訓練場に響き渡る。

もちろん声の主はフォワード4名である。

「うん、おはよう。セイバーさんとアーチャーさんもおはよう!」  
「・・・で、遠坂さんどうしちゃったの・・・?」

アーチャーさんの後ろにいる遠坂さんは昨日のような覇気がない。

「ああ、遠坂は低血圧で朝弱いんだ。  
もう少ししたら覚醒すると思うぞ」

「そ・・・そうなんだ」

意外な弱点を見つけた、という気分で遠坂さんを見る。

彼女は気分が悪そうに、げんなりしながらも、目を覚まそうと必死に顔をパンパンとたたいている。

「と、シグナムさんとヴィータちゃんは自己紹介がまだだったね」

「ああ、私は衛宮とだけは先に済ませたが。  
私は烈火の将シグナム。ライトニング隊の副隊長だ」

「同じく紅の鉄騎ヴィータだ。一応スターズ隊の副隊長ってことになるな」

シグナムさんに続きヴィータちゃんが自己紹介する。

すると、驚きを隠さずに士郎君がヴィータちゃんを見ながら疑問を発する。

「機動六課のメンバーは若い人ばかりだと思っていたけど・・・すごいな、ヴィータさんその年で隊の副隊長だなんて」

彼にとっては褒め言葉のつもりだったのだろう。

だが、見た目はともかく事実上、私たちより数十倍の年月を生きた彼女にとってはその言葉はあまりというか、かなり面白くない。

「アタシはお前より断然年上だ!!」

「へ・・・?」

見事な怒声に士郎はしばらく呆然とする。

まあ、無理もないよね。

「まあ、ヴィータちゃん。士郎君達は事情知らないんだし、抑えて抑えて・・・」

「・・・わかったよ」

「・・・と、とりあえず自己紹介が遅れたな。俺は衛宮士郎。で・・・」

・  
」

士郎君の視線がセイバーさんに向く。

「セイバーです、よろしくお願いします」

「アーチャーだ」

「そして、アーチャーの後ろにいるのは遠坂、遠坂凛」

未だうーと唸りながらも少しずつ覚醒し始めている遠坂さんは、手を挙げながら、どうやら「よろしく」としているようだ。

「凛・・・、いつまでそうしているつもりだ？」

「しょうがないじゃない・・・私、枕がかわると寝つきが悪いんだもの・・・」

士郎君は遠坂さんのその言葉を聞くと大きなため息をつく。

「仕方ないな・・・おい、遠坂。あっちに宝石の山があるぞ？」

「・・・え!？」

途端、今までまともに開くことのなかった瞼が全開になり、きよろきよろとあたりを見回す。

「・・・何処!?! 何処なの士郎!?!」

「・・・嘘だ」



「なっ・・・！」

「遠坂がいつまでたっても起きないからしょうがないだろ？」

「それにしたってもう少しましな方法はないの？」

「・・・む、一番効果的中だし、最初から遠坂が起きていればこんな嘘つかないですんだんだが」

「あはは・・・」

つい、といった感じでフェイトちゃんが苦笑する。

遠坂さんは遠坂さんで事実故に認めざる負えないながらも、納得いかないといった感じで士郎君を睨みつけている。

「まあ・・・とりあえず、遠坂さんも完全に目が覚めたようだし、二組に分かれてもらうね」

「はい！」

データを見せると六課メンバーはともかく、士郎君達は少々不満そうに見つめる。

「お前と一緒かよ」

「別に私も自分からなりたかったわけではない。私に言いがかりはつけないでもらいたいな」

お互いそっぽを向きながら早速火花を散らす。

想像はしていたが、実際に直面すると頭の痛いことだ。

「まあ、たまには割り切りなさいよ。なのはにも考えがあつてのとだろうし」

遠坂さんは未だ不機嫌そうに腕組をしながら衛宮君とアーチャーさんの間に入る。

「・・・それとも、衛宮君とアーチャーはセイバーや私たちと組まないとうしようもなく不安で不安でたまらないのかしら？」

「なっ・・・」

「マスター・・・さすがにそれは・・・」

「じゃあ、このままでOKよね？」

「「・・・了解」」

さすがというべきか、とても二人の扱いに慣れている遠坂さんは言いくるめると、こちらに視線を送ってくる。

その視線に、ありがとうと返す。

「じゃあ、早速始めるけど・・・みんな問題ない？」

「私は大丈夫だよ、なのは」

バリアジャケットを既に装備したフェイトちゃんが頷きながら、私と向かい合う。

ちなみに既に六課メンバーはバリアジャケットを装備している。

「私たちも大丈夫です！」

ティアナが4人を代表して報告する。

「私とヴィータも問題ない。いつでも良いぞ」

「ああ、準備は出来てるぜ！」

シグナムさんとヴィータちゃんもレヴァンティンとグラーフアイゼンを構えながら宣言する。

「――Ich werde wieder deine Kraft  
und pure Magie」

遠坂さんが唱えると、士郎君達4人の体に粒子がつき纏い、吸収されるように消えていく。

たぶん、昨晚言っていた彼女等流の非殺傷設定なのだろう。

「俺も大丈夫」

「まあ、そんな準備することって少ないしね」

「問題ありません」

「いつでもいいぞ」

士郎君と遠坂さんは今までと変わらない姿だが、セイバーさんとアーチャーさんは初めて出会ったときと同じように、セイバーさんは西洋の鮮やかな青を基調とした鎧を身に纏い、アーチャーさんは赤い外套を羽織っている。

「じゃあ、始めるとするよ……！！機動六課大型混合模擬戦レディ……！！」

皆が一気にデバイスを構える。

「……ゴー！！」

掛け声とともに、皆がポジションを固めるように、散り散りになった。

## **S t a n d b y R e a d y ? (後書き)**

もう戦闘までいっちゃおうかなと思ってたんですが、長くなるだろうと思って今日は直前まで・・・

たぶん次の投稿も戦闘は何度かわかれるかな・・・？一度では終わらないと思います

## ランダムエンカウント（前書き）

模擬戦の間は3人称でお送りします（苦笑）

## ランダムエンカウント

「<sup>トレース</sup>投影——<sup>オン</sup>開始!!」

同調ではなく投影。

士郎とアーチャーは自然とお互いに背を預けていた。

同じ二対の白と黒の双剣を手につつ。干将莫邪・・・有名な中国の夫婦剣である。

「・・・アーチャー」

不本意だが、と前置きしながらも士郎は現在の自分よりも一回り大きい背中に、「今は休戦だ」と伝える。

それを聞くと、「いたしかたないな、ついて来い坊主」と、二人にしか聞こえない小さな声で意思を示す。

士郎はそれを聞き逃さず、口には出さずに心中「ほざいてろ」と叫ぶ。

なのはチームで一番に動き出したのはフロントアタッカーのスバル・ナカジマだった。

彼女は得意のローラーブーツによる近距離加速で士郎とアーチャーへと向かい拳を構える。

デバイス…マツハキヤリバーは籠手型のリボルバーナックル（右

手」とローラーブーツを兼ね備えた、スバル専用のデバイスである。

『気を付けてください！スバルの一撃は結構重いですよ！』

士郎とアーチャーにティアナが思念通話を送る。

すると、二人はびっくりしたように、ティアナの方を一瞬向く。

当然だ。パスでつながっていない相手からこの様に精神に働きかけ、言葉を通ずる方法など魔術には存在しないのだから。

だが、今はそんなことで躊躇しては彼女の厚意が無駄になると、とっさに気づき、油断せず構えに入る。

ティアナはそんな二人が大丈夫なのか不安になりながらも牽制の意味を含めてシュートバレットを発射する。

すると、スバルの後ろからセイバーとシグナムが陸と空から攻めてくる。

ヴィータがシグナムへと向かい、それを牽制しつつ、その隙にエリオはストライダーによる加速でセイバーへと向かう。

一方、このチーム分けの所謂チームリーダーであるのはとフェイト、フルバックであるキャロ、そして・・・魔術師3人をまとめている凛は現在3vs1の状態で無駄のない動きでチームのサポートに徹していた。



「リボルバーナックル！」

先手必倒といわんばかりに、アーチャーへと向かって放たれたナックルを、アーチャーは干将莫邪をクロスさせ、頭上で受け止める。

そこに、士郎が横から莫邪で一薙ぎにしようと襲いかかるが、スバルは片手でディフェンサーを起動させ、防御する。

アーチャーは腕に力を入れ、スバルのナックルを跳ね返すと、干将莫邪をそのままスバルに向かいブーメランのように投げる。

士郎は一旦下がり、構えなおす。

両手が空いたスバルはあえて避けず、防御する。

——だが、

「甘いぞ、スバル・ナカジマ！」

いつの間にか、アーチャーは新しい干将莫邪を構え、背後から切りにかかる。

戦慣れた彼の一撃が、スバルの体をすり抜けるかのように、ダメージを与える。

凜に施してもらった魔術のおかげで、彼女の体自体には傷一つついてはいない。

「くっ・・・！」

だが、魔術を削られる痛みと疲労はスバルをさいなむ。

槍と大剣がぶつかり、鈍い音が鳴りながらも、火花を散らす。

素人目に見れば互角な勝負だった。

もちろんそれは二人の間では無関係な話である。

正直に言えば、エリオは焦っていた。

ある程度なのはの教導により、鍛えられた体が何とか彼女の軌道を読んで動いてくれるが、今までにない恐ろしさが額の汗と比例して、次第に高まっていく。

何が一番恐ろしいか、それは彼女の大剣である。

どのような大きさなのか、どんな形状をしているのか全く分からない。

何故なら彼女が持っているのは見えない“何か”なのだ。

ただ、彼女の動きと、ぶつかったときの感触で大剣とだけは分かった。

彼女は舞姫かのように軽々と大剣を振り回し、剣戟さえも舞武である。

ずっしりとした重さと鋭い一撃は恐怖の代名詞かのように、こちらに休憩の暇を与えずに、打ちのめしにかかってくる。

その厳しさはシグナムとの訓練と同等かそれ以上であった。

「ストラーダ！」

— s o n i c   b o o m .

スピードを上げ、エリオはたたみかける。

セイバーはそれを一瞬だけ驚いたように目を見開いたが、エリオの動きで、次の一撃を察知し、そこに一撃を送り込む。

と、ティアナのシュートバレットがそれを妨害するかのようになり、セイバーへと放たれる。

セイバーはそれに見向きもせずに、エリオを切りにかかる。

バレットはセイバーに直撃し、彼女はダメージを受ける筈であった。

だが彼女は平気面のまま防御一本やりのエリオに襲いかかる。

「う……嘘、効いてないの!？」

彼女を含め、機動六課のメンバーは誰も知らないが、セイバーの鎧は1級魔力さえも無効化するほどの魔抗を備えているのだ。

バレット程度ではものともしなかった。

「そういや、シグナムと戦うってのは久しぶりだな」

「ああ、そうだな」

二人の騎士はお互いの相棒<sup>デバイス</sup>を構え、幾多の打ち合いを始める。

一方は片手剣、もう一方は鎚。

「紫電・・・一閃！」

「ラケーテンハンマー！」

お互いの技をうまく防御しながら、二人は疲労と共に魔力を微弱  
ずつ、だが確実に失う消耗戦を繰り返している。

一撃の反動の強いヴィータにとって消耗戦は自分を不利な状況へ  
と誘うものであり、そのまま黙認できるものではない。

かといって相手は自分達ヴォルケンリッターの将であり、戦闘マ  
ニアな部分があるあのシグナムだ。

そう簡単にペースを奪わせるようなヘマなどはしない。

――Schlangeneinangriff

シュランゲフォルムへと変化したレヴァンティンが、連結刃とな  
り、ヴィータを襲う。

バリアで防御されても一瞬で粉々にされるほど破壊力に特化した技である。

――Schwalbfliegen

中距離誘導型射撃魔法が刃へとあたり、爆発する。

一瞬の停滞を持って再び襲いかかるが、その隙に遠くへとよけながらフランメ・シュラークの魔力結合を整える。

なんとしてもあの連結刃を抑えなければ、下手にシグナムに近づくことさえかなわない。

## ランダムエンカウント（後書き）

ところで、ドイツ語のスペルがあっているかどうか不安だったりします^^；

なんか早速エリオ君ピンチです（苦笑

## ローラン

なのはにとってこの状況は予想以上のものだった。

何が言えばもちろん彼らの個人の戦闘能力である。

士郎とアーチャーは共闘しスバルに確実なダメージを与えていき、セイバーはエリオとティアナ相手に全くダメージを受けずに圧倒している。

凜は元来遠距離型の魔術師らしく、上手い具合に素早い動きで牽制するフェイトに対して動じずに魔術の一つである、ガンドというものを弾丸のように放っている。

『遠坂さん、悪いんだけどスバルの援護に行ってもらえる？  
こっちはキャロもいるし、大丈夫だから』

彼女等は思念通話は出来ないらしく、凜はそれを聞くとフェイトのプラズマランサーを避けながら、かすかにこちらに視線を向けて頷く。

『キャロ、遠坂さんがスバルの援護に行ってくれるからフェイトちゃんから振り切る援護をお願い！』

『はいっ！わかりました』

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり天を翔けよ！  
来よ、我が竜フリードリヒ 竜魂 召喚！！」

キャロとフリードリヒを囲むように桜色の魔力が二人を包み込む。そして一瞬のうちに彼女の頭に乗れるほど小さかった白い竜は大きな成竜となる。

それが彼女の竜召喚士としての能力である。

「これがあの竜の本当の姿・・・」

凜は初めて見る本物の竜に少し呆然と足を止めて見やる。

だがそれも一瞬のうちに自分のやるべきことを頭の中で整理する。

「フリード！ブラストフレイ！！」

フリードリヒは大きな炎球を口から吐き出す。

「ファイア！」

キャロの掛け声とともにブレスのごとくフェイトへと向け放たれた。

フェイトは慣れた手つきでそれをディフェンサーで防御する。

そこへなのはディバインバスターが襲い、それをサンダースマッシュシャーで相殺する。

お互い、予測の範囲内の行動である。

その一瞬の隙を使い凜はスバルの元へと向かう。



「うおりゃああ!!」

スバルは痛みを堪えながらもすかさずアーチャーにカウンターを放つ。

「・・・何!？」

アーチャーにとってここでのスバルの踏ん張りは予想外だったらしく、中途半端に構えた干将莫邪は簡単に弾き飛ばされ、ナックルが鳩尾にヒットする。

その一撃の重さにたまらず、アーチャーは一気に数十メートル吹き飛ばされた。

その勢いのままスバルは士郎へと拳を構える。

士郎はそれをアーチャーと同じように干将莫邪で防御するが、アーチャーの剣よりもイメージが未完成な投影で作られた双剣は威力に耐えきれず光の粒子となり消え去る。

弾き飛ばされると同時に新しい干将莫邪を構える。

久しぶりの模擬とはいえ戦闘に額に汗を滲ませながらも、士郎はどう動くべきか思案する。

下手に動くにはフロントアタッカーである彼女を刺激し、きつい

一撃をくらい羽目になる。

スバルは叩きつけるかのように次々と拳を繰り出す。

それを士郎は一つ一つギリギリのラインで避けられるものは避け、逸らすことが可能な攻撃は出来る限り逸らしながら何合かの打ち合いが続く。

と、スバルは急にアーチャーが飛ばされた方向を見やる。

そこには――。

「ほう、気付いたか・・・スバル・ナカジマ。  
ならば・・・上手くかわせ・・・!!」

黒き西洋のデザインが施されているながらもシンプルな弓を構えているアーチャーがいた。  
それだけならまだいい。

だがアーチャーが射ようとしているのは矢ではなく剣であった。

否、射る限りそれは矢なのだ。

こちらにも弓と同じく西洋の柄をした、突に適した形をした剣。

ドリルのような先端をしたそれは、記憶上とは少し違うがエクスカリバーの原型と呼ばれているカラドボルグのものである。

たぶん、アーチャーが改良を加えているのだろう。

士郎は一度これ、カラドボルグ？を見たことがあった。

忘れもしない、それは聖杯戦争に参加することになった初日。

セイバーもろとも殺そうとバーサーカーへと放たれた矢である。

士郎はその射撃により、セイバーをかばい破壊の片鱗で傷つき死にかけてすらいる。

今回は非殺傷ではある分あの時のような恐怖はないが、まさかアーチャーがそこまでするとは思わなかった分、驚きが支配した。

とっさに転がるようにしてスバルから離れ、射程範囲外へと逃げ込む。

「カラドボルグ・・・！」

それを確認するやアーチャーはスバルへと矢を放つ。

避けるつもりで加速して範囲外へ遠ざかろうとしたスバルだったが、アーチャーはその加速速度さえも計算し、結果スバルは緊急的にプロテクションで防御する。

弓を射るものは的に当てようとするのではなく、当たったところを想像してそこへと射ることが必要である。

それを鮮明に想像できるかが問題であり、逆に言えばまぐれでもない限りのを狙っているようではそこに当てることはできない。

アーチャーはその点、誰にも負けないほどの自信があった。

鮮明に想像でき、鷹の眼のように視力も良い。

彼が弓を握った時点で射させる限りスバルに矢が的中するのは当たり前のことだったのだ。

地面は反動で焼け爛れ、その中心点にいたスバルはなんとか……といった感じで防ぎきっていた。

だが魔力の消耗はかなりのものだったらしく、肩で息をしている状態である。

「――Vier Still Erschiesung……！」

そんな時、弓を構えたままのアーチャーに、聞き慣れた声で聞き覚えのある詠唱が聞こえた。

アーチャーにとってはマスターであり、衛宮士郎にとっては彼女であり、魔術の師匠である、遠坂凜の宝石魔術の詠唱の一つであった。

油断していたアーチャーは今まで味方としてしか振る舞ったことがなかった主の気配を無意識に当たり前の物と認知し、反応出来なかった。

つまり――――。

本来長い詠唱と共に放たれるはずの高密度の魔力はたった一言で刃となり、弾丸となって、アーチャーに降り注いだ。

「アーチャー！」

士郎はもろに食らってしまったアーチャーを見て駆け出す。

さすがのアーチャーでもあれはまずい。

スピード、威力、タイミング、そのいずれもが完璧。

手加減なく繰り出された一流魔術師でさえも震え上がるだろう“必殺”をアーチャーは完全に受け切ってしまった。

だがそれでもやはり、アーチャーは倒れていなかった。

非殺傷設定で血こそ流れてはいないが、纏った外套はボロボロに焼け切れてる。

が、英雄の称号にふさわしいぐらいに、彼は再び干将莫邪を構え、自身の主に刃を向ける。

「さすが私のサーヴァント。

これぐらいじゃ降参はしない・・・か」

余裕の笑みを見せる凜の手には宝石がいくつも握られている。

「ふっ・・・ここで倒れていては示しがつかないのでな。

マスターよりサーヴァントが弱い、となっては笑う事さえ適わん」

「へえ、まだそんな減らず口が聞けるほど元気なんだ  
さっきスバルに手ひどくやられていたようだけど？」

「たしかに、しばらく実戦をやっていなかったからな。少々鈍ったかもしれん」

士郎は戦闘中だというのに、普段と同じように言葉を交わす二人に内心少々呆れながら立ちつくす。

と、そんなに士郎に直後恐怖にも似た感情が肌を通して湧きあがる。

「ディバイーンバスター!!」

背後を振り向いた瞬間、水色の魔力光が目の前に広がる。

防御が間に合わなかった士郎はバスターにより弾き飛ばされ、壁へとめり込む。

「くっ・・・効いた!」

壁にめり込んだ時に負った右腕の傷口から少し血が滲む。

これぐらいなら問題ない、そう呟きながら士郎はスバルへと駆ける。

油断していたのは自分も同じだった、なら今度は油断しない。

千将莫邪ではなく、別の剣を頭に浮かべる。

一々動きの速い相手に素早い連撃をしている暇はない。

ならば――。

岩をも切り裂く程の切れ味を持ったロングソード。

片手でも両手でも扱いが出来る剣が良い。

そう、イメージするのは英雄が持つ剣の一つ。

「デュランダル！」

久しぶりの干将莫邪以外の投影に魔術回路が焼けるように痛む。

だが、剣を投影するという点において、衛宮士郎に不可能はなかった。

## ローラン（後書き）

タイトルは後で変わるかもしれませんが（苦笑

デュランダルは友人からのリクエストでしたw

まあ、実際にF a t eでもでてきてますけど^^；

今日小説情報のところに張り付けてあった動画のURLを更新しました。

まあーほぼM A Dですけどw



## Grow Up

何度も衝撃で気を失いかけた。

だが、その度に体は怖れという単語と共に腕に力を入れる。

ストラーダを持つ手が痺れるように痛い。

——まあ、それよりも今は耐えきれているという現実の方が純粹にすごいのかも……。

実力の違いを見せつけられたかのような一撃についてエリオは弱音を吐く。

——それでも……！

今の自分は無力ではないと信じるために、セイバーへとエリオは突きを繰り返す。

「——甘い！」

だが、そんな志は目の前の騎士王には関係のないものであった。

ストラーダを簡単に弾き返し、セイバーはエリオに刃を向ける。

既に勝敗はついていると言わんがばかりに彼女の刃はおそらく、エリオの首筋の近くで止まっていた。

剣が見えない故に実際どうなっているかはセイバー意外の誰にも

知る由がない。

「あなたの負けだ、エリオ・モンディアル。いくら非殺傷とはいえ、これ以上のダメージはあなたの体に後遺症を残しかねない」

ただ、セイバーは現実を語った。

圧倒的な太刀打の出来ない厳然たる差。

それが自分とセイバーの間に大きな溝としてあることを知った。

がくつ、と肩を落とす。

ああ・・・僕の負けなんだ。

エリオは現実を受け入れ、両チームのリーダーへと降参信号を送った。

「強いんですね、セイバーさん」

仲間の援護に行こうとしているセイバーをエリオは不意に呼びとめた。

彼女はしばらく、立ち止まり無言でこちらを見つめてきた。

それからセイバーは立ち竦んでいるエリオの元へとゆっくり歩み寄ると、不意に彼の頭を撫でた。

「そのように、気負う事はありません。

確かに、今のあなたでは私には敵わない。ですが、――今からまだまだあなたは伸びる。努力すれば結果は実ります。今が最大ではないのですから」

かすかに微笑みながらセイバーは言う。

逆にセイバーにとって、こんな子どもがここまでやれたことをむしろ褒めるべきだと感じたのだ。

「は・・・はい！」

照れながらもエリオは笑顔になる。

その無邪気さは年相応の少年のものであった。

そのころティアナはフェイトの援護をするため、走っていた。

正直ショックを受けたのだ。

セイバーには自分の攻撃では傷一つ付けることができなかった。

あの戦闘において自分が無力だと知らしめさせられたような気分になったのだ。

？さすが、八神部隊長が認めた民間協力者？なんて言葉を言ってしまうは済む話ではあるが、もちろんそれで納得がいくティアナではない。

だがそれで焦っているのは元も子もない。

相手との部が悪いなら他の方法を考えるか、自分にできることをするために動くべき。

フェイトはなのはとキャロを相手に避けることを最重要としたポジションを保ち、隙を見つければそこへ間髪いれず切にかかる。という行動を繰り返していた。

なのはのアクセルシューターがこちらに向かって囲むように追いかけてくる。

『フェイト隊長、援護します!』

『うん、お願い・・・!』

フェイトはバルディッシュをハーケンフォームにしながら、スピードでキャロとなのはを攪乱する。

「クロスファイアー!」

茜色の魔力球がティアナの近くに浮かび上がる。

ティアナが最も得意としている中距離型誘導射撃弾だ。

狙いはフェイトを追いかけるなのはによるアクセルシューターの全撃破。

「シュート!」

バレルを向け、数量実に13発を発射する。

それに気付いたなのはは誘導弾をこちらに仕向ける。

誘導弾同士がぶつかり相殺し合い、桜色の魔力と茜色の魔力が花火のように視界を支配する。

その間になのははティアナに近づき、抜き打ちのショートバスターが、襲ってくる。

即座にクロスミラージュが反応し、ディフェンサーを起動する。

ディバインバスター程の威力はないものの、発動は早く、汎用性が高いショートバスターは高速移動をしながらでも可能になったバリエーションである。

バスターを受け切ると直後になのはは距離を取り、ディバインシューターを発射する。

いつきに沢山のなのはは誘導されている魔力球がこちらに襲いかかって来、それを地に足をつけたままショートバレットで確実に撃ち落とす。

「うん、反応速度いい感じだね」

だが言葉とは関係なしに、なのはも手を緩めたりはしない。

破壊してはそれを回復するかのように次々と魔力球がティアナを襲う。

「はあっ！」

フェイトはバルディッシュで大きく弧を描き、フリードリヒへと切りかかる。

図体の大きなフリードリヒはそれを避けることはできない。

結果、フリードは悲痛な叫び声をあげる。

そもそもキャロはフルバックであり、1対1ではほぼキャロに勝ち目がないと言っても過言ではない。

フェイトは近距離と中距離を制覇するガードウイングなのだから。

それを正しく理解しているのははどうかして、キャロからフェイトを引きはがそうかとティアナと戦いながら思案する。

だが、今のティアナはよそ見をしながら相手にできるほど弱くない。  
どない。

今の彼女、いやフォワード4名全員がストライカーなのだ。

それこそ、出力リミッター付きとはいえ既に自分は1vs4など遠い昔の話と感じられるように。

## Grow UP (後書き)

さて、今回はリクエストに応じて・・・。

後書きに少し力を入れてみたり（マテ

デュオ・・・というわけで！今日はこの物語の主人公高町なのはさんと衛宮士郎君にきていただきましたっ！

なのは・・・はい、こんにちは皆さん。高町なのはは一等空尉です。

士郎・・・えーと、衛宮士郎です、どうも。というか駄作者・・・なんのつもりだ

デュオ・・・なんのつもり・・・って後書きのつもり。

士郎・・・そうじゃなくてだな、なんでこうなったかについてだよ

なのは・・・たしかに、本編サボりまくっている癖にいきなり何なんだろうねえ

デュオ・・・ハハハ手厳しいな御二人さん。まあ・・・たまにはいいじやまいか。

まあ、実際メッセージでこういったリクエストが来てたからやってみただけだけど（ボソリ

士郎・・・なんつか・・・いい加減だな。

なのは・・・これからがとっても心配だよ

デュオ…まあ、そう言わんでくれ・・・結構自覚あるつもりなんで。  
ところでまだ途中だけど二人はこの模擬戦はどう？

士郎…どうって言われてもな・・・。とりあえず、俺たちより若い  
エリオやルシエさんもあんなに強いだなんて驚いたよ・・・それに、  
魔法ってすごいんだな・・・とか。

なのは…それはこっちも同感。士郎君と遠坂さんなんてバリアジャ  
ケットなしで戦闘始めるんだもん、結構ひやひやしてるんだからね？  
それに、セイバーさん・・・一直線に突撃して既にエリオ  
を倒しちゃってるし・・・

デュオ…まあ、エリオが決して弱いわけじゃないんだけどねえ。

・・・セイバーさん、手加減って言葉を知らないから・・・  
。

自分で書いておいてなんだけど、途中から大幅に修正して、  
セイバーVSシグナムの方が良かったかもと真剣に悩んだよ。

なのは…それはそれで・・・、血で血を洗う決戦になりかねないか  
も・・・。

士郎・・・いや、非殺傷設定でそこまで悲惨な戦闘ってどんなも  
のだよ・・・。

デュオ…と、いっておきながら今現在血を流しているのは士郎だけ  
どね！

士郎…アンタのせいだろ！

デュオ・・・バレタカ



なのは…まあまあ・・・、二人ともそれぐらいにしておいて。

そういえば、セイバーさんの戦闘能力と比べてアーチャーさんはそんな目覚ましい結果出してないよね。

デュオ…アーチャーは魔力酔い起してるしね（え

士郎…いや、そんなこと本編で一度も書かれていないぞ・・・

デュオ…だって嘘だもん。

士郎…・・・じゃあなんなんだよ

なのは…・・・デュオ君、嘘はだめだよ？

デュオ…あはは、いやすまん。

実はセイバーも能力は衰えているんだけど、まあ・・・元々の能力がすさまじいからねえ！。

まあ、理由としては冬木市から離れたというのがポイントだね。

本編ではまだ全く語られていないところだからここであえては語りませぬ。

なのは…冬木市？

士郎…俺達が住んでいた市の名前だよ。

・・・でも、なんとなくはわかった気がするな。

デュオ…あれ、今日の士郎は物分かりが良い？

士郎…それじゃあまるでいつもは俺が鈍感みたいな言い方じゃないか。

デュオ…あ、あれ・・・違うのか!?

士郎…・・・わざとだろ。

デュオ…ご想像にお任せいたします。

なのは…いやいや、デュオ君バレバレだからね・・・?

デュオ…まあ、よしなにw

さて、じゃあ最後に次回予告的なことをして後書きを閉じようかなと。

士郎…お、やっとか・・・。

デュオ…うむ、やっその後書きにおいて必要な部分である。

・・・というか、今までの会話が無意味である。

なのは…自分でやっておいてそれをいうのはどうかと思うんだけど・・・。

士郎…同感。

デュオ…ほっとけ・・・もうやらないからいいだろ?

さて、今回はヴィータvsシグナムと士郎vsスバルあたりの決着がつくところかな・・・?

結果は更新されるまでの間各自でご想像にお任せします。

士郎…お、俺もでるのか。

なのは…私は次の回は出ないって感じかな？

デュオ…まあ…なのはさんが本気になられると少々そこにいる士郎君がタイガー道場へ直行されますので、出来れば次回は大人しくしていただくかと。

士郎…何気にさらりと恐ろしいこというな！

なのは…にゃはは…。。まあ頑張ってね！士郎君。といっても私たちチームは別々か…。。

士郎…お、おう…。。実際に敵ってわけじゃないし、気楽でいいと思うけどな。

じゃ、次回の模擬戦でまた会おうな！

デュオ…（さすが曲がりなりにも主人公…。軽く仕切ってる…。というわけで、後書まで読んで下さった方々長々と駄文によるお目汚しお疲れ様でしたへへ；）

## クロスレンジ

デバイスとデバイスが火花を散らす。

戦っているのは、スターズ隊とライトニング隊の副隊長だ。

彼女等は攻防戦を既に何合と繰り返し、纏ったバリアジャケットは所々解れ穴が空いている。

「――やるな、ヴィータ！」

「つたりめえだ！！」

二人は幾度も交錯し、その度に鈍い音が鳴り響く。

「飛竜・・・一閃！」

またもやシグナムはレヴァンティンの刀身に炎を纏い、ヴィータを襲う。

ヴィータはそれを防御しながら次の手を考える。

攻防戦においてはシグナムよりも自分の方が上だという自信がヴィータにはあった。

防御の硬さ、シールド破壊さえも可能とするパワー、ともに得意分野といって差し支えがないだろう。

それがクロスレンジで戦うフロントアタッカーの特徴である。

「――アイゼン!!」

――G i g a n t   f o r m

グラーフアイゼンのハンマーヘッドが巨大な角柱状のものに変形する。

「・・・ほう、やはりそうくるか」

シールドブレイクを備えた一撃を防ぎきれほどの力はシグナムにはない。

彼女の戦いは「近付いて切れ」というものだ。

やられる前にやれ。つまり、彼女の戦闘形式には受け流すための護身はあっても、倒されまいと我が身を守るための防御には疎い部分がある。

それはシグナム自身はもちろん、何百年もの間傍にいたヴィータにもわかりきっていた。

逆にヴィータの戦闘形式がダメージそのものを受け切り、そのうえで相手に倍のダメージを与えるという、皮を切らせて肉を切り、肉を切らせて、骨を断つ。という実に前衛に向いた戦闘能力を持つことをシグナムも深く理解していた。

「・・・ならば、早々と決着をつけよう。」

出来ればもう少し貴様と打ち合っていたかったのだがな」

実に残念そうに、だがその顔に笑みを残したままシグナムは言う。

シグナムは一息つくと腰に下げたレヴァンティンの鞘を掴み取り、膨大な魔力と共に、レヴァンティンを最終形態であるボーゲンフォルムへと変化させる。

この形をレヴァンティンが取るのはかなり久しぶりであり、もちろんヴィータにとっても久方に見る姿だった。

シグナムは自分の愛機を懐かしそうに見つめた後、その手に魔力で生成された矢を持つ。

彼女の技の中で最大の威力を持つ、シュツルムファルケンだ。

「翔けよ、———」

「ギガント———!!」

ヴィータも自分にとって最大の威力を誇る技と繰り出す。

二人の叫び声がぶつかるように戦場に響いた。

——まるで、この戦場には二人以外の人間が侵入することを許さないと言っているかのように。

次に発せられたであろう二人の言葉は大きな火花と爆発音にかき消され、土煙が二人の姿を消す。

その、あまりにも大きな爆発音に一瞬他の場所で必死の攻防戦を繰り返していた他のメンツも一瞬二人の姿を確認しようと目を凝らす。

しばらくして、土煙が薄くなり、彼女等の影がうつすらと見える。

「クッ・・・」

「・・・ツチクショー・・・」

先程までもボロボロとなっていたバリアジャケットは既に形を成しておらず、二人とも既に限界を当に越えていた。

だが、まだ立っていた。

それは騎士の誇りか、二人は視線をお互いから少したりとも離さず、互いに傷ついたデバイスを構えている。

『シグナムさん、ヴィータちゃんストップ!!』

なのはがびっくりして声を荒らげながら二人に念話を送る。

『シグナム、ヴィータ・・・これ以上は無茶だよ!』

フェイトもふと我に返りながら二人を止める。

だが、その心配は必要がなかった。

彼女等は既にお互いがこれ以上戦えないほどのダメージを受けていることも、これ以上に意味がないことも知っていた。

「ふっ・・・この勝負、私の負けだな」

「いんや・・・シグナムの勝ちだ」

それどころか、お互いの勝敗を譲り合っている。

そんな二人をなのはとフェイトが苦笑しながらどうしようものかと見守る。

『あ、あの・・・。このさい引き分けという事でよろしいのでは？』  
先に降参したエリオが控えめに言う。

「ふむ・・・いたしかたないな」

「ま、そういうことでいいんじゃないか？」

二人は少々結果には不満そうではあったものの、一時納得する。

と、途端に二人は力が抜けたのか、そろって地面へと落ちる。

どうやら既に飛ぶための魔力すら使いきっていたようだ。

『シグナムとヴィータったら・・・無茶すぎだよ・・・』

『あはは・・・意外な二人が頑張っちゃったね・・・』

苦笑する隊長二人。

『あ、エリオ。二人を頼めるかな？こちらは引き続き、模擬戦を再開するから』



『はいっ！任せてください』

潔く返事をするエリオは二人の上官の元へと駆けだす。

『さて、いくよ？皆』

なのはとフェイトが戦場に復帰すると同時に皆がまた自分の得物を構える。

士郎は慣れない剣を握りながら必死にスバルの攻撃を堪える。

一撃、一撃が重い。

そして、その割には重さ頼りの隙のある戦闘ではなく、彼女はスピアードさえも兼ね備えていた。

これが模擬戦ではなく、本当の死合であれば、彼女を打ち負かすことは容易ではなくてもまだ可能な段階であるという自信が士郎にはあった。

それだけの事を士郎は経験している。

鉄の匂いがする体も、セピア色に浮かぶ記憶も、未熟故に失敗した数々も・・・決して無駄ではない。

だがこと模擬戦においては逆に厳しいものがあった。

衛宮士郎は未熟故に死戦する事で皆との差を埋めていた。

だが模擬戦ではどうすれば間接的な面でも相手に傷を与えずに済むか・・・など色々と考えさせられる。

元来余裕のない士郎にとってそれらは全て重荷としてのしかかっ  
てきていた。

無意識にデュランダルを握る手が汗ばむ。

奥手になっても勝てる筈がない。

否、勝ち負けに拘っているわけではなかった。

ただ、アイツの前で無様な戦いはしたくない、そんな中途半端な  
想いが今は衛宮士郎を突き動かしていた。

「はあっ———！」

力むたびに声が漏れる。

そうだ、この子等が軍人だろうと局員だろうと。

今まで通りやるだけなのは変わらないのだ。

ならば——、恐れる前に動け。

俺はアイツが出来たことすら、出来ないのか!？

士郎は凜と戦うアーチャーを横目に見つつ、首を横に振る。

そんなこと認めていいはずがない。

アイツを追い越せるぐらいに強くならなければならない。

スバルだって昨日のような気さくな感じから一方、こんなに真面目に自分とぶつかりあっているのだ。

元々手加減、なんて考えている自分が失礼であり、愚かだった。

体が焼けるように痛い。いや、実際に内部からこの体は焼けているだろう。

久方ぶりに全回路をオープンされた魔術回路が驚き、使い手に痛みを伴わせている。

「——このっ!!」

だが士郎は剣を振りかざす腕を止めたりなどしない。

——ここまで、腕がなまっているなんてな・・・。

むしろ、士郎は口元に笑みをたたえ、スバルとぶつかる度に剣戟が素早く、力強いものへと変わっていった。

しばらく、そのような状況が続き、逆にスバルが士郎の攻撃に焦りを覚え始める。

スバルは士郎の攻撃範囲から避けるように、ウイングロードを形

成して飛び乗る。

士郎はスピードで適う事が出来ないため、その場から動かず、スバルを眼で追う。

と、既に刀身に亀裂が入っていたデュランダルは粒子を纏い、士郎の手から消える。

士郎はそれに見向きもしない。

「<sup>トレース</sup>投影——<sup>オン</sup>開始」

士郎はまた先ほどと同じように唱える。

すると、やはりこれも先ほどと同じで士郎の手に粒子がまとわりつき、形を成す。

だが、今までと違い、彼が構えていたのは先程アーチャーが使っていた弓と同じデザインの色違いの焦げ茶色の弓であった。

そして、もう一つ違うところがあった。

士郎は普通の矢を3本指と指の間にはさみ、構えていた。

剣を矢にすることが出来ないわけではない。彼は敢えてその手段を取らなかったのだ。

同じ攻撃でこちらにダメージを与えることは不能だと判断したのかもしれない。

スバルは既に避けようと思わず、ディフェンサーを起動させる。

士郎はその直後、三矢を一気にスバルへと放った。

ウイングロード上でスバルは立ち止りもせず、その矢を受け切る。

その後、士郎へとスバルはリボルバーシュートを放つが、それを予測していたように士郎は横方向へと大きく躲す。

そしてまたこちらへと矢を放つ。

だが二度目の軌道は先程と比べて少し違っていた。

三本の矢のうち一本はこちらへと直線を描き、二本はスバルの後ろへと通り過ぎた。

何かあるのかと魔力付与がかかった矢を防ぎながら背後を見る。

するとその間にいつの間にか士郎は干将莫邪を投影し、こちらへと投げていた。

気付くのが遅れたスバルはその衝撃に防御はしたもののウイングロードから落とされる。

「うわあっ!？」

つい、といった感じで声が漏れる。

だが地面に落ちる直前でマッハキャリバーがタイミングを合わせキャリバーショットを、落下するスバルを狙った士郎へと繰り出す。

士郎はギリギリのラインでその攻撃を防ぐ。

歯をギリ、と噛みながら士郎はそのままスバルを跳ね返し、よろついたスバルに干将を向ける。

「・・・俺の勝ちだ。ナカジマさん」

息を荒らげながらも士郎は宣言する。

確かにスバルの魔力はほぼ底をついていた。

彼がためらわずにその刃を振りおろしていれば倒れていただろう。

最後の最後で彼は非殺傷設定でありながらも、とどめをさすことをせずにただ勝負の結果を下した。

スバルと同じくボロボロになり果てた体で。

「・・・強いね、士郎さん」

スバルは悔しそうに、だけど負けを素直に認める。

「・・・いや、俺はまだまだだよ。

セイバーや遠坂、・・・アーチャーも俺なんかと比べたら数十倍強い」

「それでも、私を打ち負かしたんですよ？

少しはいばっていただかないと、私の立つ瀬がないんですが・・・」

スバルは苦笑しながらも、そう言う。

別に彼女が立つ瀬を気にしているわけではない。

スバルなりに士郎を気遣った言葉だった。

「ん、ああ・・・すまない。

別にそう言うつもりじゃないんだ。それに、一瞬でも気を抜いていたら負けていたのは俺だった」

だがそんな気遣いにも気付かず、言葉をありのままに受け取ったらしい士郎は、こちらにとっては確かにうれしい言葉を放つ。

「・・・さて、俺は仲間の援護に行かないとな」

傷から血が出ているというのに、士郎はまだ戦うらしい。

だが、負けたスバルにそれを止める資格はなかった。

だから、ただ・・・。

「頑張ってください！」

そんな言葉をその背中にぶつけた。

## クロスレンジ（後書き）

少し長くなりました。

皆困ったことに模擬戦でもかなり大真面目です（苦笑



## 光隠し

「・・・やれやれ、凜。降参しないか？」

不意打ちで仕留めきれなかったというのに、俄然やる気の自分のマスターにアーチャーはため息をついた。

「冗談、私が諦めが悪いってところアンタなら百も承知でしょうに」  
対する凜は風でなびく髪を払いながら、否定する。

「・・・その返答だろうと予測はしていたが・・・、正気か？」

「何度も言わせないの、アーチャー。  
私はこの際だからアンタと土郎をぼっこぼこにしてやろうと思ってるんだから覚悟なさい？」

恐ろしい言葉を平然とした顔で吐きながら遠坂凜は自分のサーヴァントを睨みつける。

すると、そこに二人の乱入者が現れた。

「セイバー！」

「遅かったな、坊主」

一試合を終えた魔術師とサーヴァントがちょうどその場に集結する。

「つていうか、士郎。アンタなんで怪我してんのよ!？」

右腕から負傷している士郎は、逆に凜の反応にびっくりしながら自分の腕を見やる。

「ああ、これか。」

ビルにめり込んだ時に負った傷だ。大したことはないよ」

平然と言う士郎に対し、セイバーがため息をつく。

「『大したことはない』ではありません、シロウ。  
あなたは模擬戦でまで傷を負ってそんなに私を困らせたいのですか  
!」

「あ・・・えと、すまないセイバー。  
以後気をつける、だから・・・な?」

苦笑しながら許せと言う士郎に心の中でまたセイバーは大きくため息をつく。

「・・・・・・・・凜」

「はぁ・・・仕方ないわね、士郎ちょっとこっちに来なさい」

傷だけ治療してあげるから、と凜は士郎に右腕を見せるように促す。

士郎はしばらくの間躊躇いを見せていたが、セイバーと凜の痛いぐらいの視線に根負けし、腕を見せる。

凜は魔術による治療を開始した。

痛み止めと血止め効果があったらしく。腕の痛みそのものが消える。

「すまない、遠坂」

「・・・ふん、無駄口を言える余裕があるならこの状況を覆す方法を探すほうが賢明ってもんよ、衛宮君」

「この状況・・・って何だ？」

首を横に振る士郎に1人と2騎が呆れる。

「アンタねえ・・・、いい！？ 私たちは現在模擬戦中で士郎の前には私とセイバーという敵がいるのよ？ ならどうにかして勝つ方法を探るのが普通ってもんよ！」

まくしたてる凜を前に士郎はまた頭をかしげる。

おまけに今度は仏頂面で。

「・・・む、それを言うなら遠坂だって遠坂だ。

敵である俺の傷の治療だなんて遠坂にとってはマイナスじゃないか」

「それは・・・その、あれよ！ セイバーがこのままじゃあ心配で戦えないからよ。

もちろんこんなの心の贅肉だってわかってるわよ！！」

一気に息継ぎもせずと言う凜に士郎は一瞬我を忘れる。

「ふっ・・・まあ、どちらにせよこのままのわけにはいくまい」

「そうですね、シロウの怪我が治ったのならこのまま模擬戦の続きです」

セイバーはアーチャーを睨みつけながら構える。

それにならない、遅れながら士郎と凜もお互いのポジションにつく。

フェイトはティアナの援護を利用しながら何とかなのは隙をうかがう。

ここでキャロを倒しておくべきか迷いながらも一撃一撃を繰り返す。

出来れば自分が安全に倒しておきたいと思うが、キャロとフリードリヒに集中すればなのはバスターが死角から飛んできかねない。

強くなったとはいえ、ティアナ一人では突撃型の砲撃魔導師であるのは相手に1VS1で勝てるかという点、頷きがたい部分もある。

だからこそ、なのはを先に倒さなければならない。

互いのことを知りつくしているからこそ、一番なのはの一撃がフ

エイトにとって恐ろしいものなのだ。

——まあ、それ以外にも今回は注意しなければいけないものがあるんだけど。

ちらりとフェイトは民間協力者が戦っている場所を見やる。

エリオを圧倒的な差で倒したセイバー。

互角の勝負ながらもスバルに勝った衛宮士郎。

彼らの戦い方は自分たちとはほぼ全くといっていいくらいに違う。

何が、と聞かれれば言い淀むだろうが、魔法と魔術が全く違うもののだとはつきりと感じさせられていた。

「フェイトちゃん、私とキャロを相手にしている時によそ見なんていただけないな〜！」

そんななのは言葉と共にアクセルシューターが背後から襲ってきていることに気付く。

どうやらティアナの打ち漏らしが死角へと回り、今に至っているようだ。

スピードを上げてアクセルシューターとの距離を一定のところまでフェイトは空けると、ハーケンフォームのまま、

「ハーケンスラッシュー!!」

斬撃で一気に全てを破壊する。

もちろんそうなることはなのとも予測済みである。

「ごめん、なのは。」

でもやっぱりあの4人の事が気になってね・・・」

「まあ、気持ちちは分からない事もないけどね」

会話こそ穏やかに行われているものの既にキャロを挟んでなのはとフェイトは激突する。

そこにティアナがキャロに次の手を繰り出させないように、シュートバレットでフリードリヒを牽制する。

だがそれをフリードリヒは耐えきりながら反撃にブラストレイをティアナめがけて放つ。

平均AAランク魔導師の炎熱砲撃に匹敵するブラストレイを、ティアナは避けるのをこの状況下では無理だと判断し、防御態勢を取る。

————いける？クロスミラージュ

————No problem. My Master

「あ、あれ・・・ティアさん・・・？」

攻撃があたったと思われる場所を砂煙が薄れた後見ると既にティアナの姿はない。

否、キャラやなのは、フェイトに見えないだけでまだそこにティアナはいた。

防御しきった後すぐに幻術魔法の一つであるオプティックハイドで透明になっているのだ。

ティアナはなるべく効果を持続させるべく、魔力を制限しながらキャラとフリードの裏をかこうと動き出す。

相手が空にいるならどうするべきか。

クロスミラージュを構えながら思索する。

『フェイトさん、私がキャラとフリードを何とかします。  
なのでフェイトさんはなのはさんをお願いしますっ!』

『ティアナ・・・無事なんだね?』

フェイトはなのはの攻撃を相殺しながら、自然に徹しながら念話でティアナと話す。

『はい、現在幻術で姿を消しているので!』

『そっか、とりあえず私になのはは任せて・・・キャラをお願い』

フェイトはティアナの無事を確認するや、なのはへとサンダースマッシュャーを繰り出す。

それを躲しながらフェイトを振り切ろうとするなのはに、フェイ

トはソニックブームでさらに加速し、斬撃を繰り出す。

———フェイトちゃん、私をキャロから引き離そうとしてる・・・？

無数に繰り出されるハーケンスラッシュになのははレイジングハートで自分の身を庇いながら冷静に状況分析をする。

急に姿を消したティアナ。

積極的にこちらを叩こうと接近戦を挑むフェイト。

どう行動に出るべきかとあたふたしているキャロ。

この状況で導かれる答えは・・・。

考えながらプラズマランサーを避ける。

正直、フェイトの攻撃から身を守るだけでも十分大変だった。

だがそれ以上のことをせねばならない。

守りに徹しながら脳をフル回転させる。

消えたティアナは何処へ行ったのか。

と、途端にティアナはフリードが飛んでいる近くのビルの屋上に姿を現す。

どうやら幻術で姿を消していたらしい。



ブラストレイによって起こった砂煙を利用して一瞬のうちに準備していた幻術をティアナは発動させたのだ。

———遅延効果による計画的なオプティックハイド……。ティアナ、大分使い方が器用になってきたね。

関心も束の間、ティアナはアンカーショットによる魔力糸でフリードに飛び乗る。

「ティ、ティアさん!？」

フリードリヒがびっくりして振り落とそうとするが、一緒に乗っているキャロの安定までなくなり、慌てて大人しくなる。

クロスミラージュは第2形態であるダガーモードへと姿を変え身動きの取れないキャロの首もとで魔力刃が止まる。

「私の勝ちね、キャロ」

「は、はい・・・」

ぐったりと項垂れるキャロにティアナは苦笑しながら肩を叩く。

フリードリヒはゆっくりと降下していき、地面に二人を降ろすと元の小さな子竜に戻る。

「でもびっくりしましたよ・・・まさかフリードに飛び乗るなんて・・・」

「キュクル〜！」

飛び乗られた本人であるフリードリヒは喉を鳴らしながらそっぽを向く。

「あはは・・・ごめんごめんフリード。  
びっくりさせちゃったよね」

ティアナが頭を撫でると機嫌が直ったのかフリードリヒは小さく鳴く。

「じゃあ、私エリオ君とスバルさんと一緒に応援していますね！」

キャラは『頑張ってください！』と体でポーズしながら訓練場の観覧席へと走る。

既にこの時点でフォワードメンバーは残りティアナだけとなった。

## 光隠し（後書き）

士郎の治療のシーンはぶっちゃけいらなと思うのですが、知り合いがしつこく、士郎にけがを負わせたままなのか！と攻め立てられたので一応^^；

キャラがあっけないと思ってしまった方・・・すみません><;  
元々の振り分け自体間違った気分を味わっているのは他ならぬ自分です（マテ

背景を白に戻すと言っておきながらアリスブルーに（白のコード忘れたなんていえないry

## BAD SPELL

——まさか、ティアナがあんな無茶をするなんて……。

アクセルシュートを使つての移動はティアナの基本行動であるが、フリードに飛び乗るとは考えもしなかった。

高空戦闘を得意とするのはとフェイトにとってはまず考えない手である。

ある程度硬いキャラの装甲を考えてティアナ相手でも大丈夫だろうと踏んでいたが、キャラがエリオとのコンビとしてめまぐるしい成長を遂げたように、ティアナは先のJS事件で一気に単独戦闘に対する経験が追加され、元々鋭い直感と状況分析がさらに磨きがかかってきている。

——必要な時には自らが飛び込んでいってしまうあたりなのはに似たのかな……。

フェイトはそんな未来も共にこれから戦場を駆けるだろうティアナに対しそう感想を心中漏らす。

前から思っていた事だが、なのはとティアナは似ている。

同じセンターガードという事もあるのかもしれないが、ティアナのそれは幼き頃のなのによく似ていた。

平気で無茶をしておいて、その結果仲間に勝利をもたらしてしま

うのだ。

良くも悪くも諦めが悪く、粘り強い。

こちらにとつては無茶をしでかされて毎度毎度ひやひやするが、心強いのも確かであった。

——まあ、それでも結局は中心に立って、体の負担をも顧みずに突撃しちゃうんだけどね……。

当の本人であるのはティアナの奇策に面食らいつつもこちらの斬撃を上手く、避ける。

そして再びティアナはこちらの援護に復帰する。

完全な2v1の状況になり、なのはは顔には出さないものの焦りつつあった。

その頃、観覧席では……………。

「うわぁー！ティアすごいー！！」

大声で敵であるはずのティアナの応援をするスバル。

「ふむ、セイバーか。名の通りの素晴らしい剣筋だ。今度手合わせ願いたいな」

セイバーを見つめ拳を握りしめるシグナム。

「フ、フェイトさん大丈夫かな・・・」

親であり、この模擬戦のリーダーであるフェイトをエリオは見守る。

「アイツら・・・なかなかやるようじゃねーか・・・」

民間協力者達の戦闘を見ながらヴィータは呟く。

「皆さん、頑張ってください！」

つい先ほどこちらへと来たばかりのキャロは戦闘継続中のメンバー全員に声援を送る。

だが一番の視線は民間協力者たる4人へと向けられていた。

そして4人は同時に思う。

これは・・・本当に模擬戦なのか・・・と。

宝石魔術の連続発動により、士郎の視界は光だらけのものであった。

その姿さえ見ることが許されないかのように、絶え間なく呪文が凜の口から紡がれる。

純粋な魔力が雨のように衛宮士郎の体へと降り注ぎ、士郎はそれを干将莫邪で防いでいた。

女性にしては強いセイバーの腕力にアーチャーは苦渋の表情を隠せずにながらも手にした干将莫邪でギリギリのラインで受け流す。

だがもちろん彼女はアーチャーに休憩なんて言葉を忘れさせるかのごとく、凜とした表情のまま素早く切りつける。

士郎はこのままでは埒が明かないと、凜に対し突進する。

それこそ、イノシシのように猪突猛進に。

すかさず凜はガンドの乱れ撃ちにより士郎を攪乱する。

莫邪で士郎は凜のガンドを横薙ぎにするが、その間にむしろ凜は自ら士郎へと近づく。

そのまま凜は士郎へと崩拳を繰り出す。

それをまともに受けた士郎はグッと声を堪えながら、干将を突き出す。

「・・・クッ！ いやまったく・・・さすがに騎士王相手に正々堂々の勝負なんてするものではないな・・・！」

アーチャーは悪態をつきながらも防御に徹する。

だがそれでも何度もセイバーの剣戟により干将莫邪は弾かれ、ま

た新しいものを投影する。

「……まったく、剣士でもない貴方が剣使いである私に剣で対等な戦いをしようだなんて、正気の沙汰とは思えません、弓兵<sup>アーチャー</sup>!!」

何合と打ち合う度にスピードが増す剣戟に既にアーチャーは視認することすら適っていない。

おまけに手加減されている気分になっているのか、セイバーは不機嫌だった。

既に彼女はアーチャーをサーヴァントとしてしか、見ていないかのように剣を迷わずにアーチャーへと向ける。

それは聖杯戦争の時と変わらぬ徹底的な戦力差をアーチャーに味あわせた。

「と……遠坂っ! ミニスカで格闘はどうかと思うぞっ!!」

士郎は痛みに悶えながらも、そんなことを言い出す。

すると何やら士郎の耳にピキン、と何かが切れるような音がした。

士郎は顔をあげて恐る恐る凜を見やると、そこには、もしオーラというものが存在していたら、間違いなく彼女の周りを赤いオーラが溢れだすようになっていただろう……、といった感じに怒った遠坂がいた。

顔は笑っているが……何というか、目が笑ってない。



「うふふ・・・衛宮君。面白いことを言うわねえ。」  
つまり、戦闘中にもかかわらず、衛宮君はそんなこと気にする余裕があるんだくへえく・・・!!」

言葉に出すほど凜の怒りのボルテージが上がるような気がしてならない。

「・・・遠坂もしかして怒ってるのか・・・？」

十中八九そうなのだが一応念のために聞いてみる。

「怒ってない・・・」

あ、あれ・・・？怒ってないの・・・か？

「・・・わけないじゃないの!!」

凜は微妙に顔を赤くしながらガンドを放つ。士郎は直感頼りにギリギリのラインでよける。

背後にあったビルに当たったガンドは綺麗に弾丸のように穴をビルに空けていた。

おまけに・・・少々焦げ臭い。

「と・・・遠坂殺す気か!!」

その殺意がありありと込められているガンドならぬシェインに士郎はついこれが模擬戦で非殺傷設定であるという事を忘れる。

「ええ・・・そうよ、そうに決まってるじゃない!!」

一度死んだ方がアンタのためになるに決まってる・・・今度はもう少しデリカシーのある人間に生まれ変わってきなさい!!」

既に理性の欠片もない凜は罵詈謗とともに無数のガンドを士郎に放つ。

士郎はそのあまりにも勢いに干将莫邪を構えることすら忘れ逃げ出す。

それを尻目に見ていたセイバーは一瞬ポカンとした表情で手を休める。

それはアーチャーも同じで額に冷や汗を滲ませながら過去の自分とそれを追う現在のマスターを見る。

「（ああ・・・昔このようなデジャブがあった気がするのは、私の気のせいか・・・）」

いや、きっと気のせいではないだろう。

そして、思う。これからも衛宮士郎の女難は終わることを知らないだろう・・・と。

## **B A D   S P E L L (後書き)**

なんだかんだって結局かなり模擬戦長引いています^^；  
いったいどれだけ続ける気だ・・・俺。

活動報告で連絡させていただきましたが、一応今度からもう一つなのは×・h a c k／／で掛け持ちするかもしれません^^；（つまり元々遅い更新がさらに輪をかけて・・・orz

## 我を知らず

遠目に民間協力者達の戦闘を見ていたのはとフェイト、ティアナもその模擬戦というより、二人の命をかけた喧嘩（一方的な）にしばらく我を忘れていた。

『あ、あれえ・・・遠坂さんと士郎君どうしちゃったんだろ・・・？』

会話までは聞こえていなかったなのは達はその凜の変わりようにびっくりしていた。

『昨晚お会いした遠坂さんとは別人のようですね・・・』

とはティアナの感想である。

『いや、それにしたって・・・士郎君が何を言えばあんなに凜が怒るって言うんだろう・・・』

冷や汗をかきながらフェイトは今すぐにでも止めに行くべきかと思案する。

だがあの間に入ったところで何が出来る・・・？

たぶん、おそらく何もできないまま巻き込まれるだけだろう。

それほどの威圧感が凜にはあった。

「ねえ、なのは・・・この場合どうするべきだと思う？」

口に出してなのは聞いてみると、なのはしばらくあごに手を当ててかたまる。

「とりあえず、あのままじゃいくら非殺傷設定とはいえ士郎さんがただでは済まないんじゃないやありませんか・・・？」

未だ追手から必死に逃げる士郎の走った後は全てとっていいぐらい等しく地面が焼け爛れていた。

先程まで凜が使っていたガンドとは比べ物にもならないぐらい、鋭く殺意が籠っている。

だが怒っている割に、凜の一撃一撃の正確さは先程までと変わらず、彼女自身が完全に我を忘れて突進しているというわけではなさそうだった。

そのような無謀は凜という存在そのものを否定する、とでも言うかのように魔術のキレは戦闘に慣れていくほど鋭くなっていく。

「・・・フェイトちゃん、ティアナ。ちょっと休戦してあの二人を止めるよ！」

なのはは意を決するとレイジングハート・エクセリオンを振りかざす。

「うん、了解。なのは!!」

「了解です、なのはさん！」

二人もバルディッシュ・アサルトとクロスミラージュを構える。

あの二人の間に今突撃するという事は、そのまま力尽くで遠坂凜という士郎曰く“一流の魔術師”という奴を止めなければならぬという事だった。

セイバーは一瞬、手を止めた自分に驚きを隠せずにいた。

今なぜ自分は目の前に敵がいるというのに、視線をそらしたんだろう。

昔の自分ならばマスターに命の危険が真の意味でなければこの様な事はなかっただろう。

・・・私は何をしている？聖杯戦争？そのようなモノは終わった。ならば、なぜ現界し続ける？無論、間違っていると言われた理由が知りたかったからだ。

今の自分はなんだ？サーヴァント・・・セイバー。今いるのはアルトリアなどという少女なんかでは決してない。

ああ・・・と。

今更気付かされた。

自分が平和な日々が悪くないと思っている事に。

そして同時に思う、自分はそれでもマスターを守るための騎士なのだ。

「・・・・・・・・」

セイバーは無言で赤い騎士を睨めつける。

今の自分の心は否定しない、だけど、それでも・・・自分はセイバーだという事は忘れるわけにはいかない。

騎士の誇りを取り戻すために、それが八つ当たりだとしても・・・とアーチャーへと刃を向ける。

彼は、そんなセイバーの心を読んだのか、ムカつくほどの小馬鹿にするような笑みを向け、言った。

「————ならば、セイバー。存分にかかってくるがいい。私とてこの平和という奴に溺れ、我を失っていた。お互い様同士、戦を以って勘を思い出すためにな————！」

アーチャーは勝てないということを理解しつつもその手に干将莫邪を持ち続ける。

「そうさせてもらおう、アーチャー！  
死戦ではないとはいえ、油断すればここからは命取りになるでしょう————！」

二人はマスターたちのいざこざを忘れ、衝突する。

互いに見失っていたものを取り戻すために・・。



## 我を知らず（後書き）

短いうえにかなり真面目になってしまいました。・・・セイバーさんが。

ちなみに個人的にセイバーとアーチャーは意見は違えど気が合う同士という位置付けです。

深い意味はありませんが・・・

## 意思

「ハアツ——！」

セイバーは力を振り絞るかのように声を上げる。

大剣と双剣、両者の得物は互いの首を討とうと繰り出される。

そこに間断はなく、容赦はない。

放つ一撃は全て必殺の意思によるもの。

それが模擬戦とはいえ、いざ戦えばそんなもの関係ない。

「っ————！」

透明な“何か”がアーチャーの領域を侵犯する。

繰り出される剣戟が回を増すごとにアーチャーの守りを崩す。

「ぬっ————！」

二度、アーチャーから苦悶が漏れる。

セイバーの剣撃は、彼の鷹の眼を持っても先ほどと同じく時間がたつほど視認できるものではなくってきている。

得物を振るう腕の動き、その足捌きさえ、既に不可侵の領域に加速しつつあった。

「—————っ」

それをここまで防ぎきったのは、以前にもほんの一瞬とはいえ打ち合いを経験していたからだ。

アーチャーは今の自分に出来る事——即ち攻撃箇所の調整を施した。

赤い外套の騎士は、自ら致命的な隙を作る事で攻撃を限定させる。

無論、それを躲せねば一瞬で敗北する。

だからこそ、油断出来はしない。

アーチャーが知っているセイバーというサーヴァントは能力やましてや外見で侮ったりするような甘い考えの持ち主ではないのだ。

以前に得た情報を元にした行動予測と、培ってきた戦闘経験による状況打破。

それが『心眼』と呼ばれる、修練によって得られる鉄の心だ。

それは非凡な物などでは断じてない。

彼の持つ唯一の技術。<sup>スキル</sup>

セイバーの持つ『直感』のような先天的な物ではなく、愚直なまでに修練を重ねれば誰にでも手が届く、凡人故の武器だった。

「————」

セイバーは手に持った“何か”を翻し、わずかに足を止める。

そのアーチャーの避け方に納得が出来ずに、観察体制に入っただ。

勝敗はもはや明らかだった。

白兵戦ではアーチャーのサーヴァントがセイバーのサーヴァントに勝ち目はない。

そんな事はお互いに判りきっていた事だ。

アーチャーがその名の通り“弓兵”であるのなら、遠距離からの狙撃でなくては勝負にさえなりはしない。

だが、アーチャーは今のところセイバーの攻めを防いでいる。

とうに劣勢、後数合も保つまいが、それでも久しぶりに本気となった自分の剣を受けきっているのだ。

————ヤツが強いのか、それとも私の腕が落ちたのか……。

いや、と、心が否定する。

そもそも彼は“エミヤシロウ”だ。

たしかに弓を持てば彼は百発百中とまで謡われるほどの精度を持つ。

だが、それは決して彼が剣を持ったら劣る。という理由にはならないのだ。

もとより、確かにお互い手を抜いている部分はあった。

サーヴァントの戦いは、つまるところ宝具の戦いだ。

必殺であるソレを出さずに追い詰める事こそ手を抜いている証拠。

模擬戦故にお互いそれを繰り返さないと模擬戦前に約束した。

彼もそれを承認したし、彼が守るなら私が宝具を繰り返す事などはまずない。

『そもそも、模擬戦ごときで私があれば使うわけなからう』

至極尤もだ。

だがサーヴァントが打ち合うという事は決着をつける気があるなら宝具の出し惜しみはタブーだ。

そして今の自分たちがやっているのはただの手加減をし合った馴れ合いの緩戦である。

「クッ———！」

「づっ——！」

一際高い剣戟。

舞い散る火花と共に、両者の体が後退する。

アーチャーに叩きつけるように振るわれる“何か”による渾身の一撃は、同じくアーチャーの渾身の一撃によって相殺された。

遠坂凜は内心現在の自分に呆れ、ため息をついていた。

もちろん、そのようなことは顔には表れておらず、今もガンドが衛宮士郎へと放たれていた。

感情を制御できずに、衛宮士郎への怒りがその指を弟子である彼へと向ける。

運がいいのか、彼はたまにかするぐらいで一度も当たっていない。

———ま、当たったら非殺傷設定で死にはしなくても、呪いでぶっ倒れるでしょうけど。

そんなことを思いながらも足を止めず、敵を追う。

先にいった通り、今は自分でもこの怒りを納める事も、他へと矛先を向ける事もかなわないのだ。

「遠坂さんストップ！」

いきなり空中からディバインシューターが凜の足もとへと放たれる。

なのはがこちらの足を止めるために、放ったものだった。

「何よ！？邪魔する気・・・！？」

心が正直に言葉を口に出させる。

その威圧に一瞬だけなのはが表情を崩す。

「うわっ！？高町さん遠坂から離れて！！」

士郎が逃げる足を止め、3人の乱入者を凜から庇うように、干将莫邪を構えて立つ。

その態度は凜という火に油をゆっくりとたらし続けていく。

「ふ、二人とも落ち着いて・・・！」

フェイトが控えめに、だが強く言う。

凜はそんなフェイトの言葉が聞こえていなかったかのように、士郎を視認した途端、

「stark——Gro? zwei」

たった一言で、彼女は魔力を開放する。

3人の魔導師は目の前で起こる魔力の塊による一斉射撃に驚き慄く。

「クッ———！」

士郎は自らの身を干将莫邪で守るが、それは途中で耐えきれずに破壊され、衝撃で地面に倒れ伏す。

「————っあ」

凜は自分がやり過ぎてしまった事に撃ってから気付き慌てて正気を取り戻す。

ダメージを受けたのは衛宮士郎だけではなく、3人の魔導師さえも巻き込んでいた。

それほどの魔力を一気に凜は解放してしまっていたのだ。

だがいささか以上に頑丈な体をしている、一番ダメージを受けた士郎が一番最初に立ちあがった。

その後が続いて余波を受けて地に着いたのはとフェイト、ティアナが立ち上がる。

「・・・遠坂、やり過ぎだ」

士郎はやられた張本人だと言うのに、他人事のように凜に指摘した。



「・・・悪かったわよ」

ばつの悪そうにそっぱを向きながら、凜はそれでも3人に謝罪する。

士郎には謝る気がないようだが。

## 意思（後書き）

今日でF a t eは7年目を迎えましたねえ〜おめでとう^^F a t e!

そーいやもう何年もF a t eプレイしてないな・・・大丈夫だろう  
か、俺（あ

## やりすぎる者達

「それで、原因は何なの？」

フェイトが苦笑しながら、士郎と凜に視線を向ける。

だが、途端に凜は口を噤み、士郎を睨みつける。

それぐらいのことを士郎はやったあるいは、言ったらしい。

「・・・士郎君なにやったの？」

「え、俺・・・？何かしたかな・・・遠坂」

・・・あ、また何かが切れる音が・・・。

「士郎・・・アンタあんだだけ痛い目見ても懲りてないのね」

「・・・え！？」

「はい、ストップストップ！

で、結局遠坂さんは士郎君に何をされたのかな？」

慌ててなのはが二人の間に入る。

「・・・別に。この馬鹿士郎が中度の獣だってことを身にしみて理解しただけよっ」

「け・・・けだものって・・・」

言われた言葉にショックを受けたのか、士郎は顔を下に向け、明らかに落ち込む。

「あら、自覚ないの？衛宮君」

「あるわけなからうっ！馬鹿者！！お前は一体何を言い出すんだっ  
！！」

士郎は顔を赤くしながら言い返す。

『なのはさん、フェイトさん・・・どうすればいいでしょうか・・・  
』

『うーん、やっぱり士郎君に問題があるっぽいけど・・・』

「何よっ！？戦闘中にミンスカがどうだの言う奴の何処が変態じゃないっていうのよっ！！」

・・・。

ああ、そういうことか。とつい3人で頷く。

「駄目だよ、士郎君。戦闘中にそんなとこばかり見てちゃ・・・」

「士郎、他に言い方があったんじゃないかな・・・」

「士郎さん、デリカシーのない発言をされたわけですね・・・」

女性陣は既に凜の味方に付き、苦笑するなり、呆れるなりして

いる。

「・・・なんでさ」

士郎はがくつと肩を落としながら溜息をつく。

凜はやはりそれでもご機嫌斜めらしく、そっぽを向いている。

「まあ、遠坂さんも遠坂さんだよ？ 士郎君も男の子だもん、そりゃあ気になるのかもしれないし・・・」

いや、フォローをするところが微妙にずれてるんですが・・・。

だが凜はそれで少し頭が冷えたのか、未だぷいっとそっぽを向いてこちらに視線をくれないが、先程みたいな敵意は薄れていった。

「ほら、士郎君。遠坂さんに謝らなきゃだめだよ」

「・・・む。

・・・その、悪かった遠坂。俺も配慮という奴が欠けてた」

頭をかきむしりながら士郎は謝る。

「・・・ふん。

分かればいいのよ、分かれば」

顔を赤くしながら、遠坂はそんなことを言う。

・・・やっぱり、これでも俺が悪いのだろう・・・か。

「はい、解決したのは良いけど・・・」

なのはが二人の戦場の痕を見回す。

「えーと、凄い破壊痕だね」

フェイトが苦笑しながら士郎と凜をからかう。

「いや、でもすごいです・・・」

まるでなのはさんとフェイトさんが本気で対決した痕のような・・・

」

つい漏らした言葉に、やばいと思ってティアナは口を噤む。

なのはとフェイトがそれを聞いて、いやいやと笑いながら首を振る。

どうやら怒ってはいないようで、ティアナは内心ホッとする。

「うーん、このまま模擬戦続行は無理かなあ」

・・・あっちではまだ二人が戦ってるけど」

なのはの視線に合わせるように残りのメンバーがその視線の先を追う。

そこでは、セイバーとアーチャーが未だ必死の攻防戦を繰り広げていた。

と、いつでも、疲労がたまっているらしいアーチャーは、既に歯切れが悪く、外套は既にほとんど形を保っていない。

遠くから二人の力む声が届くが、アーチャーに覇気はない。

何十という数の干将莫邪が弾き返され、火花を散らして破壊される。

だというのに、未だセイバーは凜とした表情で見えない“何か”を振るっていた。

だがこの状況ではもう長くは続くまい。

そして二人の攻防戦はこの後十数分続いた。

セイバーがふるった“何か”がアーチャーの腹部に一閃貫いた。

「私の勝ちです。アーチャー」

凜とした声でセイバーは坦々と告げる。

「さすが騎士王だ。

俺のような未熟者では到底およびもせんか」

痛みをこらえながらアーチャーはザシッと音を立てながら膝をつく。

これが非殺傷設定でなければその場でアーチャーという名のサーヴァントは光となり、消え去っていただろう。

「あいつら、無茶しすぎだ・・・！」

「同感。何ムキになってんのよセイバーとアーチャーは！」

いや、今さっきまで士郎を殺そうとしていたのは誰だったんだろうか。

魔導師組が苦笑しながらそんな二人を見つめる。

中途半端になってしまったが、これで今日の模擬戦は終了。



## やりすぎる者達（後書き）

本当はセイバーVSフェイトあたりまでやろうと思ってたんですが模擬戦が長くなりすぎるのもあれ何でここにて中断。

また別に機会に繰り越そうかなと思います。

ところで、ずっと士郎の口癖である「なんでさ」を使わなかったことに違和感があったので今日無理やりねじ込みましたw（オイ

でも意外と多技を皆に使わせないようにするのって意外に難しいな・・・。

特に何度なのはさんはエクシードモードの技を書きそうになって「ハッリミッター付きダッタ！」な状態になっていました（苦笑

さて、とりあえずこれで2章が終わりました。

3章目からが本題になる・・・のかな。

昨日から正式に始めたのは×・hack／／ともども時間を見つけて更新していきたいと思います。

## サーヴァント

「さて、それじゃあ解散っ！皆お疲れ様〜」

教導官の言葉に4人のフォワードが大きく礼をしながら、

「お疲れ様ですっ！隊長！！」

4人の隊長副隊長に挨拶を手短に述べながら宿舎にある浴室へと向かう。

俺達はそんな4人に続くようにするが、なのはがこちらを見つめているのに気付き、足をとめた。

「ん、どうしたんだ？高町さん」

「先程から、私と坊主を見ているようだが・・・さて、何か疑問点でもあるのかね？」

アーチャーが腕を組みながらそう言うとき高町さんはびっくりしながら、首を横に軽く振った。

「あ、そんな大したことじゃないの。」

・・・ただ、二人とも全く同じ戦い方をするから、どうしてだろう〜とか思っただけなの」

「そういや、そうだね。使ってた剣もそうだけど、構え方まで一緒だったし・・・」

テストロッサさんが高町さんの疑問に頷きながら、こちらをまじまじと見つめる。

「なんだ、そんなことか」

「その坊主が私の真似をしているだけにすぎんよ。  
ただそれだけのことだ」

・・・む。

確かにそうかもしれないが・・・その言い方は少々・・・いやかなり気に障る。

「うーん、そういうものなのかなあ。」

結構一心同体って感じで息もあってたと思うんだけど」

「・・・・・・・・」

二人揃って固まる。

いやいやいや、同体はともかく、一心はないから！！

アーチャーも同意見なのか、忌々しそうにこちらを睨みつけてくる。

『あー、やっぱりこれって禁句だったのかな？遠坂さん』

目の前で睨み合い、火花を立てている二人になのはがこちらにこ

っそりと念話を送ってきた。

私は小さくため息をつきながら、「いつものことです」と表情で伝える。

「アーチャー、あんまり士郎をからかわないの」

上目使いで士郎を睨みつけているアーチャーの背中を軽く叩く。

「・・・・・・・・」

アーチャーは無言で引きさがり姿を消す。

これ以上やることがないため、霊体になったのだろう。

「まったく・・・」

やれやれと手を挙げる。

「え・・・アーチャーさんが消えた!？」

隊長&副隊長達4人が一斉にびっくりしながら今までアーチャーがいた場所を見る。

「問題ありませんよ、ナノハ」

「え、問題ないってセイバーさん・・・アーチャーさん消えたんだよ!？」

「あーアイツはまだそこにいるわよ?ただ霊体になってるから皆に

は見えないでしょうけど」

「え、そうなの・・・？　っていうか霊体って何・・・？」

「サーヴァントは私達魔術師に魔力を提供される事で現界しているのは知ってるわよね？」

うん、となのはとフェイトが頷く。

ヴィータとシグナムも一応報告書である程度のことを知っているらしく、微妙に疑問は拭えていないようだったが、軽く頷いている。

「それで、ぶっちゃけセイバーとアーチャーは使い魔としては最高位であるゴーストライナーなの」

「ゴーストライナー・・・？」

ヴィータが言葉の意味がわかりかねているのか反芻する。

「そう、サーヴァントって言うのは使い魔の中でもゴーストライナー、受肉した過去の英雄のことを呼ぶのよ」

「受肉した過去の英雄・・・」

シグナムが呟くように言う。

「ってことはセイバーさんとアーチャーさんはその、歴史に名を残しているような英雄ってこと・・・？」

「はい、そういうことになります。」

そして元が霊体である私たちサーヴァントにとって、肉体を維持することは契約者の魔力を、霊体の時と比べてかなり消費させることになります。

なのでアーチャーは用がない時は基本霊体となり凜の傍にいます」

セイバーがかわりに説明してくれる。

「じゃあ、セイバーも基本は霊体で過ごすってこと？」

「いいえ、私は例外なサーヴァントですので、霊体になることはありません。

出来ればマスターの負担を軽減するためにそうしたいところなのですが……」

セイバーが士郎を見ながら申し訳なさそうに言う。

「いや、セイバーが悪いわけじゃないよ。俺との契約の時、誤作動でペナルティがついてしまっただけなのはセイバーの方だろう？」

士郎が頭を掻きながら努めて笑顔で言う。

「まあ、そんなわけだから。アイツのことは気にしないでいい」

「うん、了解」

「じゃあ、私たちも風呂に行ってきますね」

「あ、私たちも汗かいたから一緒に行くよ。」

それに……まだ浴室がどこかで覚えてないでしょ？」

しまった・・・そうだった。

「じゃあ・・・案内お願いします」

「うん♪ほらフェイトちゃん、シグナムさんヴィータちゃんも行こっ！」

「うん、なのは」

「「あ、ああ・・・」」

なのはが3人を引っ張るようにして先頭に立って歩く。

だがそんな時、フェイトが士郎の方に小走りで近寄る。

そして小声で何かお互いに数回話した後、フェイトはなのはの隣を歩く。

「・・・？」

何を話していたんだろうか。

少し気になりながらも、後から聞かかどセイバーと一緒になのは達の後ろを歩く。

士郎は少し悩みながら最後尾について行った。

## サーヴァント（後書き）

さて、次はお風呂の回になる・・・のかなw

過度な期待はしないようにw・・・15禁ですので^^;

というより俺（駄作者）はうまい表現の仕方など知りませんので・・・

・w↑本音



## 暴走する部隊長（前書き）

※少々部隊長殿が暴走しています。

苦手な方は読まずにこの話はスルーをお願いします。

ちなみにこの話ではやてさんはやっど平和な時間が訪れているせいか、落ち着いて（？）××××しています。↑オイ！w

## 暴走する部隊長

「へえ、案外広いんだ？」

「ここまで大きいのは生前以来ですね」

簡易銭湯ぐらいの大きさの風呂に凜とセイバーが二人でそんな感想を漏らす。

「まあ、衛宮邸は家は屋敷並だけど風呂は普通の家と同じぐらいの大きさだものね」

「一人で入っているのですから、特段不便でもありませんしね」

「お待たせ、二人とも」

隊長、副隊長の4人が準備を終えて浴室へと姿を現した。

「あ、隊長達も来たんですね！」

先に入ってたスバルが風呂の中でバシヤバシヤと手を振る。

「こら、スバル。落ち着きなさいよ」

無邪気な笑顔で隊長達を出迎えるスバルにティアナがため息をついた。

「お、なのはちゃんフェイトちゃんもお風呂かー！」

茶色の髪がスバルの後ろからよきっ！と出てくる。

「あれ、はやてちゃんがこの時間に朝風呂なんて・・・珍しいね？」

「確かに珍しいね、どうしたのはやて」

「はやてはいつも夕方だけだと思っただけど」

「主、はやて。どうなされたのですか」

「いや、風呂に入ってただけでその質問詰めはないとおもうんやけど・・・」

苦笑しながらはやてが人差し指で頬を掻く。

だが、そんなはやての態度に逆に4人は不審に感じているらしく痛々しいぐらいに視線を向けていた。

「な・・・なんや！？その疑るような眼はっ！別に遠坂さんとセイバーさんと裸の付き合いするためだけに朝から風呂に入っているわけやないで!？」

「「「「・・・」」」」」

5人分の沈黙が浴室に訪れる。

水音がなければ完璧に無音な状態だったかもしれない。

そして、苦笑いをするスバルとティアナ、キャロはどうやら既に被害者なのだと、なのは達は察した。

「・・・凜、裸の付き合いとはどういう意味ですか？」

セイバーだけがよく意味を理解していないらしく、首を傾げた。

「・・・え？——あ、えーと、セイバー。この世の中には知らなくとも良い事がたくさんあるのよ・・・」

「・・・？そうなのですか？」

「うん、そうそう！」

なのはがまくしたてるように言う。

「・・・主はやて、その・・・昨日知り合ったばかりの相手にそれはどうかと思います」

「・・・はやて、やりすぎだよ」

シグナムとフェイトに諷められはやてがしゅんとなる。

・・・と、思いきや、

「遠坂さん、女の子同士のスキンシップって駄目な方・・・か？」

・・・全然聞いてなかった！！

「・・・え？いや、その・・・」

ためらうように、凜は腕で並より少し膨らみが足りない胸を隠す。

「（これは・・・意外とありなようやね!）」

目を光らせるはやてに4人が「そんなばかな・・・」と呆れる。

「・・・凜、・・・ハヤテ? その・・・何か変な気配を感じるのですが」

女同士だからなのか、まったく裸を見られても気にしていないセイバーは、風呂に浸かっていないというのに、顔が微妙に赤い凜と手をワキワキと無意識のうちにしているはやてを交互に見比べ首をかしげる。

そして、そんな無防備なセイバーに毒牙がいかないはずもなく・・・

「・・・なっ!？」

次の瞬間はやてはセイバーに飛びかかっていた。

「ハッハヤテ!？ 一体何事ですか・・・!!?」

セイバーが驚きながら倒れる。

「うわっ大丈夫!？ セイバー!」

凜がどうしたものかと目を泳がせる。

「はやてちゃん、急に飛びかかるのは危ないよっ!」

「いや、なのは。たしかにそうだけど、突っ込むところがちよつとずれてるからっ！」

「・・・大丈夫か、セイバー」

・・・みるからに全然大丈夫そうではなかった。

戦場で見せた気迫はそこになく、セイバーは自分の身に起きている出来事に理解が追い付いていなかった。

・・・はやての手が自分の少し膨らんだ胸を鷲掴みしているという現実を理解するまで数十秒の時を要した。

「やっ止めて下さい！ハヤテ」

理解したら理解したですすがに恥ずかしくなったセイバーは顔を赤くしながらはやてを引き剥がそうとする。

だが、何故か手に力が入らずそのまま崩し状態となっている。

「セイバーさん肌すべすべで羨ましいなあ〜♪」

それを見ていたなのは、フェイト、シグナム、ティアナ、キャロが顔を赤くしながら如何したものかとあたふたしている。

ちなみにスバル、ヴィータは前者は笑いながらごまかし、後者は微妙に久しぶりに見たこの状況に呆れている。

そしてセイバーが力なく項垂れたと同時にその毒牙は遠坂凛へと向いた。

「・・・ちよっ!?!?」

呆然とその現場を見ていた凜は反応が遅れ、そのまま膝をつく。

「・・・っ!?!?」

声にならない叫び声を凜はあげた。

そのころ、エリオと共に二人で風呂にまったりと浸かっていた士郎は・・・。

「・・・!?!?」

急に怖気が走り、風呂とは関係ない汗を掻く。

「どうしたの? 士郎」

急に顔色が悪くなった士郎にエリオが吃驚して声をかける。

「・・・なんでもない・・・たぶん」

——遠坂の叫び声みたいなのが聞こえた気がしたけど、気のせい・・・だよな。

杞憂であることを願いながら、士郎はエリオとの話題を探す。

そういえば、テストロッサさんに頼まれていたことがあったっけ。

「なあ、エリオ。相談があるんだが」

意を決してエリオに話しかける。

「?なんですか?」

「その・・・だな。武器は違えど俺たちは戦場において同じGWだ  
ガードウイングろ?」

だから・・・俺も未熟だけど、よかったら一緒に訓練しないか?」  
て」

そう、頼まれたのはエリオを鍛える事だ。

素早く動いての戦闘法や近距離線での打ち合いは前者はフェイト  
が、後者はシグナムがある程度鍛えてきたらしいが、二人は良くも  
悪くも女性である。

男と女では体つきが違うし、何よりフェイトもシグナムも忙しい  
身であり、毎日付き合えるわけではない。

だから適材適所たる衛宮士郎に出来ればお互いの得手不得手を理  
解し、鍛えてもらうとフェイトは思ったのだ。

もちろん、衛宮士郎の戦い方が無茶無謀の類だというのは承知の  
上で。

士郎は、自分は戦う者ではない。と言っていたが、その動きは、  
鍛えられているからによるものであり、ただの当てずっぽうの剣戟



ではないのは誰が見ても明らかだった。

「えと、よろしいのでしょうか？」

「ん、ああ。逆にこっちが弱くて足引っ張るかもしれないけどさ」

赤銅色の髪を掻きむしりながら苦笑する。

どうやら髪を掻きむしるのは癖らしい。

「本当はテストロッサさんが毎日エリオを見てやれるのが一番だとは思うんだが、まあ・・・男同士の方が分かる部分もあるだろう？」

エリオの倍近く生きている士郎にとって毎日毎日沢山の女性に囲まれての訓練は思春期に到達したエリオにとって他の意味でつらいという事も容易に察していた。

「では・・・こちらからもよろしくお願いします！」

六課での初めての理解者にエリオは嬉しくなる。

そしてエリオ自身も模擬戦で見せた士郎の動きに学ぶべきところがあると感じていた。

自分に足りないところを他の長所で補う戦いをする衛宮士郎の戦いに。

それと同時に、短所を克服すれば彼はもっと強くなるんだろうな、とエリオは思う。

「ああ。一緒に頑張ろうな、エリオ」

笑顔で士郎は言う。

その年上ながら子供らしさが残ったあどけない笑顔にエリオは尊敬にも似た感情を胸に抱いた。

「はいっ!!」

———なんだか、お兄さんが出来たみたいだ・・・。

密かにエリオはそう思った。

二人は女浴室でおもいにもよらない出来事が起こっていることを知らない・・・。

## 暴走する部隊長（後書き）

誰か、このはやてを止めろ…w

まあ、友人のリクエストだったのであしからず^^；

## 恨めない奴（前書き）

暴走する部隊長の一応続きです（苦笑↑避けた人はこれも避けた方が吉・・・ですかなへへ；

## 恨めない奴

「遠坂さんも肌綺麗やな。ホント羨ましいよ」

そんなことを言いながら未だはやては凜の肌に触れる。

「く……くすぐったいですからっ！」

必死に離れようとする凜に、はやては腕をねじ込むようにして離さない。

「離さへんで♪フェイトちゃんやシグナムみたいな大きいおっぱいもいいけど、これもこれでありやしな♪」

ルンルン気分なはやてはいつもよりむしろ強引だ。

『ね……ねえ、なのは……。今日のはやて少し変じゃない？』

『たしかに……。はやてちゃんは嫌がる子に無理やりはしないはずだけど……。』

二人はそのあまりにもの変わりように驚きを隠せない。

はやてが“揉み魔”であることは幼いころからの仲であるのとフェイトは知っている。

……。というか、経験者だし。

ただ、はやては本当にいやがる人相手にそのような強引なスキン

シップをしたりするような人物ではない。

『ねえ、ヴィータちゃん、シグナムさん。何か心当たりない？』

『んー・・・、わかんねえ』

『特に心当たりは・・・』

シグナムは顎に手を当てながら考え込む。

昨日何かあっただろうか・・・。

確か昨日、夜中に主は喉が渴いたと言って一度起きて寝なおしていたが・・・。

『ん、喉が渴いていた・・・？』

『シグナム、どうしたの？』

呟くように言うシグナムにフェイトが覗き込むように顔を窺う。

『・・・なのは、テストロッサ。主の顔色がやけに赤い理由は風呂だけか？』

『へ？』

『どうして、そんなことを・・・？』

二人が大きく首を傾げ、はやてを見る。

よく見れば目はトロンとしているし、口調もいつもより豪快だ。

『・・・もしや』

『もしや?・・・なんだよ、シグナム』

『・・・先日レティ提督に久方あったのだが・・・』

『そうなんだ?でもそれとこれとどんな関係が・・・?』

言うとしグナムは気まずそうに顔を下げる。

『・・・酒をもらったんだ。

良い蒸留酒だから飲んでみると良い・・・と』

『だからそれと何の関係があるんだよ?』

じれったそうに、ヴィータが言う。

『・・・つまりだ。昨日主は夜中起きて何かを飲んでいる・・・。  
その何かがもしやとは思うが・・・』

『えと、それはつまり・・・』

『はやてちゃんが寝ぼけてそのお酒を飲んで酔っちゃってる・・・  
ってこと・・・?』

無言でシグナムが頷く。

「「「・・・」」」

……  
そういえば、たしかに微妙にアルコールの匂いがするような……

「さあて、遠坂さん！髪洗おうな〜♪」

ハイテンションなはやてはそのまま引きずるように模擬戦でぐったりしている凜を連れていく。

「じ……自分で出来ますっ!!」

「遠慮なんていらへんって♪」

『悪意は全くなさそうだな……』

『だね……』

凜は実際嫌がっているのだが。

ちなみにセイバーは凜が襲われている間に髪を洗い、現在はスバル、ティアナ、キャロと湯の中である。

おそらく、また襲われる前に直感的に逃げ込んだのだろう。

「ほら〜4人もさっさと体洗わんと風邪ひくでえ〜それともうちに洗ってほしいんか〜？」

「え、いや遠慮しとくよー」

「私はその……なのはと二人で」



「私は自分で出来ます」

「あたしも」

「なんや皆つれないな」

・・・いや、普通そんなに手をワキワキとしていたら誰も了承なんかしないから。

4人揃って苦笑しながらさっさといつも愛用しているシャワールームへと入る。

・・・なのはとフェイトは二人一緒であったが。

そして戻ってきた頃には凜とはやては共に湯船に浸かっており、なんだかはやての調子が微妙におかしかった。

未だ凜とセイバーは出来る限りはやてに顔を合わせようとせず二人で縮こまっている感がある。

「・・・主はやて。顔色が悪いようですが、湯に当てられたのですか？」

シグナムがさすがに心配になり、声をかける。

「・・・あ、シグナムか？それがなあ、朝から頭がほわほわしててなあ」

先程より若干声色は落ち付いているようだったが、それにあまり

あるほどに顔を先程より赤くしながら微妙にぐったりとしていた。

「・・・シグナムさん」

なのはが察したのか、シグナムに声をかける。

それにシグナムは微妙にため息をつきながら頷く。

「主はやて。いますぐ風呂からあがってください。  
そのままでは御身に悪影響があります」

予想通りならば、心拍数が上昇し、血圧が低下しているのだろう。

「それが力が入らなくてなあー」

「了解しました。今助けます。・・・テストロッサ、すまんが」

「うん、シグナムは右の方からお願い、私は左から」

「ああ」

「あ、私たちがシャマル先生を呼んできます！今上がろうと思って  
いたので！」

ティアナがスバルとキャロと共に風呂から出る。

「・・・頼む」

「」「はい！」「」

「・・・大丈夫ですか？」

セイバーが声をかける。

「その様子、ただ逆上せたってわけじゃなさそうね？」

さっきのことは水に流したとでも言うがごとく二人はシグナムとフェイトに風呂から引き揚げられたはやてを見る。

『えーとね、もしかしたらはやてちゃん。お酒飲んじゃってるみた  
いな・・・』

なのはが二人に念話で説明する。

それとか、と二人は苦笑しながら納得する。

『ごめんね、普通ならさっきまでの強引な行動だって嫌がる子には  
はやてはやらないんだけど』

フェイトが申し訳なさそうに言う。

『できれば、許してやってくれ』

『アタシからも頼む』

そんな4人の言葉に凜とセイバーは頷いた。

だが、それよりも。

「今は八神部隊長の様態をチェックするのが先よね」

凜は魔術による簡易治療を始める。

と言っても凜には傷を治したり、血止め、痛み止め関連の治療術はあるが、こういった類は専門外である。

心拍数を通常に戻るように、促すだけだ。

と、そこにクリーム色のショートヘアに白衣の中にはやてたちと同じ陸部隊の制服を身を包んだ、優しそうな女性が現れる。

「あなたは・・・？」

凜が魔術行使を止めながら聞く。

「シャルといいます。この機動六課の医務官です。  
よろしくおねがいしますねー凜ちゃん、セイバーちゃん」

初めての割にはフレンドリーに二人を呼ぶ彼女は気分悪そうにぐったりとしているはやてに近づく。

「あ、シャルか？どないしたんや？」

「もう、どないしたんや？じゃありませんよ、はやてちゃん」

「シャル、どうやら主はやては私が先日レティ提督から頂いた蒸留酒を飲んでしまっているようだ」

「あらら・・・」

シグナムの言葉にシャルが苦笑する。

・・・結構この状況は笑っていられるような状況ではないのだが。

「あ、でも既に応急処置はしてあるんですね、助かります」

「え、ええ・・・まあ。私は専門外なのですが」

「シグナム、フェイトちゃん医務室まではやてちゃんを運んでもらえる？」

二人は頷くとはやての体をタオルで包み、その上から制服の上着を着せる。

その後急いで自分たちも制服に着替える。それはなのとはヴィータも同じだ。

凜とセイバーはそれに倣い、先日着替えがなかったため渡された六課の制服へと着替えた。

医務室に到着すると、シャルははやてをベッドに寝かせ、すぐに治療を開始する。

緑色の魔力光がはやての血圧をゆっくりと正常値へと戻していく。

「さて、後はゆっくりと休めば大丈夫です」

シャルは一息つくと笑顔でそういう。

途端皆の緊張が一気に解けた。

「まったく、お騒がせな部隊長ね」

「ごめんね、二人とも巻き込んだじゃって」

「構いません、ハヤテが無事ならば気にすることなどありませんから」

「まあ、びっくりはしたけど、何事もなくてよかったわ」

「・・・今回の件は私の責任だな。主の手の届く範囲に酒を置いてしまっていた私の失態だ」

シグナムが面目なさそうに言う。

「シグナムさんのせいじゃないよ！」

「そうだよ、確認もせずに飲んじゃったはやてが悪いんだし」

なのはとフェイトが落ち込んでいるシグナムにフォローを入れる。

「はやてちゃん、反省してください」

シヤマルはそういいながら気付く、既にはやてが寝てしまっている事に。

「・・・むにゃむにゃ」

「良い眠りっぷりだな、はやて」

ヴィータが感心しながら言う。

「はやてちゃんらしいっちゃらしいかも・・・」

にやはは、となのはが笑う。

その後、しばらく皆で色々と雑談した後、凜とセイバーは自室に戻った。

## 恨めない奴（後書き）

落ちがあまりにも悲惨でゴメンナサイw  
実は先ほど書きながら思いついた落ちなので^^;↑人それを無鉄砲という



## 部隊配分（前書き）

環境設定

F a t e   s i d e

聖杯戦争終了半年後（士郎、凜ともに学園3年）

U n l i m i t e d   B l a d e   W o r k s ルートを主軸に

アーチャーが一度凜をキャスター退治のために裏切るがその後、衛宮士郎を殺さずに再契約。

士郎もセイバーと再契約を果たし、今回は霊体化はできないが（セイバーはまだ死んでいないため、元々霊体化は不可能）魔力供給は可能となった。

その後は微々たる差はなく、凜の士郎への魔力供給によりなんとかセイバーとアーチャーを現界させている。

また、凜にはキシュアの遺産である消費する魔力を25%軽減する魔法物質…深紅の太陽石を常日頃装備している。

簡単に言うとうとU B W ルートの並行世界である。パラレルワールド

なのはS t s   s i d e

J S 事件から1ヶ月後。

未だ隊長組は事件処理に追われているものの平和な時間を過ごしている。

基本原作と変わらない。

## 部隊配分

「お、今帰ったのか？遠坂、セイバー。随分な長風呂だな」

部屋に入ろうとすると隣の部屋から士郎が出てきた。

「あー、それがね・・・」

私は未だ結ばずに流したままの髪を肩から払いながら士郎に事の経緯を説明する。

士郎は途中色々と単語をぼやしたにもかかわらず微妙に顔が赤い。

うん、やっぱりすぐに表情に出てしまう士郎の性格は可愛いと思う。

「・・・そりゃあ、大変だったな二人とも」

頭を掻きながら士郎は苦笑する。

「まあ、酒が絡むと怒るに怒れないわよ」

「そうですね、特に彼女は無意識に飲んでしまったのですから、何とも言えません」

冷静に言い放つセイバー。

と、そこに・・・。

「二人とも、本当にごめんなあ！」

いつ目を覚ましたのか、はやてが近付いて来、謝罪した。

「大丈夫です、別に実害はありませんでしたから」

まあ、びっくりして我を失ってはいただけど。

私の言葉にセイバーも頷く。

「二人とも・・・怒ってないんか？」

恐る恐る・・・といった感じではやてがこちらを見上げる。

「怒ってませんよ。・・・ま、他にもこんなことやってくる知り合いはいますから」

例えば、鯛焼きとクレープの分け目もない悪友とか。

「事情が事情でしたので、怒っていてもきりがありません」

セイバーが淡々と言う。

もし、彼女が怒っていたらはやては少々無残なことになっていたかもしれないと思い、つい苦笑する。

「・・・？何ですか凜。いきなり笑いだして」

心底不思議そうにセイバーがこちらを見つめる。

「え、いや別に。何でもないわよ」

「そうですか、ならいいのですが」

別にどちらにしろ問題ないからか、特に追撃はない。

「ほんならよかった。

でもうちもだめやね〜寝とぼけとったとはいえシグナムの酒を飲んでしまうなんて」

苦笑しながらはやてがどよんと落ち込む。

「そんなの今度から気をつければ良い話だよ。  
今回の懲りたんだろ？八神さん」

士郎が見かねてフォローを入れる。

「・・・うん、そうやね。落ち込んでても何も始まらんし」

「ええ、その通りです。ハヤテ」

はやてが元気を取り戻す。

「あ、はやてちゃん！ラインが探してたよ？」

そこに通りがかったのはがはやてを見つける。

「そうなんか？分かった、すぐに行くよ！じゃうちは仕事に戻るから！」

はやてはそう言い残すと手を振りながら部隊長室へと戻る。

「大変だねくはやてちゃん」

一緒に見送ったなのはがそんな感想を漏らす。

「まあ、あの年で部隊長なら苦労は絶えないんだろうな」

自分たちとさほど変わらない年で一つの部隊を指揮するなんて、と士郎が感心する。

それに関しては自分も同感だ。

「そういえば、なのはは私たちに用事ですか？」

「うん、実はね。4人に私達の部隊に入ってもらいたいの」

「スターズ分隊とライトニング分隊に……ですか？」

「そういうこと。2人2人に分かれてもらうんだけど……」

合理的には自分はアーチャーと、そして士郎はセイバーとが当然の組み分けだろう。

何故ならマスターとサーヴァントの関係であるからだ。

「問題はどっちの組がどっちに入るか……かな？」

なのはが頷く。

「ナノハはどう思っているのですか？」

「うーん、遠坂さんとアーチャーさんがスターズ、士郎君とセイバーさんがライトニング・・・が良いかなと思うんだけど」

私達4人はそれぞれポジションとしては私がセンターガードかフルバック、士郎とアーチャーがガードウイング、セイバーがフロントアタッカーといったところだろう。

「その理由は？」

「一番の理由としては、ライトニング分隊にフロントアタッカーがない事かな、・・・ほら隊長であるフェイトちゃん、副隊長のシグナムさん、そしてエリオ。3人ともガードウイングだもん」

でもそれだと、ライトニング隊はガードウイングが4人になるわね・・・。

「でも、遠坂がスターズ分隊に入ったらセンターガードが3人になるんじゃないか？」

「それに、少々ライトニング分隊のガードウイングの数が多すぎる」

いきなり、アーチャーが実体化し意見を言う。

急に現れたアーチャーに、慣れてないのはが一瞬戸惑う。

「うん、実はそこが問題なの。」

どっちかを優先しようとするどっちかが問題になって・・・」

いいながらなのはこちらをちらりと盗み見る。

その視線から察するに、模擬戦の時みたいに士郎とアーチャーを組ませられないか、という事なのだろう。

心中ため息をつく。

たしかに2人を組ませ、スターズ分隊に配属、私とセイバーがライトニング分隊に配属されればある程度均衡するのだ。

だがどう説得するか。

「じゃあ、アーチャー。士郎と組んでスターズ分隊に入ってくれる？」

試しに、士郎を見習って直球でいってみる。

「…………マスター、それは命令か？」

目を閉じたまま微妙に普段より声が低くなっている。

相当士郎と組むことは嫌らしい。

「どっちに捉えても構わないわよ？でも、アンタがいったことでしょ、アーチャー。」

私とセイバーがライトニング分隊に行った方が良い、士郎かアーチャーがライトニング分隊に行くとガードウイングの数が多すぎる……って」

「……………」

「遠坂、俺は構わないぞ。」

どうせ、隊が違っててもそう変わるもんじゃないし。確かに俺もそっちの方が効率が良いつて言う事には賛成だ」

あ、衛宮君意外と今回はあっさりとしてるんだ？

「だってさ、アーチャー」

追い打ちをかけるように、私は値踏みしながらアーチャーを見る。

その視線に耐える事が出来なかったのか、アーチャーは冷や汗を掻く。

「………了解だ、マスター。私と坊主がスターズ分隊へと配属しよう。……構わないか？高町なのは」

「いや、私的にはそうしてくれると助かるんだけど……良いの？」

再確認するように、なのはが士郎とアーチャーに言う。

「そう気にすることではない、ナノハ。」

私たちはサーヴァントとマスターの関係ですが、互いに現在では敵でもないのですから、問題はありません。私が凜を守る代わり、アーチャーにシロウを守っていただけるなら」

セイバーのそんな言葉にアーチャーと士郎がむっと唸る。

守る守られる側となるとどうも両者納得がいかないらしい。



当然と言えば、当然だし、二人のその反応は私を含む、セイバーも分かっていたことだろう。

「というわけで、アーチャー。士郎をお願いね」

止めに私がアーチャーに命令する。

すると、アーチャーはぐっと唸りながら、頷いた。

「えーと、良いってことかな？」

「・・・ああ」

士郎とアーチャーが二人揃って頷く。

こういうタイミングは完璧なんだけどなー。

つい、二人の“エミヤシロウ”に私は朝から何度目かのため息をついた。

## 部隊配分（後書き）

ちなみに深紅の太陽石とは、hack／／シリーズに出てくるアイテムの名前です（爆

## トラブルの基

士郎達が機動六課に訪れて2日目の昼。

その頃、管理外世界114番 ロストエンブレムという世界に変化が起きていた。

人の体内のようなものが心臓のように波打ち、奇怪な音を立てる。

それは、魔力の塊でもあり、そうではないと言える。

意思があるといえ、あるといえ、ないといえ、ないといえ、ないといえ。

それ以前にこれは生き物なのか？

存在するという事は生き物であろう。

だが何を目的にしているのかは他の誰にも、いや、・・・もしかしたらその生き物自体もわからないのかもしれない。

ただ知っているのは自分が器だという事。

何のための器なのかは知らない。

「ふうん、呼び出されてきてみれば、まさかこんな所にこんなものがあるだなんてね」

雪をイメージさせる銀髪のを靡かせた深紅の瞳を持った少女は生き物である何かを懐かしそうに見る。

だが、姿が少々その現場に不釣合だった。

少女が身に纏っているのは学校で使う体操服の類だ。

しかも近頃は短パンが定石だろうに下にはブルマを穿いていた。

「でも穢れてはいないんだ？・・・ま、これが存在しようとなかろうと今の私には関係ないけど」

独り言だと理解していながら少女は声に出して呟く。

だがそこにこの世界とは違う類の魔力が流れているのは確かだった。

「魔術・・・か。魔導師の世界には知らないものよね」

少女は姿こそ少女の部類に入る姿だが言葉にはその片鱗さえ見せない。

ここにいても仕方ないと思った少女は、どうするべきかと考えながらその場を後にしようとする。

だが――――。

急に光り輝き、それは膨大な魔力を生み出し始めた。

「―――なっ・・・何!？」

いきなりのことに少女は血相を変えそれを凝視する。

そして、光が納まると同時に少女は理解した。

「……ここでも聖杯戦争が始まるんだね」

そこで少女はこの世界に呼ばれた理由を知った。

「……うん、お望み通り参加してあげる。

このイリヤスフィール・フォン・アインツベルンがこの第一次聖杯戦争に参加してあげるわ。<sup>ヘンズフィール</sup>天の杯さん」

少女……イリヤスフィールは自分自身びっくりするぐらいに口元を歪める。

そしてイリヤスフィールは陣を描きその中心に立つ。

「—————告げる」

「—————告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

汝三大の言霊を護る者、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ—————！」

迷わずにその小さな唇から言葉を紡ぎ、魔術行使を始める。

魔術の種類は召喚魔術だ。

光がイリヤスフィールを包み、消えた瞬間そこにはイリヤスフィールともう一人。

「召喚に応じ参上しました。

明白だけど一応問うとしよう・・・あなたが私のマスターですか？」

栗色のショートヘアに道場着を来た20代と思われる女性はイリヤスフィールの前で膝をつき、そんな事を訊ねた。

「ええ、そうよ。久しぶりねタイガ」

少女は懐かしげに自分のサーヴァントを見つめた。

「そうね、イリヤちゃん」

途端最初の真面目そうな口調はなくなり、親しみを込めた言葉へと変わった。

「で、分かってると思うんだけど」

「召喚されたってことは聖杯戦争が始まるってことでしょ？」

「うん、そういうこと。また久しぶりに二人で暴れるとしましょう？ 師しよー」

イリヤスフィールは己のサーヴァントに対し、尊敬するものに使うはずの“師匠”という単語を使う。

「おうよ！弟子一号！！」

そしてサーヴァントである彼女もマスターである少女を“弟子”  
呼ばわりした。

それが二人の関わり方であつた。

「ふふ・・・待っててねこっちの世界の“お兄ちゃん”」

イリヤスフィールは笑い、タイガは久方の戦場に手にした虎竹刀  
に力を入れる。

二人は自分たちと同じ理の世界から自分の弟とその恋人が飛ばさ  
れてきている事を知らない。

## トラブルの基（後書き）

さて、何故この二人なのかという突っ込みはあえてスルー（えちなみに設定として士郎と凜がいた本来の世界ではイリヤはUBWルートと同じく死んでいます。



## 気付けること、気付けないこと

はやてから民間協力者達をいろんな六課の設備へと案内するように頼まれた私は今、士郎と凜、セイバーを連れていろんなところをまわっていた。

といっても、もうすべて回り終えて宿舎への帰り道なわけだが。

たまたまオフだったから私が任命されたわけだが、それ以外に理由がありそうでならない。

と、足を止めて士郎が鼻を押さえるようなしぐさをする。

「へっくしっ!!」

中途半端に漏れる声の正体はもちろん士郎だ。

いきなりくしゃみをした彼に凜がニヤリと口元を歪めた。

「あら、衛宮君。誰かが噂しているのかしらね」

「ん、どうだろ・・・？噂するような奴なんて藤ねえぐらいじゃないか？」

凜の裏の籠った台詞をそのままに受け止めた士郎はありのままを答えた。

「藤ねえ？」

私は聞き慣れない単語になんとも聞き返していた。

「あー、俺たちの学園の先生で、俺にとっては一応保護者代りというか・・・こっちが保護しているというか・・・」

「学園？士郎と凜は学生なの？」

「ええ、私は17歳、士郎が18歳。同じ学園の生徒で今は同じクラスなのよ」

魔術云々とはかけ離れたその台詞に懐かしさを覚える。

「そっか、私となのは、はやては中学までしか学校行ってなかったし・・・何だか懐かしいな」

「そういえば、ハヤテもそうですがここにいるもの達は若者ばかりですね」

セイバーがふと思ったように呟く。

「うん、そうだね。私とはやて、なのはは19歳。フォワードの子達がティアナが17歳、スバルが16歳、エリオとキャロが10歳だよ」

「すごいな、幼馴染って話は高町さんから聞いたけど、まさか俺たちの1歳違いだなんて」

「若い若いとは思ってたけどエリオとキャロなんか10歳なのね」

二人がその新事実に驚きの声を上げる。

「何故、そのような年で軍職に？」

セイバーが疑問をストレートに質問する。

・・・予想はしていたんだけどね。

「私は、時空管理局にはお世話になったし、自分に出来る事をやりたいと思ったから」

9歳という若さで時空管理局の嘱託魔導師となった私は、現在の母、兄に当たるリンディ・ハラウンとクロノ・ハラウンの計らの御蔭でここにこうしていられると言っても過言ではない。

私を生み出した母、プレシア・テストロッサの次元犯罪に協力していた私は本来数百年の幽閉が普通だった。

それを必死に弁護してくれたり、出来る限りの手段を使って私を事実上無罪にしてくれた。

だから、その恩返しを含めて、自分と同じように悲しい思いをする人を一人でも少なくしていきたい。

だからこそ、私は今時空管理局で執務官として働いている。

「そうですか。強いんですね、貴方は」

セイバーはただそう言った。

何かこちらの感情を察したのかもしれない。だけど、彼女は今は

追求すべきではないと感じ取ったようだ。

密かにそんな彼女に心の中で礼を言う。

「強いつてわけじゃないんですけどね。」

他の皆も色々な事情があって自分の意思で時空管理局に努めている。  
す。

・・・本当はエリオとキャロにはもっと安全な仕事を選んでほしかったんだけど」

「そういえば、フェイトはあの二人の保護者なんだっけ？」

「・・・うん。いろんな事情があって私が預かる事になって・・・。」

でもあの子たちは何も言わずに良い子に育ってくれたよ。保護者の私の方が頼りなくて駄目駄目でね」

二人が良い子すぎて不安になる毎日もあった。

自分以外の誰かを頼る二人を見て自分が親として何もできていないという錯覚にとられる事もあった。

だけどその度に思う、私は二人の事をこんなにも大切に思っているんだって。

思わず苦笑が漏れる。

私は一体何を話しているんだろう。

「でも、二人はテストロッサさんになついている。それでいいんじゃないか？」

ぶっきらぼうに言う、自分と1歳しか変わらない青年の言葉に私は笑いながら頷く。

エリオの訓練に付き合ってくれることを承諾してくれた士郎に少なからず私は感謝している。

だから、今の下手なフォローも含めて。

「ありがとうね、士郎」

お礼の言葉を述べる。

「いや、礼を言われるような事は言っていないぞ？俺」

照れながら笑顔で言う彼の笑顔が今は眩しい。

「それでも、私が御礼を言いたかっただけだから」

「そっ・・・そうか。じゃ、どういたしまして」

「衛宮君、顔が赤いわよ？」

顔を赤くしながら頭を掻く彼に凜が未だニヤニヤしながら突っ込む。

「風邪ですか？シロウ」

「え、いや・・・そういうわけじゃない。

風邪なんて引いてないから、問題ない・・・断じて」

手を上げながら大丈夫だとセイバーに士郎は示す。

「そうですか、それならいいのですが」

「ふうん、風邪じゃないんだゝそかそか」

面白い玩具を見つけたように凧は士郎へと牙をむける。

「あはは・・・」

なんだかんだで士郎と凧は仲が良いなと思う、私フエイト・T・ハラオウンでした。

シロウと凧と別れた私は訓練場を眺めていた。

そこではフォワードの子達とナノハが訓練をしている。

「・・・セイバー」

実体化したアーチャーが私の横に立つ。

「何の用ですか？アーチャー」

気付いていた私は顔を向けずに声をかける。

「少し、二人で話がしたい。時間はあるか？」

「・・・ええ、私も貴方と二人で話したいと思っていた」

「そうか、やはり君も気付いていたか」

「そちらこそ。・・・凜は気付いているのですか？」

傍らでアーチャーが横に首を振る。

「おそらく、まだ気付いていない。アレのことだ。遅かれ早かれ気付くだろうがな。」

だが今は二人だけの秘密という事にしたいわけだが」

「了解しました。・・・ここでは目立ちすぎる。宿舎の屋上にでも行きましょうか」

「ああ、そうしてくれるとありがたい」

二騎のサーヴァントは顔を引き締め足を進める。

己の運命<sup>Fate</sup>を紡ぐように。

**気付けること、気付けないこと（後書き）**

もちろん、士郎君のくしゃみの原因はどっかのお姉ちゃんです。



## 世界が変わる時

「さて、ではそちらからどうぞ」

セイバーは屋上につくなり、そう切り出した。

前置きなど元々必要なかったか、と心中苦笑いする。

「この世界へと飛ばされて私達は英霊としての能力が低下した。

・・・おそらく、霊脈から離れ、人々の名声を完全に失ったのが主な原因であろう」

「ええ」

「だが、先程から低下していた分の80%ぐらいはほぼ元に戻った」

「そして、魔力の供給量が格段と上がっている・・・ということですか」

「ああ」

先に言うセイバーに俺は頷いた。

そう、いくら凜が一流の魔術師とはいえ英霊を本人だけの魔力で維持するのはかなり難しい。

俺はともかく、衛宮士郎へと魔術を送りセイバーさえも維持させていた凜に多くを求めることなど不可能なのだ。

だが、今その不自由さを全く感じない。

「まさかとは思うが、この世界にも大聖杯があるということ・・・  
でしょうか」

「・・・わからん、ここは並行世界だ。視認せねば確証はないし、  
憶測はあくまで空疎でしかない。

私らには未知な部分が多い・・・だがな、セイバー」

ありえないなんて事こそがありがたいのだ、と。

セイバーは少し忌々しい事を思い出したかのように顔を歪めた。

「・・・それで、もし聖杯戦争がはじまったとしたら貴方はどうするつもりですか？」

「・・・この身はサーヴァント。なら聖杯の意思には従わずにはおれまい？個人的な意見としては、アレがこの世界でもまた歪んだ存在ならば破壊せねばならんと思うがね」

そう、それは本心だ。

あんなものは俺自身と同じくどの世界にも必要がない。

ああ、そうとも。俺と同じだあれば。

「・・・そうですか」

セイバーが少し残念そうに余韻を持って呟く。

「・・・まだ――――」

「・・・？なんですか、アーチャー」

「君は、答えを得ていないのだな」

「ああ・・・、そのことですか。」

正直に言えば今でも私には解らない。ですが、貴方やシロウと共に  
いれば答えはおのずと出るのでしょうか」

何処か、遠い目をしたセイバーは、だが真っ直ぐにこちらを見つ  
めていた。

その視線は懐かしさと共に、違和感をこの身に抱かせる。

「・・・そうか」

かつて俺はアルトリアという名の少女に惚れた。

国のためにとその身を犠牲にし続け、必死で最前線に立って剣を  
握り続けた彼女に。

そして今日の前にいるセイバーは俺の知っているアルトリアであ  
ってアルトリアではない。

今は俺のサーヴァントではないどころか、聖杯戦争が始まれば敵  
同士の間柄ときたもんだ。

なにせ、この身もサーヴァントなのだから。

俺は心中自分に対して、嘲笑する。

あの頃、若き頃望んだセイバーとの平和な日々とやらの溺れてみたものの、やはり違う。

だが、まるでタイムスリップしたかのような彼女に切なさを覚えさせられた。

夕焼けの中必死に笑顔を作って見送った彼女はここにいない。

そして、間違った願いを抱き続けたままの少女がここにいる。

おまけに、俺は俺自身を殺せずにまだのうのうとしているわけだが……。

——衛宮士郎を殺す。

そのためだけに守護者とやらを耐え続けてきたというのに、一体俺は何をやっている。

だが、今の俺に奴が殺せるだろうか？

たった一人本当に彼の幸せを望んでいる少女の目の前で。

自分の現在のマスターであり、かつての友であった赤い少女が一瞬脳裏によぎる。

「まあ、何せよ今はこの世界に喚ばれた理由を解決せねばならんか・  
・・」

「……ですね」

偶々口から出た呟きにセイバーが頷く。

と、いきなりこの世界のマナに別の奔流が流れるのを感じる。

「……………っ!？」

「アーチャー……!」

疑問の答えが形づいて行くような錯覚、いや現実には頭が痛くなる。

「……何故この世界にっ!」

我知らず声を荒らげる。

「……霊脈。やはり私たちが呼び出されたからにはここでもやはり……」

互いの体に流れる魔力に満たされる感覚と同時に決別したはずの物との再びの出会いに落胆にも似た感情を覚える。

「世界が代わってもやはり俺たちがやる事は変わらん、というわけか」

口元を歪めて強気で言ってみるものの、心情的には怒りが遥かに勝っている。

「……戻りましょう、アーチャー。」

出来る限り二人が気付くまで私たちは今まで通りに振る舞って必要時には以前のように」

冷や汗を掻き、拳を握りしめているセイバーに、俺は頷く。

霊体化すると、士郎と凜の元へと戻るセイバーと共に凜を守るために戻っていく。

世界は魔術師に平和な時間を長くは与えてくれないようであった。

## 世界が変わる時（後書き）

さて、また自分でどこまで書いてたっけと忘れかけていましたデュオです、ども。

昨日まで修学旅行で記憶が飛んでいるという現実なんですけどね（ry

## 歪みの欠片

——夢を見た。

そこにはたくさんの崩れた建物があつて、所々地面が焼け爛れていた。

「水をくれ・・・」と呟く者、既に息を引き取り瓦礫の下に埋もれている者。そこにはたくさんの失われていくモノがあつた。

茜色に染まった空を倒れたまま少年は見上げていた。

死を受け入れ、ただその時を待っていた。

少年の耳には「助けてくれ」との言葉が幾千も響く。

でも、何もできない。その声に答えてやることすらできない。

無力なただの少年には仕方のない事であつた。

そのまま放っておけば、火事で傷ついた彼はほかの人だったモノたちと同じような末路を辿っていたことだろう。

——だが、

そんな少年を見つけ、助けようとしていた人物がいた。

青年は、少年に処置を施していた。



過程は良くわからないが、おそらく遠坂さんが使っていた魔術の光とよく似ていたので、とっさに魔術だと頭がその現象を変換した。

助けた少年を見降ろし、青年はこれ以上が存在しないくらいの笑みを少年に向ける。

少年は虚ろな瞳のまま、その笑顔を見上げていた。

「・・・夢・・・か」

眩きと共に私は目覚めた。

———今の夢、何だったんだろう

火事の現場に立ち会った事は何度かあるが、夢で観たような現場に立ち会った事はもちろんがない。

そして、魔法ではない事を理解するぐらいならともかく、何故、すぐに魔術だとわかったのだろうか。

並行世界が実際に存在するというのなら他のモノも考えられるだろうに。

そもそも夢とは自分の過去の体験や、望みなどを虚像として寝ている時に映し出すものだ。

そこに、まったく関係ないものが夢として流れ込む。

——ユーノ君の時と同じ………？

いや、ちょっとそれはまた違う気がする。

「………まあ、考えても仕方ないっか……」

隣で寝ているヴィヴィオとフェイトちゃんを見る。

まだ、朝の訓練の時間まである程度あった。

フェイトちゃんの腕の中で寝息を可愛く立てるヴィヴィオの頭を  
軽くなでた。

布団のみだれをなおすと、私は教官服へと着替えた。

少し早いが訓練場に向かうでしょう。

二人を起こさないようにしながら自室を出た。

訓練場につくと、そこには二人分の影があった。

一人はライトニング分隊の副隊長、シグナムさん。

そして、もうひとり………。

「士郎君………？」

赤銅色の髪を揺らし、衛宮士郎がシグナムと得物を交錯させていた。

手に持っていたのは先日の模擬戦で愛用していた二対の夫婦剣ではなく、槍であった。魔術の知識は全くと言ってないに等しいが、一体幾つのバリエーションがあるのかと疑いたくもなってくる。

「・・・なのはか、早いな」

シグナムさんが見物していた私に気付き、動きを止める。

「高町さんも朝早いんだな」

今まで構えていた槍が一瞬で粒子となって消え去り、士郎君は笑顔で「おはよう」と挨拶してきた。

「うん、おはよう。士郎君、シグナムさん。二人ともいつから・・・？」

まだ朝の訓練の30分前である。

二人が息を整える必要があるくらいには、打ち合っていた事になる。

「えっと、一時間前ぐらいからかな」

「ちょうど同じ時刻に衛宮が来たんでな、ならばと、共に訓練していたのさ」

「ふえー、すごいね」

感心の声をあげる。

「別にたいしたことじゃないよ。いつもはこの時間には朝食、食いつわっている頃だし」

士郎君は苦笑しながら頬を掻く。

「その時間って・・・士郎君学園では何か運動部にでも所属していたの・・・？」

朝練のある部活に所属している学生の朝は早い。

7..30には既に部活を始めているところがほとんどだ。

「いや、一年の時はたしかに弓道部に、入ってたけど今じゃ帰宅部だよ」

士郎は何の事もないように言う。

「何故、辞めたんだ？貴様の弓の腕、遠目に見ても素晴らしいものだったが」

シグナムさんは自身も剣と弓を扱う者として、士郎君とアーチャーさんに興味を抱いているようだった。

「ああ、バイトで俺、怪我したんだよ。体に傷が残っててさ、友人で同じ弓道部に所属している奴に、そんな傷を見せながら弓を持つのかってさ」

だから辞めたんだ、と。

「そんなこと気にしなくてもいいと思うけど・・・」

事故で負った傷なんて彼のせいじゃない。

そもそも土郎君の友人は何故そんな事を言ったのだろうか。

「戦を知る者、誰とて消えない傷を体にも心にも負うことがある。  
それを隠す必要はない」

「・・・えっ、いや学園内では俺も遠坂も普通の学生だし・・・いや、遠坂は普通じゃないけどさ、・・・それに確かにこんな傷見苦しいってのは確かなんだからな」

懐かしげに言う彼は何の迷いもない。

そこに何かしらの違和感を覚えた。

だが、原因の本がわからない。まるでとけそうで解けない問題が目の前に壁となって立ちふさがっているような気分である。

「そういえば、二人は学生の頃、何か部活はやっていたのか？」

難しい顔で悩む私を見て、話題変更に出たのだろう。

釈然とはしないが、今ここで悩み続けても答えは出そうになかったため、彼の厚意に私は甘えた。

「私は、中学までは一応義務教育だから受けてたんだけど、ずっと帰宅部。

幼馴染の友達は稽古事やってたし、私は小学生の頃は家の手伝いかあったり、小3の頃から時空管理局の嘱託やってたからね」

「うわ、小3からってすごいな・・・9歳の頃からじゃないか。シグナムさんは？」

「私は学生経験はない。・・・私は普通の人間とは少し違うからな」  
意味深な言葉に一瞬士郎君がどうしたものかと目を泳がせたが、  
すぐに取り繕うように。

「そっそうか。でもものんびりした生活を過ごした頃もあったんだろ  
う？」

士郎君は深くは尋ねずにそうきり出した。

「ああ、主はやてとの平和な日々は幸せだったよ」  
その言葉には一点の曇りもない。

「・・・今は？」

「幸せだよ。主はやてが笑って暮らせていること、それが私達ヴォ  
ルケンリッターの幸せさ」

凜々しい顔に少し笑みが漏れる。

「ああ、それで本当に幸せならそれは一番いい事だ。  
・・・だけど、シグナムさん自身だけの幸せはないのか？もちろん  
八神さんや皆の笑顔とか幸せも大事だろうけど」

「・・・ふむ、特にたいしたものはないな。強いて言えば強きもの

との正々堂々の一騎打ちは心躍る。  
私は騎士だからな」

「にはは・・・」

つい苦笑する。

「そっか」

士郎君も笑顔で頷く。その顔にはほっとしたような安堵感が滲んでいた。

## 歪みの欠片（後書き）

個人的にこのころの士郎君は凜からの共生で少しづつ個人の幸せと  
いうものを大事に思う心が芽生え始めています（え

ちなみになのはの夢がアーチャーの過去をたどるものか、士郎の過  
去をたどるものかは今はご想像にお任せします（どっちも同じだけ  
どね r y



## Noble Oblige

・・・たく、気付いてて気付かないふりをしているんだか、本当に気付いていないんだか。

明らかに前者なんだが、一応もしものために付け加える。

ま、その可能性こそゼロに等しいが。

マナの淀みが発生して以来、アーチャーへ分け与える魔力が格段に減った。

まるで、聖杯戦争の時のようだ。

——都合は良いけど、こんなのまたやばい事が起こる前兆以外の何物でもないじゃないっ!!

頭が痛くなる。

朝から隣の部屋で眠っていたはずの士郎は部屋を抜け出すし（よくあることなので実は大して気にしていない）、夜戻ってきてからのアーチャーは微妙にこちらを品定めするような目つきで見ろし。

違和感に気付いていても、アイツからの助言がなければこちらの憶測で事を運ばなければならない。

それはあまりにも心の贅肉がすぎる。

「で、いい加減話してくれる気にはなったの？アーチャー」

探り合いにしびれを切らした私は目の前にいるであろうサーヴァントを怒鳴りつけた。

「ふむ、やはり昨夜のあれで気付いてしまったか、凜」

実体化したアーチャーはやはり目の前にいた。

いつも通り余裕に満ちた顔で口を歪ませながらアーチャーは頷く。

今はそんな彼の癖もわけらわしい。

「そんなのはどうでもいいから、答えなさい？アーチャー。この世界に起こっている事について」

「やれやれ、凜。君は物の順序というものを相変わらず無視したいいっぷりだな・・・」

言葉に出しながらもやれやれとアーチャーは肩を下ろす。

「・・・・・・・・」

無言で催促すると、一度ため息をアーチャーは突き、顔を引き締めた。

「これは私も確認した完全なる事項ではないのだが、この世界・・・ミッドチルダだったか。とりあえず、大きな霊脈と化した。ここは空気こそ違うが冬木市と同程度の霊脈だよ」

口振りは軽々しいものだったが、実際は彼自信驚いているのだろ

う、付き合いが長くなかったらわからないぐらいの細部で彼は憎々しげに語った。

「・・・アーチャー。一つ、これは私の憶測なんだけど・・・一応聞いてくれる？」

「・・・ああ」

「この世界、あるいは近くの世界に大聖杯があり、既に聖杯戦争の準備が行われている・・・。あってる？」

違うかどうかではなく、確認のようにあっているかどうかを聞く。

するとアーチャーは一瞬だけ、目を見開いた。

「そうだな。先程も言った通り確認できた事項ではないからな。だが、私とセイバーも同意見だよ、マスター」

「・・・そう。だから私達が喚ばれたのかしら・・・」

「それこそ、一番の憶測だな、凜。まあ、どれにしろ確証はない。だがその可能性は十分にあり得る」

私達と聖杯戦争は深い関わりがある。

本来持ちえる筈のない、セイバーやアーチャーなどのゴーストライナーをサーヴァントとして使役しているのか。

それだって、根本は聖杯戦争という願望機を手に入れるための7人の魔術師の殺し合いの副産物なのだ。

というより、聖杯の中身というほうが事実だ。

彼ら英霊を糧にして聖杯は作り出される。

所詮、魔術師に出来ることはその器を作りだし、英霊を喚ぶことのみ。

6騎のサーヴァントを器に垂れ流し込みさえすれば、それはたしかに願望を叶える万能の杯となる。

だが、この聖杯がどうかは知らないが、自分達の世界の聖杯は歪んでいた。

第3次聖杯戦争からずっとだ。

かつて、第3次聖杯戦争で復讐者のサーヴァントを喚び出したものがいた。アンリマユこの世全ての悪という名に一番ふさわしいというだけで喚ばれたただの少年だ。その体には思いつけるだけの罪が刺青のように描かれており、全ての罪を一人の少年になすりつけるためだけに虐げられた、ただの少年。もちろん彼に英雄らしい能力なんてものはない。

ただ、人々を全ての罪から解放したという反英雄としてのみ存在する。

それだけだった彼はすぐに他のサーヴァントに敗れ、聖杯へと注ぎ込まれた。

だが、アヴェンジャーという名の規格外なサーヴァントは意識を

失わず、それどころか聖杯に取り込んでしまった故にそれさえも歪めてしまった。

以来、聖杯は願望機としての能力を持ったままとはいえ、その用途は破壊以外の何もできないものと変わった。

破壊で全ての望みを叶えるだけの歪んだ天の杯。（フンスフィール）

そんなものは士郎はもちろん、あれだけ聖杯を求めていたセイバ―でさえ必要としないものだ。

「仮定前提で問うが、凜。これが聖杯戦争であり、それが理由でここに喚び出されたとすれば、君はどうするんだ？」

遠坂凜 魔術師をためすかのように、アーチャーは口元を歪めながら問う。

アーチャーの質問に私はわざと自身も口を歪めながら魔術師としての顔で答える。

「そんなの、参加するに決まってるでしょ？ 私は遠坂家の当主遠坂凜よ？ アーチャー。」

ここが何処だろうと関係ない。私とアンタをマスターとサーヴァントと聖杯が認めるっていうんならそれに乗ってやろうじゃない」

そのような質問こそが心の贅肉だ、と。

すると赤い外套の騎士は柄にもない笑顔で頷いた。

「いやはや、さすが私のマスター。」

・・・正直、ここで参加しない。なんて選択が出ればどうしたもの

かと考えていたのだが、それこそ杞憂という奴か」

心底おかしそうにアーチャーは笑う。

「・・・ん、何がそんなにおかしいのよ？」

「だってそうだろう？ 歪んだ聖杯なんて君には必要ない。ならば、聖杯戦争など不必要なことではないのか？」

「そうね、確かに歪んでいるなら必要ないわ。そんなもの持っているだけ邪魔なもの。」

でも、ここの聖杯が歪んでいるかどうかまでは分からないのよ？ もし、歪んでないなら手に入れる事に越したことはないし、それにどつかの誰かさんは聖杯を放っておけるのかしら？」

笑顔で言ってやる。

アーチャーはグツと唸ると、溜息をついた。

「・・・凜、それはどちらの事を言っているんだ？」

「さあ、どっちでしょうね」

楽しげに笑う私を、軽くアーチャーが睨みつける。

だが、すぐに諦めてもう一度溜息をついた。

「あら、アーチャー。あんまり溜息ついていると幸せが逃げていくわよ？ アンタ運ないんだからせめて溜息の数くらい減らしなさいよ」

「何やらデジャブを感じるセリフだが、とりあえずそう言うなら私に溜息をつかせる原因を一つでも減らしてくれ、凜」

アーチャーは冷や汗を掻きながら言う。

「そういや、凜。もうそろそろ訓練の時間ではないか？セイバーは先に向かったようだぞ」

「――あ、しまった。忘れてた・・・」

アーチャーをからかうのに夢中で気付けば訓練開始5分前。

「やれやれ、君はもう少しうっかりを失くした方がいいな」

先程のお返しとばかりにアーチャーが言う。

「うるさい、ほっときなさいよそんな事っ！急いで行くわよアーチャー」

「・・・心得た、マスター。何、君の足なら間に合うさ」

言いながらアーチャーは霊体化する。

私は少々駆足で訓練場へと向かった。

## **N o b l e s s e   O b l i g e (後書き)**

個人的に凜とアーチャーの会話は大好きです（あ



## 真直ぐな槍

「それじゃあ、今日の訓練を始めるよ」

「「「はい!!」」」」

「それじゃ、エリオ俺たちも行こうか」

「はいっ!お願いします、士郎!!」

士郎君はエリオの手を握り、訓練場の一角まで歩いていく。

「衛宮君、エリオと訓練するんだ?」

遠坂さんは初知りとはばかりに意外そうな顔をしながらそんな二人を見つめた。

「あれ、遠坂さん聞いてなかったの? 士郎君しばらくエリオを鍛えてくれるんだって」

「私が士郎に頼んだの。・・・私たちじゃ教える事が出来ない部分もあるからね」

「へえ」

「しかし、シロウで大丈夫でしょうか? 彼はまだまだ魔術師としても戦士としても未熟者です」

セイバーさんが自分の主に対し手加減なく、評価を述べる。

「ふむ、セイバー。たしかにアレは未熟者だが、連中が望んでいるのはそういう技術スキルの問題などではない」

腕を組みながら士郎君とエリオを目で追うアーチャーさんは一旦セイバーに向きなあった。

「・・・？」

「君にも経験があるだろう？衛宮士郎を鍛えている時に」

「男性と女性の体の違い、ですか」

「ああ、女性と違い男の体は筋肉の使い方が違う。故に女性である君よりも私の戦い方を見た方があの小僧は急激な成長を遂げる。・・・

・ま、俺とアレではまた違う理由もあるがな」

最後の言葉に何となくだが引っかかる。

なんとなくだけど、彼らの秘密がそこに隠されている気がして、心は彼にその理由とやらを聞きたがっている。だけど、それを聞くのは今じゃないと私の良心が告げていた。

「・・・っ」

途中まで出しかけた声が中途半端に途切れた。

「どうしたの？なのは」

フェイトちゃんが顔を見上げるようにしてこちらを見る。

慌てて首を横に振った。

「ううん、なんでもないよ。フェイトちゃん」

「そういえば、なのは。私達はどうすればいいの？」

「遠坂さんは私とティアナと一緒に訓練だよ。セイバーさんとアーチャーさんは・・・」

「すまんが高町なのは私は今日の訓練は抜けさせてもらう」

アーチャーさんが私が言い終える前にいきなりそんな事を言い出した。

「え、どうして？」

「少し調べたい事がある。まだ私達はこの世界の事をよく知らないからな」

「そっか、了解」

「アーチャー、それならば私も共に」

「いや、セイバーは残っていてくれ、万が一凜や機動六課の者達が襲われた時のために、二人ともいなくなるのはまずいだろう」

物騒な事をケロリとした表情でアーチャーさんは言う。

「・・・分かりました、お気をつけて」

「では、行ってくるぞマスター」

最後にアーチャーさんは自身のマスターを見る。

「ええ、頼んだわよ。アーチャー」

その言葉と共にアーチャーは姿を消す。霊体化したということだろうか。

「では、なのは。私はどうすればよろしいでしょうか」

「あ、セイバーさんはスバルをお願いします」

「分かりました」

「で、キャロは私とだよ」

「はい！」

フェイトちゃんの言葉にキャロがうれしそうに声を上げた。

「それじゃあ、エリオ。デバイスを」

「はいっ！」

昨日見た青と白銀の重槍が現れる。姿は訓練用のジャージのまんまだ。

「トレース投影・開始オン」

「うわぁ……。凄い槍ですね、士郎」

「あ、ああ……。ま、訓練用に能力は20分の1ぐらいに抑えてあるけどな」

「さて、まずはランサーとして戦う時に一番大事なのはなんだとエリオは思う？」

「機動力……。かな」

顎に手を当てながらエリオは答える。

「うん、正解。例えばセイバー剣使いとアーチャー弓兵は火力を重視した職業だ。こういう職業の相手にするとき、まず火力ではランサー槍兵は敵わない。

だけど、その代わりにエリオが言った通りランサーは況や機動力に優れた職業だ。

なら、まずはエリオの素早さに合わせて一番ベストなストライダーの構えを身につけないといけない」

俺はグングニルの矛先をエリオへと向けた。

「俺は先生って柄じゃないし、効率的な方法なんて知らない。  
——だから」

身を持って教える。

俺も認めたくはないが、アイツの背中を見て育ったから。

「構えろ、エリオ。」

今から互いに打ち合ってそこから自身を生み出すんだ」

「自身を、生み出す・・・？」

「そうだ。エリオはエリオ自身の手で自身の中にいるエリオを探さなきゃいけない。

・・・さて、ルールは簡単だ。魔法を使わずに純粹な力で俺を打倒せ」

「――――」

無言でエリオはストラダーを構える。

俺はそんなエリオに手加減なく、突きを繰り出した。

出来る限り、あの時に見たランサーのサーヴァントである彼の戦い方を真似るように。

「――――クッ！」

何合と打ち合う度、エリオから苦悶が漏れる。

次第に疲れが溜まってきたらしいエリオは防御が危うくなってきていた。

「エリオ、そんな半端な動きじゃどんなに素早くても俺さえも倒せないぞ！！」

まるでフェイクがない純粹な突きに俺は眉間に皺を寄せた。

威力はランサーの一撃にしてはある。攻撃の素早さなら俺とは比ではない。

だけど、あまりにも真っ直ぐすぎる。

これではまるで機械を相手にしているような気分だ。

何処に攻撃を繰り出してくるかがまるわかりで、一々考える必要がない。

防御は一切せずに一撃一撃をすれすれのところで避け、反撃を繰り出す。

その攻撃パターンは彼自身の純真さを表しているようだったが、戦場ではこんな甘い攻撃では意味がない。

これでは彼の機動力を無駄にしているようなものだ。

「――うわぁっ!？」

試しに今までとは違う攻撃パターンに変えてみると、エリオは途端に防御が間に合わなくなり、弾き飛んだ。

やはり、今まで魔法に頼りすぎていた分、ただの打ち合いになれば、こういうところで綻びが生じてしまうようだ。

すぐにエリオは立ち上がるものの、このまま打ち合っても埒が明かないようだった。

「――エリオ、ストップ！」

「は、はいっ！」

「もう訓練時間は終わりだ。

今日の打ち合いでだいたい分かったから明日から改善するための訓練をしようか」

既になのは達は訓練を終えている。

ならば、あんまり待たせるのもまずいだろう。

「はい！」

二人でなのは達が待つところまで歩いて戻る。

・・・それはいいのだが。

「・・・ん？スバルさんどうしたんだ？」

なんというか、息切れがすごかった。

もう訓練を終えて、スバルさんはしばらくたつだろうに、未だ肩で息をしている。

「・・・あ、えー・・・と、その・・・訓練、が・・・」

「・・・スバルさんと訓練したのは誰だ・・・？」



「私ですが、シロウ」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

急に手が冷や汗で湿る。

・・・恐ろしい、あれほどまでの元氣澆刺娘をどうやればここま  
で消耗させる事が出来るのか。

我がパートナーながら、さすがという言葉に尽きる現状であった。

## 真直ぐな槍（後書き）

さて、皿回しで忙しくて更新ができなかったなんて言えな（ry↑  
いっとるがなw

ちなみにメールやコメントで聖杯戦争再来・・・といって下さった  
方々がいますので一応情報として。

セイバー（アルトリア）とアーチャー（エミヤ）以外のサーヴァン  
トとして7騎登場します。

彼らは今回の聖杯で喚び出されたサーヴァントではないので。

ちなみに既に7騎とそのマスターたちは全員既に設定済みです。今  
出ているのはイリヤ&タイガですがw

## 弓兵と従者

「ふむ、やはり準備段階といったところか・・・」

——どうやらまだ7騎全てのサーヴァントの現界までは至っていないようだな

ビルの屋上にアーチャーは立ち、ミッドチルダの街なみを眺めていた。

といっても霊体化している彼の姿を視認できる者はおらず、誰が上を見上げようとそこには何も存在しないこととなる。

「ふーん、こんなに早くお兄ちゃんを見つかけられるとは思わなかったな」私

ただ、どんなときにも例外という者は付き纏っている。

「・・・!？」

聞き覚えのある声にアーチャーはまさかと思いながら声がした方向へと実体化しながら顔を向けた。

「・・・イリヤスフィール。何故貴様がここに」

出来る限り顔に出さずに淡々と質問する。

すると彼女は笑顔で答えた。

「何って聖杯戦争よ、聖杯戦争。まったく、お兄ちゃんたらそんな事も分らないの？」

「まったくよ、アーチャーさん、私が現界している時点で気付いた方がいいわよ」

「いうか、イリヤちゃん。アーチャーさんがお兄ちゃんってどういう事なんだもし」

「・・・！！藤ねえ、いたのか・・・」

咄嗟に昔の呼び方で呼んでしまった事にアーチャーは内心焦るが今はそんな事瑣末な問題だ。

「いたのかってアーチャーさん、私の存在スルーしてたっていうの！？

・・・ん？　そういえば士郎みたいな呼び方、アーチャーさんしてたっけ？」

一気に言葉の弾幕とばかりに、タイガは言い放つ。

「タイガ、知らないの？　そこにいるアーチャーはシロウの未来の姿なんだから」

呆れながらイリヤが説明を補足する。

「えっ！？　そうなの！？　へえ！　こんな風に成長するのね」

まあ、士郎が二人いると面倒だから今までどおりアーチャーさんと呼ぶけど」

柔道着姿のタイガが腰に手を当てながらアーチャーをまじまじと

見る。

「……イリヤ、何故君がその事を知っている？

それ以前に君は英雄王の手で殺されたはずでは……」

頭を抱えながらアーチャーはイリヤスフィールを見る。

間違いなく、彼女は本物のイリヤスフィールだった。まあ、体操服姿な理由がわからんが。

「へえ、そっちの世界の私はそういう死に方したのね。

私は並行世界から来たイリヤだもの、シロウが知っている私とは同じだけど、ちょっと違うのよね」

事も無げにイリヤスフィールは言う。

「並行世界だと……？」

「そうよ、サーヴァントであるアーチャーなら理解できるでしょ？」

「……ああ」

つまり彼女は単独で、それかタイガと共にこの世界に飛ばされたという事になる。

「それにしても、ここの聖杯戦争でもシロウが喚ばれるなんて、珍しい事もあるものね」

「……いや、私は規格外でな、召喚される以前に、私も凜達と共に並行世界から飛ばされてきたのだ」

どうせ隠しても無駄だろうと判断したアーチャーは手の内をオープンにする。

彼女等も自身の情報を提示したのだ、これぐらいは当然だろう。

「・・・え、アーチャーは今回の聖杯戦争で喚び出されたんじゃないんだ・・・ってことはアーチャーを数えずにまだ6騎存在するわけか・・・」

興味深そうにイリヤスフィールは呟く。

その顔は見た目の年とは反比例している。さすがはホームンクルスといったところか。

「なあに、何騎だろうが、私達には関係ないわよ！この虎竹刀でぽっこぼこのけちよんけちよんよ！！」

陽気な態度で竹刀を振るう、道場着姿の藤村大河にアーチャーは疑問を抱く。

「・・・私達？」

そう言えば、魔力資質もない藤ねえがなぜここにいるのだろうか。

「・・・あ、アーチャー気付いてなかったんだ。一応タイガが私のサーヴァントよ。

・・・ね、師しょー」

「おうよ！弟子一号！！」

「・・・・・・・・・・は？」

——聞き違いだろうか？今藤ねえがサーヴァントと言わなかったか、イリヤ。

というか、イリヤは大河を師匠などと呼んでいただろうか？

またもや頭痛にアーチャーは襲われる。

「だから、私のサーヴァントなのよ、師しょーは」

「・・・・・・・・正気か？イリヤ、タイガ」

「ええ」

「もちのろんろんっ！」

・・・・・・・・あ！今馬鹿にしたわね！！」

いや、そりゃあ馬鹿にでもしたくなるだろう。

如何に剣道5段とはいえ彼女は紛れもなく一般人だ。

その彼女がサーヴァントだなんて信じられるわけがない。

「信じられないっていうんなら、まだ聖杯戦争が始まっていないとはいえここでアーチャーさんもノックアウトよ！！」

「・・・・・・・・それは勘弁してくれたまえ」

勢いよく虎竹刀をふるう大河にアーチャーは溜息をついた。

「そういえば、アーチャー。リン達と飛ばされてきたって言ったよね？」

「ああ、確かに私はそう言ったが」

そこに何か問題があるというのだろうか。

「て、ことはシロウもいるの？」

「ああ、誠に残念なことながら奴も一緒に飛ばされてきている」

いや、殺す機会があるという事はある意味、幸と取るべきなのだろうが、何分傍にいただけで反吐が出る。

いつまで我慢できるかなど考えているだけでも理性を失いそうだというのに。

「そっか、よかった。お兄ちゃん達がいらないんじゃないもの」

「うむ、あの性根の腐った弟を叩き直す事こそ、我が役割というものだよ！！」

「いや、タイガの目的は別でしょ・・・ていうか、シロウは私の弟だから」

さりげなく言うタイガにイリヤスフィールが突っ込む。

既に漫才状態だ。



「そういや、タイガは何のサーヴァントなんだ？バーサーカーというには理性を失ってはいないようだが・・・」

「え、私？・・・セイバー・・・じゃないかしら？」

「いや、違うから」

言った途端イリヤスフィールに否定される。

「はあ・・・いいわ、特別にお兄ちゃんになら教えてあげる。

タイガはね、サーヴァントっていうクラスサーヴァントのサーヴァントなの」

「従者だと・・・？そんなのありなのか？」

「ありだから、現界しているのよ」

さらりと言ってみせる。

どうやら嘘ではないらしい。

「むむ、私がせっかく偽ってあげたのに、なんで本当の事言うかなあゝ・・・っていうか、やっぱりセイバーじゃ駄目？」

「・・・（無理があるでしょへだろ）」

「なっなんでそこで二人揃って沈黙するのよ！！」

イリヤスフィールとアーチャーが呆れながらタイガを見る。

当の本人であるタイガはなぜだめなのかと自問中である。

まあ、彼女は放っておこうとイリヤスフィールとアーチャーは互いに向き合った。

「・・・で、単刀直入に聞くけどアーチャーは今回の聖杯戦争に参加するの？」

「・・・ああ。凜がそのつもりだからな」

「・・・そっか。じゃあもうそろそろお別れした方がいいかな。聖杯戦争はまだ始まっていないとはいえ、夜になったらどうなるかわからないもの」

少し名残惜しそうに、だけど迷わずに銀髪のを靡かせて少女は言う。

夕暮れの空を見上げながら、イリヤスフィールは鼻歌を歌う。

それだけを見れば、やはり彼女はただの少女だった。

「ああ、・・・イリヤがそれを望むのであれば、失礼しよう」

「うん、また近いうちに会おうね、お兄ちゃん」

「あ、アーチャーさんもういつちゃうの？じゃあ士郎によろしくね」

最後に自問から解き放たれたタイガがアーチャーの背中に向けて手を振る。

「了解した、伝えておこう。」

せいぜいやられないように気をつけたまえ。イリヤ、藤ねえ」

足を踏み出し、ビルから飛び降りた。

目指すはマスターの待つ機動六課まで。

イリヤスフィールとタイガはそれを見送る。

「今度会う時はアーチャーさんも士郎も敵・・・か」

「そうね、でも二人がその気なら共闘してもいいかもね」

「おんやゝ珍しい意見でござるな」

不思議そうに自身の弟子をタイガは覗き込む。

「そう？私はおかしい事を言ったつもりはないけど。

だって、二人は今回の聖杯戦争で倒したって意味ないもの」

「あ、そっかゝ！6騎倒せばいい話だもんね。

アーチャーさん達は関係ないかゝ」

手をポンと打ちながらタイガは納得する。

「ま、でも二人が止めるならその時は迷わずに戦うから、そこは覚悟しててね師しょー」

「うむ、もとより倒すつもりでいたのだから今さらでござるよー！」

「うん、師しょーの活躍に期待してるッスからねゝ！」

ビルの上一人と一騎が言い合う。

聖杯戦争の開幕が間近に迫っていた。

## 弓兵と従者（後書き）

自分で書いておいてなんだが、よくイリヤのブルマ姿とタイガの道場義姿に突っ込まなかったな・・・アーチャー。

そして、一々イリヤスフィールと書くことが面倒に思ってきているなんて言えな（ry

## 濡れ衣

既に機動六課も夕食時、たくさんの隊員たちで溢れる食堂の一角には凜達やフォワード達が夕食をとっていた。

私は実体化し、凜の元へと歩み、軽い挨拶をして椅子に腰かけた。

・・・それはいいのだが。

「はあっ!？」

先程までの事について隠し事なく報告を終えると、凜は数瞬の間も置かずに悲鳴にも似た声の高さで叫び声を上げたのだ。

「ど、どうしたんですか!？」

隣の席で大盛りパスタを食べていたスバルがいきなりの凜の叫び声にびっくりして、フォークを地に落とす。

「・・・なんでもない!」

他人の前では見せない戸惑いと怒りの混じった表情でテーブルをドンと叩く凜は、此方を睨めつけてきた。

おまけにというか、なんというかスバルたちフォワード4名と小僧の視線までもこちらに突き刺さる。

「・・・アーチャー、遠坂に何をしたんだ?」

普段よりも低い声で脅すかのように衛宮士郎は言う。

「勘違いするな。私は凜に報告しただけだ。  
お前が思うような、彼女に対してのどうとやらは一切口にしておらん」

「・・・報告？なんだよ、それ」

「・・・さてな、お前には関係ない」

迷わずに口にする。

凜が小僧に話すのは構わないが、俺自身から此奴に教えてやるのは御免だ。

「凜、何か思うところがあったのですか？」

食事の手を休めないながらも、セイバーは凜の顔色をうかがう。

「・・・うーん、でもなんであの二人が・・・いや、でももしかして・・・」

気づけば私から視線を外し、隣で壊れたロボットのように、無意識に凜は呟きを繰り返している。

当然セイバーの声もその耳には入っていないようだ。というより、聞こえていても、脳がそれをスルーしているようである。

「・・・凜。このままでは私が濡れ衣を着せられてしまうわけだが・・・」

「・・・つまり、今回のあれは本物って確証にはなるわね・・・ここはもう少し探りを入れて・・・」

「・・・・・・・・」

凜は私の言葉をも届かず、自身の頭の中で考えを巡らせている。

それは別に構わない。

——だが、凜。内容がダダ漏れだぞ・・・。

我がマスターながら少々頭が痛くなる。

「・・・すまん、アーチャー。確かにこれはお前のせいじゃなかったかもしれない」

おまけに小僧が素直に謝るもんだから後味が悪いことこの上ない。

3人で凜を見ながら溜息をつく。

と、そんな私たちの視線にやっと気付いたのか凜は顔を上げ、「いったいどうしたの？」とでも言わんがばかりにケロッとしている。

「・・・凜、言葉が漏れている。せめて言葉に出さず頭だけで整理したまえ」

「えっ！？やばっ・・・！」

本当に気付いていなかったらしく、凜は慌てて口を噤む。



「あはは・・・え」と、私たちには何も聞こえていませんでしたから」

スバルが苦笑しながら大丈夫ですと体でアピールする。

本当にこいつは感情表現が豊かだ。

「・・・それで、凜。状況は？」

すでに夕食を食べ終えたセイバーは戦へ赴くようなキリッとした空気を全身に蔓延らせている

「タンマ、セイバー。ここで説明するにはちよつと材料が足りない。後で士郎と一緒に私の部屋に来てくれる？」

どうやら凜は士郎にも話す気らしい。結局は巻き込まれるのだから遅かれ早かれということなのだろうが、実に遠坂凜らしい甘さが余韻として残っている。

「わかった。俺とセイバーで遠坂の部屋を訪ねればいいんだな？」

「・・・ええ」

凜はさっきまでの目つきから一変、魔術師としての顔となる。

そのまま立ち上がり、小僧の耳元まで顔を近づけると、何かを呟いた。

一瞬で小僧の顔は強張り、啞然とする。

「・・・遠、坂――」

信じられないものを見るように、士郎は凜を見上げる。

「じゃ、私は先に失礼するわ。・・・アーチャー」

「わかっている」

私は霊体化すると凜の後ろに付き添い、部屋までついていった。

呆然とそれを見守る小僧と報告が気になるセイバーを残して。

## 濡れ衣（後書き）

最近サークルの子が書いているF a t eのコミックで濡れ衣着せられ放題のアーチャーさんが印象に強く残りすぎてしまった、どうもデュオです。

## 身近な影

「遠坂、入るぞ」

軽くノックして入ると、遠坂はベッドの上で腕を組みながら座っており、壁にはアーチャーが凭れ掛かっている。

「あ、やっと来たのね、二人とも」

「『やっと来たのね』、じゃないぞ遠坂。いきなり耳元で『大人しくセイバーと一緒に部屋、来ないと死ぬわよ』なんて不吉なこと言いやがって!」

あんなこと言われたら逆に行きたくなるじゃないかっ!という言葉が喉元まで行きかかるが凜の視線に言葉を飲み込んだ。

そこにはまた、魔術師の顔をした遠坂がいたのだ

「・・・凜、そろそろ本題に移るとしよう」

アーチャーが普段より真剣な声で促す。

「そうね、じゃあまず士郎だけが気付いてないことから説明するけど・・・いいかしら、セイバー」

「はい、順を追ってお願いします」

なんだ、3人で俺に隠し事していたってことか・・・これは。

「遠坂、勿体つけずにさっさいえよ。ある程度のことは覚悟しているつもりだぞ、俺」

「そ、じゃあ単刀直入に言うけど、聖杯戦争が始まるわよ」

「………は？」

「『は？』じゃないわよ」

澄ました顔で言う遠坂に何が何だか分からなくなる。

「聖杯戦争ってどういうことだよ！」

気付けば遠坂に向かって怒鳴っていた。

「しーっ！ 静かになさい。現在ミッドチルダは大きな霊脈と化しているのよ。

マナにさえ魔術行使に適したものが混じっているわ。そして決定的な証拠も一つある」

霊脈……？ 冬木市と同じとでもいうのか。いや、それ以前に。

「この世界には魔術師は俺たちしかいないじゃないか。それで聖杯戦争なんて起こるはずが……！」

「ふ、そんな考えだからお前は甘いというのだ。衛宮士郎」

「アーチャーは黙ってて。」

確かに魔術師はこの世界には存在しない、断定はできないけどね。でもその代り魔導師っていう私たちから考えれば規格外な連中が身

近に存在するじゃない」

手で制されたアーチャーは、忌々しそうにこちらを一瞥すると、そっぽを向いた。

「彼女たちのはあくまでも魔法なんだろう？メイガス魔術師とウィッチ魔導師は別ものじゃないか」

「そうね、だけど私たちの世界でも魔法使いは聖杯戦争に参加できない、なんてことはないでしょ？それと同じよ」

それは、たしかに。

「ただ、問題なのはこの世界の人間はサーヴァントとの契約方法なんて知るはずがないのよね・・・だとすると喚び出すマスターがいるかどうか・・・」

「彼女のように他の世界から喚び出されたりでもしなければ確かに難しいか・・・、いやだがしかし小僧のような例もあるからな」

「彼女・・・？」

アーチャーの口から出た言葉に思わず耳を寄せる。

「その話は後でするわ。」

でもそっか・・・たしかにそのためにマスターさえも喚び出すっていうのも一つの可能性か・・・。

士郎がセイバーを呼び出したのは土蔵にあった召喚陣と負傷によるエクスカリバー士郎の血液、そして約束された勝利の剣の鞘である全て遠き理想郷が体内に所持していたことが原因だって、言ってたわよねアーチャ

」

「……!？」

俺の体内にセイバーの鞘、が……？

「その通りだ、衛宮士郎が魔術師として半人前の割には回復能力が桁外れなのもそのためだよ」

「——っ、たしかに全て遠き理想郷には自然治癒能力があります。ですが、なぜそれが士郎の体内に？」

「簡単なことだ、衛宮切嗣が君を呼び出せたのは彼が聖剣の鞘を持っていたからに他ならない。

そして衛宮切嗣は死にかけていた少年を救うために鞘を少年の体内へと移植した。既に形は保ってなどおらんだろうがね」

では、本当にこの体の中にはセイバーの聖剣の鞘がある、ということなのだろうか。

「すまん、セイバー。それが本当なら知らないうちにセイバーの大切なものを勝手に使ってた」

「……いえ、逆に安心しました。それがなければ士郎は死んでいただでしょうから」

むしろ微笑みながらセイバーは答える。

「む、反論できない……」

「つまり、同じようなタイミングさえ作り出せば召喚は可能ってことよね、アーチャー？」

遠坂がげんなりとした俺を無視して、アーチャーに確かめるように聞く。

するとアーチャーは無言のまま頷き返した。

「そ、まあ……それも難しいだろうけど意図して行われるとしたら話は別だし……」

「ま、それを君があれこれ考えたところで事態は前進しないだろう。それよりも話を進めたらどうかね？」

「もったもな意見ね。じゃあ、この話は置いておくとして、さっきアーチャーが言った彼女についてなんだけど。」

「……士郎、貴方、バーサーカーのマスターのことは覚えている？」

「ん？ああ、覚えてるぞ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだよな？」

「そう、アインツベルンが用意した魔術師。……いいえ、聖杯の器たる人造人間ホームンクルス」

遠坂の言い方は少し癪に障るが、それよりも。

「遠坂。なんでここでイリヤスフィールの話が出るんだ？」

「……彼女ね、アーチャーの話だと私たちと同じように平行世界から喚ばれてきているらしいのよ」



「なっ！？イリヤスフィールが！？」

意外な展開に頭がついていけずに軽くオーバーヒートする。

「おまけに、そのサーヴァントは藤村先生よ」

「……は？」

さすがにそれは……。

「そんな嘘にはさすがに俺でも騙されないぞ、遠坂」

「凜、士郎の言うとおりそれは悪ふざけが過ぎます。彼女の剣道の腕は中々のものですが、それでも一般人の域を超えたものなんかでは決してない」

「私もセイバーに同意見なのだがね。」

実際に見てしまったら私も否定する方法を持ち合わせていなくてね」

さらりとアーチャーは言ってみせるが、よく見るとその額には冷や汗が滲んでいる。

どうやら事実らしい。

「……なんでさ」

何故、藤ねえまでがサーヴァントになってるんだよ……。

つくづく自分の周りは平和を装っていただけなのだと理解させら

れる。

・・・まあ、今回は例外というか反則じみている気がしてならないが。

「俄か信じ難いですが・・・それで、タイガは何のサーヴァントなのですか？まさかとは思いますが・・・セイバーなのでしょうか？」

実際それぐらいしかないと云ったらないのだが、どうもそうだとしたらかなり、セイバーにとっては不服そうだ。

「いや、彼女は存在自体が特殊なサーヴァントのようですねサーヴァント従者のサーヴァントだそうだ」

「そ、それはまた・・・」

俺もそうだが、セイバーさえも呆氣にとられる。

おまけに遠坂までもが額を手で押さえていた。

「でもつまりは、これで後6騎というわけですね」

「ええ、引き続き、アーチャーには情報搜索にあたってもらおうわ」

「了解した、マスター」

「じゃあ、これで解散。適宜いつでも戦えるように万全の準備を怠らないこと」

「ああ、まだ頭の整理しきれてないけど了解した」

それじゃ、と先に出て行ったセイバーを追うように、扉に手をかけようとする、遠坂が呼び止めてきた。

まだ何かあるのだろうか。

「明日から今回のドタバタでうやむやになってたけど、今まで通りに魔術の鍛錬を再開するわよ」

意志の確認というより、宣言のように遠坂は言う。どっちにしろ選択肢は「Yes」か「はい」のその二択なんだろうが。

「・・・わかった。場所は・・・遠坂の部屋でか？」

「ええ、時間はこの時間帯ね。夕食が済んだ後にしましょ」

「了解。じゃあ今日はおやすみ、遠坂」

「おやすみ、士郎」

凜々しさのある笑みで遠坂が見送る中、俺は自室へ向かうまでの廊下を今日得た情報をできる限り整理しながら歩く。

距離としては短いのだが、今はとても長く感じる。

それは世界が一気に変わったようにさえ思える。

何にしても戦争がおこるっていうなら止めるまでだ。

だって、それが衛宮士郎の理想だから。

## 身近な影（後書き）

えー何故こうも更新が遅れたかというと・・・ぶっちゃけ、一度書いた内容がパソコンの急なシャットダウンにより一度パーになってしまい、もう一度打つという行為がかなり、面倒に思ってしまったし、ばらくいじけていただけなんです、はい

## 脱獄

機動六課にお世話になるようになって早二週間。ここでの暮らしも慣れてきた士郎たちは今日も朝から訓練に精を出していた。

「エリオっ！踏み込みが甘いぞ」

干将莫邪でエリオの一閃を相殺しながら士郎は声を上げる。

「はっ、はい！士郎！！」

対するエリオは気を取り直してすかさず反撃を繰り広げる。

「甘い！」

「う、うわぁ・・・！？」

セイバーのカウンターにスバルは真後ろへと吹き飛ばされる。

最初の頃と比べれば大分ましな動きになってきてはいるのだが、まだまだ無駄が多い。

まあ、セイバーとまともに打ち合えるなんてことの方が普通では

ないだろうが。

吹き飛ばされる度に立ち上がり、突撃を繰り返していた。

「もう・・・この人たち魔力の桁がどっかずれてるんじゃないかしら・・・！」

凜はなのはのアクセルシューターをガンドで無駄なく、撃ち落としていく。

どうやら訓練程度では金のかかる魔術は一切使用する気が全くないらしい。

「ほらティアナ、遠坂さんの動きを研究するのも構わないけど、よそ見していると隙が生まれちゃうよ！」

なのはのアクセルシューターが雨あられとティアナを襲い、その度にティアナはかすり傷を負っていく。

凜の戦い方は他人を気にしない自己を守るためだけに敷かれた格闘家故の回避術だが、ティアナの場合は周りの地形や味方の位置を把握したうえで身の守り方を優先とされるため、できる限り動かないのが得策だが、それでも限度がある。

幾度ものなのはの攻撃に、未だ完全についてこれていないティアナは歯噛みしながらも必死にバレルを魔力弾に向けた。

「うん、皆。大分良くなってきたみたいやね」

珍しく訓練場に顔を見せたはやてはみんなの訓練風景を見て、そう感想を漏らした。

「はいです。凜さんたちが来て以来、フォワードの子たちはもちろんながらなのはちゃん達も生き生きしてるですよ」

はやての肩に座りながらリインフォース？が答える。

4人が民間協力者扱いとなり機動六課に滞在するようになってからというものの皆自分たちと違う戦法を繰り広げる彼らに興味津々であつた。

「すごいですよね、あの方々。いったいどういう理屈なんでしょうか？」

「そやね。でも遠坂さん曰くうちらの方がよっぽど使い勝手が良くて便利やそうやけど」

「そうなんですか？」

「まあ、あれやよ。隣の芝生は青いっていうやつやね」

なるほど、とリインフォース？は頷く。

そろそろ隊長室に戻るか、と踵を返した時、訓練場に急に警報が鳴り響いた。

「なっ、なんや!？」

『八神部隊長!!』

副官であるグリフィス・ロウランがモニターに現れる。

いつも冷静な彼が今日は少し取り乱しているようだった。

「はやてちゃん!リイン!」

なのはやフェイト、フォワードメンバーや士郎たちが駆け寄ってくる。

「ちょうどええ、グリフィス君何があったんや?」

『はい、それが・・・この映像を見てください』

大きめのモニターが現れ、映像を映し出す。

そこに移っていたものは軌道拘置所だった。・・・それだけならいい。だが、拘置所からはけむりがもくもくと空へと向かって上がっており、すでに廃墟に近いことになっていた。

「こ、これは・・・!」

「これって・・・第9無人世界『グリューエン』軌道拘置所・・・!」

明らかになのはとフェイトの顔が青ざめていく。



「ええ！？その拘置所ってまさか・・・」

「スカリエッティを収容されている拘置所・・・ですよ」

エリオの言葉をティアナが継ぐ。

「なんてことなんや・・・それでスカリエッティは！」

はやては冷静に、だが、普段よりも数段大きな声を発する。

『・・・脱獄しました。どうやら手引きした人物がいるようです』

「なんやて・・・！？」

まずい、あの男がまた自由になれば最悪の事態が起きる可能性が高い。

「それで、グリフィス君。その人については何か情報は？」

一番冷静さを保ったまま、なのはがグリフィスに問う。

『いえ・・・映像には残っていますが、情報は全然つかめていません』

うつむきながらグリフィスは答え、新しい映像を映す。

そこにはスカリエッティとともに金髪の青年が写っていた。

「「「・・・！？」」」

それに反応したのはまさかの民間協力者4名だった。

## 脱獄（後書き）

そういえばもうそろそろアクセスPVが50万近くとなりました。  
50万Hitしたら何か祝いに外伝書こうかなあと思っています

## 英雄王再び

「・・・？ 士郎君、遠坂さんどうしたの？」

硬直状態の2人と2騎はモニターを瞬き一つせずに見つめていた。

まるで信じられないものを見るかのように。

皆が声をかけても4人は返事どころか視線さえもずらそうとしない。

映像が終わることによってやっと民間協力者たちは息をするかのように溜息を一つついた。

「馬、鹿な——何故、アーチャーが・・・」

たちまち苦渋の表情となったセイバーが小さな声で、だがはつきりとそう呟いた。

「え、アーチャーさん？」

アーチャーの方を見ながらなのはが反芻する。

すると当の本人のアーチャーは首を横に振った。

「セイバーがアーチャーと呼んだのは私のことではない」

「え・・・？」

アーチャーの言葉に機動六課の面々はそろって聞き耳を立てる。

「凜、私が説明すると皆の頭がこんがりそうだ。君が説明してくれ」

「ええ、そうね。これはしばらく黙っているつもりだったけど、説明するしかないようだし」

軽く深呼吸しながら一度ゆっくりと瞬きする。

その一瞬で覚悟を決めたらしく、凜は魔術師モードで口を開いた。

「まず、サーヴァントについては簡単に説明したとおり、過去の英霊を使い魔のように使役したものよ。だけど、これには一つ説明を省いた部分があるの。」

私たち魔術師がいかに優秀だろうと個人の能力では英雄クラスのものも召喚して使い魔にする、なんて不可能と言って過言ではない。でもどんなものにも例外があるわ。現に私はもちろん、魔術師として未熟な士郎までもがサーヴァントを使役している。何故だと思う？」

「外部からの補助・・・とか？」

はやてが顎に手を当てながら答える。

それに凜は頷いた。

「そう。私たち魔術師ができるのは召喚することだけ、実体化させるのは別のものが役割を担ってるわ。」

魂をカタチにするなんて芸当そもそも私たちには不可能なのよ。だ

からそこは強力なアーティファクトによっておんぶしてもらうってわけ」

魂をカタチにするなんてものは魔法使いでない限り不可能なのだ。

そう、魔力の塊であるアレでも存在しない限り。

「その、役割を担っていたモノ・・・とは？」

「聖杯。“望みを叶える聖なる杯”である魔法の域に達したその存在により私たちは毎回ある時期にだけ7騎のサーヴァントを召喚することができます」

「聖杯って・・・あの伝説上の？」

「ええ、その通りです。そして私たちサーヴァントはその聖杯を得るために魔術師による召喚を受け入れる」

セイバーが凜の代わりに答える。

実際はアーチャー曰くサーヴァントに参加の有無の権限はないそうだが、大抵の英雄が望みがあるため結果的に参加するそうだ。

といってもこれは今は些細なことであるためアーチャーも追及はしたりしない。

「もちろん聖杯を手に入れられるのは1組のマスターとサーヴァントのみ。故に私たちは勝者となるために魔術師同士殺し合いを始める・・・それを私たちは聖杯戦争と呼ぶの」

殺し合いという響きに六課の面子が息をのむ。それぐらい凜は自然とした口調でその単語を言ってしまうのだ。

「私と士郎はその聖杯戦争に選ばれた7人の魔術師の一人よ。いつてもまあ、私は聖杯を求めてという魔術師として当たり前行動よ、だけど士郎は例外だね。聖杯戦争を止めるために参加する。なんて馬鹿げたものだった」

凜の言葉に士郎がむっと唸る。馬鹿げたものと言われて癪に障ったのだろう。

「あれ、でも一組しか生き残れないっていうならなんで二人とも・  
・その、無事なの？」

フェイトが疑問を発する。たしかにそう説明した後だと二人とも生き残っている凜たちはイレギュラーに映るかもしれない。

「それは、私のマスターとその坊主が聖杯を破壊したからだ」

さらっとアーチャーが答える。そのストレートさに六課面子が一瞬呆けたように固まった。

「聖杯って・・・壊せるものなの？」

「可能よ。なんてたってそこにいるセイバーは、2度も聖杯を破壊しているんですから」

言われたセイバーは微妙に不服そうに、はいとだけ答える。

二度目はともかく、一度目は自身の意志ではなかったのが原因だ

ろうか。

「それで、話を戻すけど。

聖杯で呼び出されるサーヴァントにはそれぞれクラスが準備されているのよ。

順番にセイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、ライダー、バーサーカー、アサシン。例外はあるけどだいたいはこの7つのクラスよ。

そしてその7つに呼び出されるサーヴァントは毎回毎回同じとは限らないわ。結局はこのクラスっていうのは本人の名前ではなくクラスなんだから同じ呼び名がいたって不思議じゃないの。問題は何故アーチャーのサーヴァントがこの世界に現界しているかってこと」

人差し指を立てながら凜は一気に説明していく。台本を作っていたとしても普通じゃこうも簡単にすらすらとは言えないのではないかというぐらいに綺麗にまとめられていて、何も知らない者たちにとってはある程度優しい説明だった。

「つまり、あの金髪の男もアーチャーさんやセイバーさんと同じサーヴァントでクラスがアーチャーさんと同じってこと？」

「ああ、俺たちはまどろっこしいからアイツのことは真名のギルガメッシュって名前で呼んでる」

「ギルガメッシュ……どこかで聞いたことあるような」

フェイトが小さく呟く。

それを聞き取ったらしいはやはしばらく考え込んだが、すぐに答えを導き出した。



「ギルガメツシュ叙事詩……。うちの記憶が正しければ古代メソポタミア、シュメール初期王朝時代のウルク第1王朝の伝説的な王の名前やね」

「へえ、やっぱりそっちの地球でもそういったことについては同じなのね」

凜が関心そうに頷いた。どうやら情報に間違えはないようだ。

「英雄王ギルガメツシュ。人類最古の王とされている傍若無人な英雄よ」

「・・・ちよつと待って。そのギルガメツシュさんについてはなんとなくわかったけど・・・なんでアーチャーのクラスのサーヴァントが二人も存在するの？呼び出されるのは7人なんでしょ？知る機会がないんじゃない？」

「ふむ、いい質問だな。」

聖杯戦争は私たちの世界では既に何度も行われてきた。私が呼ばれたのは第5次聖杯戦争でね。彼の英雄王がアーチャーとして呼び出されたのは第4次。その後私たちに倒されるまでの10年間をマスターとともに現界していのだよ」

結構すごい内容ではあるのだが、相変わらずさりとってしまいうために重要性に欠けているような錯覚さえ覚えてしまいそうだ。

だが一応それでなのは納得がいったらしく、引き下がった。

「さて、とりあえず聖杯戦争についてはこれで大まかな説明は終了。」

ここからが本題だけど。ギルガメッシュ・・・アーチャーのサーヴァントがこの世界に現界している理由・・・っていうのは薄々理解したかしら？ 八神部隊長」

「考えたくはない話やけど、この世界で聖杯戦争が始まっているってことやね」

「その通り。まあ、まだ本格的に始まったわけではなくてこの調子だと準備段階ね。7人がそろっているわけじゃない以上表立ったことは起きないでしょう。あの金ピカが出てきた割にまだ騒ぎがこれぐらいなんだから現実ね」

収容所を破壊されているというのに『これぐらい』と言ってしまふあたり、どうやら凜たちにとってあのアーチャーのサーヴァントはもっと厄介な存在らしい。

特にセイバーが忌々しげに眉を顰めているあたり、事の重大さが伺える。

「もしかして、なんだけど・・・。  
その、4人が呼ばれたのって・・・」

「ああ、十中八九聖杯戦争が起きるからだろうな。  
・・・どうやら、今回の聖杯戦争は俺たちの時よりも厄介なのかもしれない」

士郎が真剣な面持ちで語る。

それは今までの士郎とは少し違った炎を映す眼だ。

「ま、この世界には魔術教会がないからな。

歯止めがきかないのだろう。特にギルガメッシュの今期のマスターは犯罪者だというではないか」

「そうね。機動六課の皆さんは彼のことを知っていたようだけど？」

「・・・彼を、いえ彼らを逮捕したのは私達ですから」

フェイトがなのはとはやてを交互に見たのちに答える。

「ジェイル・スカリエッティ。少し前まで世界を危機に瀕させた張本人であり、大罪人として現在は拘留所にいるはずだった人物やよ」

「だけど、今の映像の通りスカリエッティは逃走中。

・・・近いうちにたぶん、彼の仲間が捕まっている拘留所も襲われるだろうし」

『それなのですが・・・実は既にスカリエッティと先ほどの金髪の男により、ほかの拘留所も破壊されており、管理局に協力していないナンバーズは既に全員逃走しています』

その映像がまたもや映し出される。

ひどい、現場だ。あの中にはほかにたくさんの人がいただろうに。犯罪者ばかりだろうとはいえそれでも人なのだ。死んでいいはずがない。

「これはまずいな・・・悪いけど、グリフィス君は情報整理をお願い。フォワードの皆はいつでも出動ができるよう待機や！民間協力者の方々もフォワードと同様、なのはちゃんとフェイトちゃんの指

示で動いてもらう。

「うちは隊長室に戻ります！」

【了解っ！！】

その場にいるフォワードメンバーは敬礼を、民間協力者は頷きながら一礼して行動に移る。

だが、その中で土郎だけが一人一瞬出遅れたように遅れて走り出した。

## 英雄王再び（後書き）

タイトルの割には金ピカは出ていません。なんてこったw  
そして合間合間でちよいちよい書いていたせいでかなり文章が不安  
定だな、おい^^;

## 正義漢

聖杯戦争・・・7人の魔術師による殺し合い。士郎君と遠坂さんはそんな戦いの中にいたという。

士郎君はともかく、遠坂さんはそれが当然のことのように受け入れているのだ。幼いころから管理局の手伝いをするにより人の死というのは何度もみたことある。

けど、それでも私はきっと人殺しはできない。局員ではあっても、私には人の命を奪うほどの覚悟は未だできていないのだ。

傲慢、だとは思う。フォワードの子たちを守ってみせるとはいうものの私は最後の最後で詰めが甘い。

いつもはあんなに普通の子たちと同じように笑い、士郎君をからかったり、世話を焼いたりとしている遠坂さんはそれでも自身を魔術師と呼び、人殺しをすることにためらいがないとばかりにさりとってみせた。

ほぼ年は変わらないというのに、この差はいったい何なのだろう。

住む世界が違う、というのはまた微妙に違った意味合いでの私たちと遠坂さんたちの覚悟の違い。

士郎君は破壊された収容所を見て嫌悪感を抱いたものの、人の死を見て冷静だった。

遠坂さんは唇を噛みながら必死に声を出さないようにし、その映

像から目をそらすことはなかった。

二人は私たち以上に死を見つめてきている。

だからこそそのなせる業であろう。

『なのは・・・何か悩み事？』

隣で待機していたフェイトちゃんが念話で声をかけてくる。

どうやら私は少し、というかなんかなり険しい表情をしていたらしい。

『ううん・・・ただちよつと戸惑ってるだけ。』

二人が体験してきた聖杯戦争っていうのがどんな物かはまだよくわからないけど、遠坂さんの口調からしてかなりやばいものだってことはわかる。・・・わかるからこそ、いま私たちにできることって何なのかがわからないの』

『うん・・・そうだね。でも4人が隠していたことを話してくれたんだもん。私たちはそれにできる限り答えてあげなきゃ、だよね』

務めて笑顔でフェイトちゃんは返した。

—————そうだ、少なくとも遠坂さんが私たちに話してくれたのは少しずつだけど私たちのことを信じてくれていることの表れなんだよね。

『頑張らなきゃ、だね』

『うん。そうだね、なのは』

「グリフィス君、スカリエッティの居所は把握しているんか？」

「いえ・・・先ほどまで追っていた局員は既に全滅・・・未だ何も情報はありません」

手がかりはゼロにも等しいというわけだ。

と、そんな時隊長室のドアが3回ノックされた。

「はい、どちらさまですか？」

「えと、衛宮です。お話があるんですが・・・」

椅子に腰かけたまま返事をする、扉の奥からは意外な人物の声がした。

「・・・入ってええよ」

「失礼します。八神部隊長」

複雑な表情をしたまま士郎君は、グリフィス君の横に立ち、うちをまっすぐに見つめてきた。

「それで、話ってなんや？」

うちは平静を装いながら彼の言葉を待った。



といってもほとんど数瞬のうちに彼は口を開いた。

「率直に言います。聖杯戦争の対応は俺達がやります、だから……」

「うちらは関わるべきではない———か。  
……たぶん士郎君のことやから遅かれ早かれそんな忠告をしてくるんじゃないかって予想はしていたんやよ」

「———っ！」

先手を打たれたことに驚いたのか、士郎君は明らかに目を見開いた。

「だったら———」

「お断りや」

「なんでさっ！八神さんたちには関係な———」

速攻で答えるうちに戸惑いを隠せずに士郎君は声を荒らげようとする。

だが、それよりも早くグリフィス君がうちと士郎君の間に割って入った。

「衛宮君、それは違う。たしかに聖杯戦争とやらは君たちの領分だろう。……だけどね、それが行われているのは管理局が管理している世界なんだ。」

つまり、無関係でいるなんて端から無理な話なんだよ。

「―――それに、僕たち機動六課はスカリエッティとその仲間の脱獄を見逃すわけにはいかない」

「・・・その通りや。」

それに関係だったとしてもうちは自身が預かるって決めた民間協力者を本人たちだけで危険な場所へと放り込むなんて真似、できない。

「・・・もう少し信頼してくれてええんとちゃうか？ 士郎君」

彼が私達の身を気遣ってくれているのはわかっている、けどうちらにとってもこれは引けないことなのだ。

「それとも、士郎君はうちのことが信用できないんか？」

「そんなことはない。だけど・・・八神さんたちはその・・・女の子じゃないか」

「―――は？」

「おっ、男として遠坂やセイバーを巻き込むのも・・・その、非常にあれなのに・・・八神さんたちまで巻き込みたくは・・・」

「「「・・・」」」

うちとグリフィス君、そしてリインは士郎君が言った言葉の意味が一瞬わからずに沈黙した、というより呆気にとられてしまった。

だが、それをゆっくりと理解しだしてきた途端、うちはつい、職務中だというのに笑い転げそうになってしまった。

「—————ちょ、ふははははは—————それ本気で、言ってるんかー!？」

「—————む。もちろん、本気に決まってるじゃないか」

「じょ、冗談は休み休み言うもんで、士郎君、はははっ——!」

士郎君はそんなうちを見てしかめっ面になった後、ぷいっとそっぽを向いた。

「なんでさ」

「なんでって・・・はやてちゃんやなのはさんたちにそんな心配するような人がいるとは思ってなかったからですよふふふ」

リインが空中で横になりながら腹を抱えるようにして笑いながら答える。

「ん、そんなの当り前じゃないか。心配するにきまつてる」

頬をかきながら士郎君が答える。どうやら本気で心配しているらしい。

うちもそんな士郎君を見、頭を落ち着かせる。

「・・・そっか、心配してくれるのは有難いんやけど。うちらも管理局員や。いつだって覚悟は出来とる。だから関わるなっって言われても関わるし、士郎君たちが負い目を感じる理由はないんやで?」

「・・・分かった。余計な時間を取らせてしまったよな、ごめん。もうこんなことは言わないよ。でもこれだけは約束してくれ。危ないと思ったら迷わずに逃げるんだ、絶対皆で生きて帰らなきゃ意味がないから」

「・・・その約束、部隊長八神はやてがしっかり守ってみせる。

だがこちらからも約束や。一人でしよい込もうとしないこと、そして士郎君達もちゃんと全員無事で機動六課に皆で戻ってくることや」

「ああ」

士郎君が頷き、うちもそのあとに笑顔で頷き返す。

「じゃあ、俺。遠坂たちのところに戻るよ」

「うん、しばらく待機状態が続くだろうけど、正直今は動きようがないから休憩だと思って気楽にしといてと皆にも伝えてや？」

「了解。八神さんもあんまり無理はするなよ」

そんな言葉を置いて、士郎君は部屋から出て行く。

「はやてちゃん」

「・・・今回もちゃんと事件を解決してみせる。せやろ？リイン」

「はいです♪」

はやての手にはシュベルクロイツが握られていた。  
光に反射してか、一瞬だけそれは輝きを放った。

## 正義漢（後書き）

そういえば、リアルの知り合いにこれ打っているところ見られて最初の感想が「士郎ってばはやてのフラグゲット!？」でした。  
無意識だったけど・・・うーん？ そうなの、か・・・？

## 予言

結局新しい情報は入らずにその日は終わった。

スカリエッティの居場所は不明、残るサーヴァントについては全く分からない。

情報が全くつかめない日が何度も続き、アーチャーはよく外出するようになった。

フォワード4名は拘置所の映像を見て以来、不安が重くのしかかっており、なのはとフェイトは訓練が終わった後、フォワードメンバーにばれないように自主訓練を始めてさえた。

はやて率いるヴォルケンリッターは機動六課と聖王教会を行き来し、情報集めに精を出していた。

セイバーと凜は士郎を肉体面でも、魔術面でも鍛え、戦いの時を待った。

それぞれが今自分にできることは何か。と奮闘し続けている。

そんな時、カリムから呼び出され、はやてはグリフィスに留守を任せて聖王教会へと赴いた。

「おまたせ、カリム」

上着を椅子に掛けながら、カリムに挨拶する。

彼女は笑顔で迎えてくれた。

「それで今日は何の用なんや？」

さっそく用件を切り出した。

カリムはすぐに顔を引き締めると、口を開いた。

「それが・・・おかしなことに年に1度しかできないはずの預言書作成が・・・昨日突然、発動したのよ」

「なん、やて―――？」

「もしかしたら、はやての所で預かっているっていう民間協力者の方々に関係しているのかもしれないと思って今日ははやてを呼んだのよ」

「それで、預言の内容は？」

「虚無より生誕し、矛盾せし聖悪なる仮面を被る者杯に灌がれた運命により衝突す

欲望の名の元に集う幾多の戦が次元の壁、崩れ去る」

プロフェーティン・シュリフテン

預言者の著書により書かれた詩文を読み終えると、カリムは大きなため息をついた。

正直言えばうちも溜息つきたい気分である。

杯というのは遠坂さんが言っていた聖杯のことで戦は聖杯戦争とということなのだという事は容易に想像ついた。



そういえば、運命とは私たちの世界においてはFateとも表記するが……。

関係あるのだろうか？と考えてみて、すぐにその考えを振りきった。

とってもほかに思い当たることはなく、正直進展という進展はない。

「……はやて？」

「——あ、ごめんごめん。ちよい考え込んでたみたいや」

「それで……何か分かったことはある？」

「……少しはなあ、でも確証はあらへんよ？」

そんな実に頼りないセリフに、カリムは頷くことによってうちを促した。

うちは知る限りの情報をカリムに与えた。遠坂さんたちがいない場で話すのはどうも気が引けたが、しょうがない。

それに、カリムは4人の事情を知ったからと言ってどうこうするような人物ではないことはよくわかっている。

「……確かに確証はない話ね。」

でもたしかにいくつかはちゃんと預言に適合しそうだし……うん、私も別ルートでいろいろと調べてみるわ」

「おおきになあ、カリム」

「少しは私を頼りなさい？」

あなたは私の妹みたいなものなんだから」

「あはは、頼りになりすぎるお姉ちゃんやな」

笑顔で茶化すとカリムは少し顔を赤らめた。

「もうゝはやてつたらゝ！ふふっ」

「じゃあ、あんまり六課を留守にするのもあれやし、もうそろそろお暇するよ」

言うより早く椅子から腰を上げ、上着を手握る。

「ああ、うん。道中気を付けてね。・・・って、あら・・・？」

「？どうしたんや？カリム」

カリムは腕まくりされていたうちの腕を凝視していた。

気になって自分でも確認してみる。

「あれ――？こんな怪我いつしたんやろ？」

肘から手首のあたり、つまり前腕に蚯蚓腫れのように一直線に血が流れていた。と言ってももう止まっているらしく、痛みすら全く感じない。

「大変っ！すぐに医務室に」

カリムが慌ててうちを医務室に連れて行こうとする。

だがその手を優しく振りほどきながら首を横に振った。

「大丈夫やよ。全然痛くないし、六課に戻ってから自分で治療するよ」

腕をぶんぶん振って、大丈夫だとアピールするとカリムは心配そうにしながらも苦笑して「そう？ならいいけど・・・」と、つぶやいた。

「じゃ、今度こそ失礼しました、な。

また近いうちにお邪魔するよ」

手をパタパタ振って、カリムをお別れした。

———だけど、なんなんやろ？これ。血というより痣っぽいけど・・・  
・なんかしたかな？

とりあえず皆に心配かけまいと、痣を隠すように、長袖の上着を羽織った。

## 予言（後書き）

そういえば気づけば50万hitとくに突破していました。

正直びっくりです^^；

それで何か外伝を書こうと思ったもののネタが思いつかず・・・o

r  
z

読者の皆様は何か要望ありますか？

もしよろしければ何か案を下さると幸いです><；

## 風の舞い降りる場所

その日の夜、痣のことが気になって眠れずにいた。

シュベルトクロイツを握ったままベッドで転がっていたが、どうも落ち着けず、宿舎から真夜中に誰も起こさないようにとひっそり抜け出した。

何故か、気分的な問題で夜天の書も一緒に持ち出した。

宿舎のちょうど裏手側にある林までなんとなく歩いてきたうちは、途中で急に止まった。

いや、止められたという表現の方がしっくりくるかもしれない。

そこには夜天に映し出されたかのような円が描かれていた。

ベルカ語に近い言葉が縁やいろんなところに書かれており、一部はなんとなく読み取ることができたが、意味はよくわからなかった。

よく見れば魔法陣に似ていなくもない。

「これ・・・なんなんや？」

知らず声が漏れる。

月に照らされて輝きを放つそれは、神々しくも感じ、同時に禍々しくも感じた。

無意識に地面に映し出されていたその円の縁を手でなぞった。

その時、手に持っていたシュバルトクロイツが地面に落ちる。

慌てて取ろうとして円の中心まで歩いたうちは、そこで異変を感じ取る。

円から魔力が吸い取られる感じがした。

自分の意志とは無関係に魔力が消えていく不可思議な感覚はシグナムたちヴォルケンリッターに魔力を供給しているのと同じような気分だ。

円は月光に反応するかのように輝きを増していく。

それを純粹に美しいと思った。

と、急にシュバルトクロイツと夜天の書が光り出す。

「なっ——！！？」

驚くのも束の間、視界は光で一瞬にして奪われた。

どれぐらい、目を閉じていただろう。

それさえも忘れたぐらい経って瞼をゆっくり開いた。

「え………？」

目の前にいるものが夢のように思えた。

ああ、もし夢ならば覚めないでくれ、とも思う。

「召喚に応じ参上しました、我が主」

これが夢と仮定して、今うちを起こすものがいたら、誰であろうと恨むかもしれない。

だって――――

今、まさにうちの目の前には祝福の風が舞い降りているのだから。

「リイン、フォース・・・」

「はい、主はやて」

綺麗な銀髪が夜間の冷たい風に揺れる。

紅に輝く瞳は優しくこちらを見つめてきた。

―――つい、涙が流れそうになる。

それを必死にこらえ、彼女がそうしたように笑顔を返した。

もし、夢だったとしても感謝したりないぐらいの気持ちを込めて

○



## 風の舞い降りる場所（後書き）

実は先ほど投稿した時に一緒の話として投稿するかかなり迷ったのですが、短いなりにやはり分けました。

そのあと肉付けするか・・・？なんて考えましたがそれも却下しました（あ

さて、はやてのサーヴァントの予想が当たった方はどれくらいいたでしょうか？

## 風の舞い降りる場所？

左の前腕が燃えるように熱い。

痛みを感じ、すぐにその原因が“アザ”にあると悟ったうちは急いで袖をめくった。そこには赤く三つの文様が浮かんでいる。

「落ち着いてください、主はやて」

リインフォースが優しく、うちの腕に触れる。

それだけで痛みが引いていくような錯覚を覚える。

否、実際に痛みは消え、それはただの、“アザ”として前腕に刻まれていた。

「それは令呪というものです」

「令、呪・・・？」

聞きなれない単語に、ただ反芻した。

「私達サーヴァントを律する三つの命令権です」

「命令、権・・・」

言葉に出すものの、まったくと言っていいぐらい実感が湧かない。  
が、それよりも。

今、リインフォースは“サーヴァント”と言わなかったか……

「なあ、リインフォース……」

「はい、何でしょう？」

膝をついたまま、うちの言葉に律儀に返事をする彼女は何か気づいたのかハツとなる。

「ああ、主はやては“聖杯戦争”は全くご存じではありませんよね」  
最近、遠坂さんから聞いた単語がリインフォースから放たれる。

聖杯戦争、そしてサーヴァント……もう確定事項のようなものだった。

頭の中がどんどん真っ白になっていく。

「だっ大丈夫ですかっ!？」

よろめいたうちの体を助けるようにリインフォースはうちを抱きあげた。

ちょうど子供の頃よく皆（といってもヴィータ以外）にしてみらっていたお姫様抱っこ状態だ。

「ごめん、ちよういきなりの出来事にびっくりしてしもうてな」

「そうですよね、すみません主。

急にこのようなことになってしまい……」

ごまかし笑いで和ませようとしたのが帰ってリインフォースは気にしてしまったようで、申し訳なさそうに俯いた。

「そんなの気にせんといてや。うちはまたリインフォースに出会えたことが一番嬉しいんやから」

腕を彼女の背中へと持っていき、ゆっくりと顔を近づけた。

そして一言。

「おかえり、私の祝福の風」  
リインフォース

笑顔でその言葉を贈った。

「ただいま戻りました。我が夜天の主、八神はやて」

だからリインフォースもまた微笑をたたえ、それだけを言った。

おかえりという挨拶に、ただいま、と。

日常会話のように、それは流れていく。

それからリインフォースはゆっくりと聖杯戦争について語りだした。

彼女はキャスターのサーヴァントだという。

「私はベルカ魔導の騎士なんですけどね」

そういつて彼女は笑った。

そして、主を守ってみせると宣言をする。

正直に言ってそれは嬉しい。彼女が戻ってきてくれて、また傍にいてくれて、でも、それと同時に不安もある。

彼女はあくまで聖杯戦争に喚び出されたサーヴァントであり、彼女はうちを守るため、つまり戦うためだけに戻ってきたのである。

それはやっぱり悲しい。

「リインフォースは・・・それでいいんか？」

だから問うた。

私はどうせ聖杯戦争に機動六課として関わると決めていたのだ。それがあくまで当事者に、士郎君や遠坂さんたちと同じ立場になっただけにすぎない。だから、いいのだ。

「そうですね・・・これが最良かはわかりません。ですが、嬉しく思います。私はこうしてまた、愛する騎士たちと、主とともに戦えるのですから」

偽るものは何もない、晴れやかな笑顔だった。彼女が本心から言っているのは一目瞭然である。それは見間違うことなき10年前の彼女と変わらない意志の表れだった。

ヴォルケンリッター

騎士達の事。なのはやフェイトの事。機動六課の事。そして士郎君たちの事。うちが話す間、リインフォースはたまに相槌を打つぐらいで何も言わずにただ聞いてくれた。

ただ、やっぱりというかなんというか、士郎君たちの話は驚いたように、少し複雑そうな顔をした。

「主は、どうなさるおつもりなのですか？」

話し終えると、一時の間を置いて、リインフォースは尋ねた。

「・・・何がや？」

「その、民間協力者についてです。

彼らは今回の聖杯戦争に直接のかかわりはないとはいえ、マスターなのでしょう？」

そうだ、聖杯戦争において聖痕、つまり令呪を有する者は何の例外もなく、マスターであり、倒すべき存在なのだとリインフォースはいつた。それは彼らとて例外ではないことを示している。

「うーん、できる限りは戦うつもりはないよ。

うちには聖杯に叶えてもらうこともないし、士郎君たちと殺しあうつもりは毛頭ない」

「はい」

主ならそう思うだろうと思っていました。

彼女は小さな声で呟き、また微笑んだ。

「ならば最後に一つだけ確認のために聞いておきます」

うん、と首を縦に振る。

「私のことをキャスターと呼んでくださいと無理強いはしません。  
ただ確認を。」

私はいつも実体化をしてあなたの傍にいてもよろしいのでしょうか？」

戸惑いながらそんなどうでもいいことを確認してくる彼女にうちは苦笑にも近い笑みをこぼす。

「もちろんや。リインフォースは霊体化する必要なんてあらへんよ」

魔力を気にすることはもちろん、サーヴァントだからといって隠れる必要もない。

「ただ、リインフォースが必要と思った時はそうすればいいことやよ」

「はい」

リインフォースは安心し、頷く。

それは、長いようで短い、夜の終わりの合図だった。

## 風の舞い降りる場所？（後書き）

学校でちまちま時間を見つけて書いていたら結構更新遅れてしまいました^^；



## 世話好きな紅いコンビ

「・・・・・・・・・・ほう？これはまた・・・」

意外なものを見た、とても言いたげにアーチャーは木の枝の上で  
呟いた。

「アー、チャー・・・」

気付けばアーチャーは構えていたらしい弓を消し去る最中だった。

「いや、驚いたよ。まさか君が今期の聖杯戦争に選ばれた7人のマ  
スターの一人とはね」

心底可笑しそうに彼は嗤った。

「・・・それで、今すぐここで戦うのかね？」

彼は嗤うのを止め、こちらを見据える。まるでそれは獲物を狙う  
鷹の目だ。  
ホークアイ

「うちは、遠坂さんや士郎君と戦うつもりはないよ」

つまり、遠坂凜のサーヴァントたるアーチャーのサーヴァントと  
は戦うつもりはない、ということだ。

「・・・・・・・・・・そうか」

すると彼は何もなかったかのように、背を向けた。その背中が『

見逃してやるから、さっさと消えろ』と言っているようで、うちはどうするべきかと頭を巡らせる。

「待て、弓兵よ」

と、うちの頭が結論を導き出すよりも先にリインフォースがアーチャーに声をかけていた。

「なにかね？君のマスターは私とは戦わないと言ったと思うのだが。それとも何かね、君はマスターの命令を無視して今すぐ私を倒しておきたいとでもいうのかね」

「マスターの命令はもちろん守りますし、私もあなたと戦うつもりはありません。聖杯に望む願いなど私にも主はやてにも存在しないのですから」

「ふん・・・願いが無い、か。元来魔術師とは欲望の塊だ。だからこそ皆、聖杯を求める。それを――願望機を欲しないというのか」

嫌なものを見るかのように、アーチャーは吐き捨てる。一体何が彼をそんなに機嫌悪くさせたというのだろう。

「うちは、そんなものいらへんよ。うちの願いはうち自身の手で叶える。願い事をするだけじゃ無責任やおもうから」

「なるほど、確かにそういう考え方はありかもしれないな。まあ、他人のことなど私には関係ないか」

無駄なことを聞いた、と彼は笑ってこの話は終わりだと示した。

「話を戻します。単刀直入に聞かせていただきますが、あなたにとって私は邪魔ではないのですか？」

「知れたことを。私は今期のサーヴァントではない。強いて言えば――そう、抑止力・・・世界の掃除屋だ。

だからマスターが願わぬ限り、敵と見なさない限り私には戦う理由がない。それだけのことだよ、キャスター」

口元を歪めて、アーチャーは答える。

「・・・私のクラスも知ってるというわけですか」

「なに、ただの勘さ。君は剣を握る者でも弓を扱う者でもない。槍は不釣り合いなうえに意識すら失っていない。見たところ何かに乗って戦うものでもないようだな。容姿としては闇に隠れることも可能としているようだが、それにしては堂々としている。つまり奇襲には向いていない。

・・・そら、答えは一つしかあるまい？」

それは・・・たしかにそうかもしれない。彼女は魔導騎士であるが、シグナムのように剣士というわけでも、エリオのように槍を扱いわけでもない。

――あれ、何かを忘れている・・・・・・？

そうは思うものの忘れていると思う理由すらわからない。もやがかかっているかのように、うち自身がそれに触れさせまいと自制しているかのように、何も考えられていない。

「一つ忠告をしておくでしょう。・・・聖杯戦争の当事者になると

いうのなら甘い考えは捨てろ。魔導師ではなく魔術師になれ、でなければ最初の脱落者は君たちだ、キャスターのマスターよ」

冷たい瞳だった。彼が時折士郎君を見るときと同じ敵対関係を示す、ただそれだけの感情すら混じっているのかわからない瞳だった。

「あなたにしては甘いね、アーチャー」

木陰から、遠坂さんまでも現れる。いつから彼女たちはいたのだろうか。

「いやなに、マスターを見習い、無知なマスターに知恵付けをと思っ  
てね」

柄ではなかったか、と自嘲気味にアーチャーは言う。

「ふーん、まあいいか。じゃあ蛇足としてもう一つ教えておこうかしら。7つのクラスについては教えたと思うけど、それには例外があるのよ。例を挙げると・・・そうね、私たちの世界で行われている聖杯戦争のうち、第3次聖杯戦争。この時には復讐者アヴェンジャーのサーヴァントが存在したらしいわ。真名をアンリマユ」

アンリマユ・・・そのような真名を持つ英雄など、本当に存在しているのだろうか。たしか、ゾロアスター教の最高善とするアフラマズダーに対抗し、絶対悪と称される存在だ。

いや、そのことより問題なのは彼女が今、なぜこのような話をしたか、だ。

「つまり、此度の聖杯戦争には例外が存在する、と？」

うちの考えをリインフォースが代弁する。すると彼女は満足そうに頷いた。

「そ、察しが良くて助かるわ。従者のサーヴァント<sup>サーヴァント</sup>。それが今回、私達でつかめている例外の情報よ」

「サーヴァント・・・？」

「それだけに特化し、それだけしか不可能。故につけられたのが従者。正直言って能力は未知数。・・・まあ、剣道は5段、といったところか」

クックと心底可笑しそうにアーチャーは嗤う。

「お知り合いのですか？サーヴァントと」

「・・・ああ、マスターとも、サーヴァントとも知り合いさ。私の義姉コンビだからな」

「「・・・は？」」

驚いたのはうちとリインフォース・・・ではなく、うちと遠坂さんだ。

彼女にとってもそれは初耳だったらしい。

## 世話好きな紅いコンビ（後書き）

なんか大分更新が遅れてしまい・・・^^；  
メモは早いうちにできてたんですがずっとパソコンの前に座るのが  
だるく感じて（マテ

## 甘い考え

「ふ、藤村先生はたしかにアンタの姉みたいなものだってわかるけど、アインツベルンよ、アインツベルン！どう考えたってアンタとはイリヤスフィールは関係ないじゃない！！」

「ふむ、そういえば凜と衛宮士郎は知らなかったな。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと衛宮切嗣は実の親子なのだよ。血の繋がりは士郎にはないとはいえ、奴も切嗣の息子だ」

血の繋がりが無い？ 士郎君とその切嗣という人は養子関係なんやろうか。

・・・うーん、それにしてもうち・・・微妙にスルーされてへんか・・・？

「・・・何？それじゃあ、前回のアインツベルンのマスターっていうのは・・・」

「察しの通り、魔術師殺しの異名を持つ天秤の測り手、衛宮切嗣とそのサーヴァント・セイバーに決まっておろう」

「・・・そう」

「そもそも、何故彼女はいつでも殺すことが可能な無能なマスターを殺さなかったと思う。いつでも殺せるから後回しにしたのでは無い。彼女はアインツベルンを裏切った衛宮切嗣を憎んでいた、だが同時に父である彼が好きだったのだ。その子供をいかにして殺す？義弟だと理解しておきながら」

それはあまりにも残酷な仕打ちだろうよ、と彼は自分の事かのよう  
に嘲る。上手く理解は出来ないが、サーヴァントのマスターが士  
郎君にとって大事な人物であるという事はよくわかる。

そして、そんな士郎君さえもしらない事情を知っているアーチャー  
も十分敵マスターと深い関係である事は察せる。だが

「・・・あれ、でも・・・今の話は士郎君の話やろ？話の流れはア  
ーチャーさんの姉みたいなものだったところだったと思うんやけど」

疑問が無意識に口から出た。言葉に出すつもりはなかったのだけ  
ど、何故か口は正直に疑問を発していた。

しかし二人は聞きとっていたようだが、答えてくれない。どうや  
ら訊いてはいけない事を訊いてしまったようだ。

「・・・すまないが、それは真名に関わることなんでな。今  
の君には答える事が出来ない。君はマスターなのだからな」

・・・そうか。真名に関わる事はおいそれと他のマスターには言  
えない。だから口を噤まずにはいられないのか、二人は。

——でも、それ以外にもこの空氣的には隠したい理由があるよう  
な気もするんやけどなあ・・・。

考えても仕方ないか。とりあえず今は深く考えないでおこう。

「・・・アーチャー」

「・・・君はお人好しだな」



誰かとあえて言わずに彼は肩をすくめる。

皮肉屋だというのに彼を嫌うことができないのは何故だろう、なんてどうでもいい事を考えてみる。ちなみに答えは出ない。

「そういえば八神二佐。あなた、これからどうするの？」

「今まで通りやよ。リインフォースが戻ってきた、それだけの話や」

これだけは変わらないものと、自分に言い聞かせるようにはつきりとした口調でうちは遠坂さんに言った。

はやては迷わずにこちらの目を見て答えた。

内心驚きを隠せないでいたが、出来る限り表情に出さないように無表情に徹した。

「リインフォース・・・？それって、？曹長の事ですよね？」

ん、ちよつと待て。？って・・・二番目ってことよね・・・？

「彼女は二代目なんやよ。・・・そして彼女が初代祝福の風」  
リインフォース

隣で控えていた銀髪の女性。彼女は？曹長と違って温和で礼儀正しい、大人の女性といった雰囲気を出している。元々リインフォースとは彼女の事だったという事なのだろうか。

キャスターのサーヴァントはその全身から膨大な魔力を放出していた。はやてがマスターというだけあって凄い魔力量だ。

正直なところ敵に回したら厄介なんだろうな、なんて考えが頭によぎる。あまり考えたくないけど、キャスターのサーヴァントという割には接近戦にも遠距離にも対応してそうな感じだし。

「そう、一つ忠告してあげる。

私たちはもちろんだけど、相手マスターは手加減なんてしてくれないわよ」

こんな事は心の贅肉だと理解している。だけど、何故か忠告を口にしてしまっていた。

———ほんと、士郎の事を言えないわね、わたし。

「ま、衛宮君と違って、八神二佐はある程度自分の身は守れるでしょうけど。サーヴァントがやられてもサーヴァントが消滅するんだけど、貴方がやられたらキャスターも消滅するんだから、どっちがリスクが低いか・・・分かるわよね？」

「うちを狙ってくる可能性が高いっていうわけやね」

大きく頷く。説明した事全てを一度で理解してくれるのは助かる。

「そういうこと、じゃ、私とアーチャーは今、ここではあなた達を見なかった。いいわね？アーチャー」

「マスターの命令とあれば従おう」

口元を歪め、アーチャーは頷く。何も言わずにいてくれた己のサーヴァントに密かに感謝する。

私はそのまま、次からは夜出会えば“敵”になるやもしれぬ相手に背中を見せ、彼女が後ろで呼びとめる声を見捨ててアーチャーと共にその場を離れた。

## 甘い考え（後書き）

またもや遅れて申し訳ない＞＜；

IS〈境界式〉というのを5月からリクエストで始めましたが、なかなか並行してというのは難しいですね。

というより、いい加減HIT祝外伝を作りかけのまま放置している自分、知り合いにたたかれそうな気が（ry

## 復活ヴォルケーズ

次の日、機動六課は驚喜の声で満ちていた。

中心点にいるのは、昨日見たキャスターのサーヴァント、リインフォースだ。

「すまなかったな。烈火の将、風の癒し手、蒼き狼、紅の鉄騎。大事な時期に私は留守にしまっていた」

彼女は既に制服に着替えており、シグナム、シャマル、ヴィータ、そして初めて見かける男性に頭を下げていた。

「いや、お前が主はやての許を去ったのは守るためだ。むしろ良く戻って来た。リインフォース」

「ほんとうに・・・あなたなのね・・・リインフォース」

「・・・・・・・・」

「まさか、また我らが全員で集まる事が出来ようとはな」

上から順にシグナム、シャマル、ヴィータ、男性の順である。ヴィータにあたっては無言で顔を少し赤らめながら視線をリインフォースから逸らしていた。というより、ほんとに誰よ？あの人・・・・。気のせいか頭に耳が生えている気がするんだけど・・・・。

「ねえ、あの男の人は誰？」

気になってしょうがなかったので、隣にいたフェイトにそれとなく尋ねてみた。すると彼女は一瞬だけポカンとしたが、すぐに合点がいったようで苦笑しながら答えてくれた。

「ああ、あの姿で見るのは初めてかな？ ザフィーラだよ」

「えっ………！？ それってヴィヴィオと一緒にいる犬………！？」

「犬っていうか……狼だけだね。ザフィーらは守護獣……まあ、平たく言うといい魔と似たようなものかな……」

基本的には狼形態でいるんだけど必要時にはああやって人形を取る事が出来るの。初めてだとわかりずらかったかな？」

なのはが補足してくれる。

それにしても使い魔が人語を理解するだけならともかく人の形を取って会話が可能とは……魔法とはいえもう何でもありね……」

「この世界の使い魔ってすごいんだな」

隣で士郎が関心そうに頷いている。それに対しては同感だと相槌を打ちつつも、私の視線は彼女から離れなかった。

「ああ……君たちは」

視線に気付いたのか、リインフォースはこちらを振り向くとゆっくりと歩み寄ってくる。

まずっ！ セイバーには話してなかったし、昨日の事を口にされた

ら・・・！

「初めまして、ですね。リインフォースと申します」

こちらに一瞬だけ目配せをすると、彼女は昨日言った言葉の意味を理解していたようで私と士郎を見て初対面のようにふるまってくれた。

「初めまして、リインフォース。私は遠坂凜、今は八神二佐の庇護の下ここ機動六課でお世話になっています」

だから私も肯定するように初対面の挨拶をした。あくまで魔術師として。

「初めまして、衛宮士郎です。遠坂と同じでここでお世話になっています」

「・・・・・・」

ただ、やはり失点というべきか、説明をしていなかったせいで、セイバーはどうするべきかと考えあぐねているようだった。先程からちらりとこちらに視線を向けてきている。私が、彼女がサーヴァントだという事に気付いている前提の視線がこちらへと降り注ぐ。

『アーチャー・・・お願い』

『致し方あるまい』

霊体のままでいるアーチャーに救いの手を求める。だってしょうがない、今ここで私が説明したら、彼女のお膳立てがすべてパーな

のだ。それはさげたい。

だがそれよりも先にリインフォースが先に動いた。

「よろしくお願いします。凜、士郎。そして・・・」

「セイバーです。こちらこそよろしくお願いします」

しょうがないとばかりにセイバーは礼儀正しく礼をした。ここで警戒心むき出しで彼女が動かなかったのは、私とアーチャーが動かない事で察してくれたのだろうか。

『これはどういうことか、説明していただきたい。アーチャー』

顔には出さずに、声色を半音低めにする事で私はアーチャーを問いただした。

『先程、凜にも頼まれたよ。彼女は八神はやてのサーヴァントとして召喚された、キャスタのーサーヴァントだ。見ての通り彼女は元来からはやてに使える者だったようだな』

『そんな事を聞いているわけではありません。何故ハヤテがマスターになっていて、これを凜が黙認しているのか、です』

『手厳しいな。凜は昨日の召喚現場に私と共に立ち会っただけだよ。まだ、聖杯戦争が始まっていない今は戦う必要もない。それがマス



ターが出した結論だ。

今回の聖杯戦争は魔力をもつものであればそれがたとえ魔導師とよばれる者であっても、マスターになれるという事なのだろう。そして彼女は聖杯に選ばれたというわけだ』

『たしかに、凜の判断は正しい。ですが、このまま隠し続けるのも無理ではありませんか？少なくともシグナムたちに彼女の現在の状態を隠し通せるとは思えません』

この聖杯戦争にもしも彼女が敗れば、キャスターのサーヴァントは消滅してしまうのだ。皆がこんなに喜んでいるのに、すぐに消えてしまうとしたらそれはやはり悲しいという事はわかる。

『それは二佐が決める事だ。俺たちが干渉していいことではなからう』

『そうですね。では私たちは・・・』

『マスターの命令があるまでは待機。もしくはマスターに危機があれば駆けつける。それでよからう』

『了解しました』

——それにしても、キャスターのサーヴァントですか。おそらく、彼女がキャスターの枠にはまっているのは魔導師であったからでしょうね

相手がどういう戦闘をするかは今回ばかりはクラスはあてにならない。ならば、最悪の時を考えて、この休戦状態はむしろ好機かもしれない。

——まあ、それを言うならばアーチャーもクラスはあてになった  
ものではありませんが。

知らず私は頬を緩めていた。

## 復活ヴォルケンズ（後書き）

え、タイトルが雑だって？いつものことです。

とりあえず今日は2回に分けて投稿^^；

次回はなのはさんフェイトさん、そして初対面なフォワードチームとのリインフォースの絡みです（え

## 利益と損益

「リインフォース・・・久しぶりだね」

何と言葉をかければいいのかよくわからず、中途半端に私の言葉を宙を舞った。だけど、それで充分だった。彼女は私とフェイトちゃんの方へと向きなると、微笑みを返してくれた。短い期間だった  
が10年前に見たそのしぐさが懐かしくてくすぐったい。

「ああ、久しぶりです。主はやてもですが、お二人とも随分見ないうちに成長していらして、見間違えました」

「うん、10年ぶりだもん。私たちも少しは成長できたと思う」

まだまだだけどね、とフェイトちゃんが苦笑する。そう、まだまだだ。もっと強くなって皆を守るように、もう墜ちないように。

「ええ、皆さんこれからもっと成長なさるのでしょうか」

「あ、あの・・・なのはさん、フェイトさん」

「あー・・・スバル達ははじめてましてだったね、こちらリインフォースさん。シグナムさん達の古くからの知り合いだよ」

「リインフォースだ。我が主と騎士達がお世話になっています」

「あっいえ！こちらこそ八神二佐やヴィータ副隊長達にはお世話になっています！スバル・ナカジマ二等陸士です」

「ティアナ・ランスター二等陸士であります」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「同キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

口々に名乗りを上げるフォワード一同にリインフォースが苦笑する。4人を見るリインフォースの目は以前の私たちに向けていたような子供を見守るような優しい目だった。

「しばらくは私も世話になる。・・・隊長たちと同じように硬くならず気楽にしてくれ」

「「「はい！」」」

リインフォースとスバル達は仲良くなれそうでひと安心だった。

同時刻、管理外世界163番フォールダウン。そこにはサーヴァントが二体・・・否、数え切れないほどのサーヴァントが集結していた。

「よもや、またその顔を我の視野に入れる事となろうとはな。雑種の分際が」

黄金の鎧を纏ったサーヴァントが忌々しそうにそれを見つめた。目の前にいるのは黒装束を纏った無数の暗殺者のサーヴァントであ

る。言わずと知れた「百の貌のハサン」・・・ハサン・サツバーハ・  
・・・アサシンのサーヴァントだ。

「わたしもまたあなたさまと共同戦線を張ることになるとは思いますが  
しませんでした」

「たわけが。お前の力など必要ない。我は英雄王ギルガメッシュぞ」

ははあー！と無数のアサシンがその言葉にひれ伏す。先の大戦で  
勝ち目がないことを理解しているアサシンだからこそある一種の  
忠義にも見えた。その心の中では何をたくらんでいるかは知れたも  
のではないが。

「まあ、そう言わずに利用できるものは利用すればいいじゃないか、  
王が自ら動くほどのことではあるまい？」

「マスターよ。それは違うぞ。民は王が動かねばついてこぬ。故に  
王は強く気高く、そして強欲でなければならぬ」

赤い目がスカリエッティを観察しながら暇つぶしのように答える。  
実際、暇なのか先程から「つまらん」と何度独り言のように呟いて  
いるのか数えたら恐ろしくなりそうだ。

「わたしには聖杯戦争というのがいまいち理解しがたいんだけどね。  
だが願望器には確かに興味があるよ」

「愉快なものよのう。元来アレは根源へと到達することを願いにし  
た雑種どもが生み出した魔法ともいえる事象。それが関係ないところ  
で、ただ願いを叶えるためだけの戦がまことに始まることにはな  
ろうとはな」

くつくと笑みがこぼれる。その顔はスカリエッティと同等かそれ以上に欲に満ちていた。

「ドクター♪これで私たちをこんな目にあわせた管理局の連中と、誘ってあげたのについてこなかった妹たちに後悔させてあげられますね」

クワットロがスカリエッティに半ば抱きつく。その光景は父に甘える娘だが、言っている事は見逃せないほど邪悪に満ちている。

「おい小娘。まさか我にその仇討のような真似をさせるつもりではなからうな？」

「いえいえまさか。英雄王様にそのような無礼は致しませんよ。その役目を担うのはアサシンと私です」

眼鏡の位置を直すしぐさをしながら、甘ったるい声でクワットロは言う。その表情にすこし英雄王は呆れを表情にあらわすが、とうのクワットロはその視線にすら気付かない。

「雑兵がいくら群れても英雄には敵わん。しばしの余興として楽しませてもらうか」

「ええ、そうしてくださいな」

「さて、気付かれてはいるだろうが念には念を入れて再び管理局が血の海になることを予言してやるとしよう。  
さあ、楽しいパーティーの始まりさ！」

幾多のガジェットローンが浮かび上がる。JS事件の再誕の瞬間だった。



## 利益と損益（後書き）

今回もまた短くなってしまいました＞＜；

えー自分でさえ設定がわからなくなりそうです↑（オイ

明日までは家にいるので明日も更新できればしますよー＞＜b

## 信頼

「なんやて!？」

映し出されたのは丸みを帯びたロボット(?)が無数に機動六課へと向かっている映像だ。たしかロウランさんはガジェットと呼んでいたが……。

「復活して早々とはね……」

「うん……意思表示ってところだろうね」

冷静に映像を見つめる高町さんとテスタロッサさん。先程まではしゃぎようが嘘のようだ。

「このまま放置していたら近隣の町に被害が及びそうやな……」

「だね。ここは早めにこちらから出向いて叩いた方がいいかも」

「私もフェイト隊長に賛成。数は多いけど出ているのはガジェットだけのようだし」

「せやね。……隊長・副隊長、民間協力者は待機。フォワード4名出撃や」

「」「はいっ!」「」

スバル達が駆け出していく。その姿を俺たちは見送った。……だが、それでいいのか。ここであの子たちにだけ任せてみているだ

けでいいのか俺は？

「八神さん！俺達も戦います！！」

「あかん。それは許せへんよ」

「なんでさ！？」

「ここは組織なんやよ士郎君。うちらはあのガジェットと戦うのは慣れているし、そのためのベストなポジションもあの子たちならとれる。そもそも士郎君達はアレとの戦い方を心得ておらへんやんか」

言ってる事はわかる。だけど見てるだけなんて俺にはやっぱり・・・。

「はい、ストップ。落ち着きなさいよ衛宮君。だいたい貴方が行っても足手まといになるだけよ？彼女達はチームで動いてるだから。私たち個人個人で戦うことに長けた魔術師がおいそれとチームに混ざってごらんない？統制が乱れてかえってマイナスになりかねないわ」

「でも・・・！」

「でももしかしたくないわ。それに、私たちには私たちがやる事があるじゃない」

「やる、こと・・・？」

「・・・いい？これが本当にあのガジェットとかいう奴だけのただの様子見の牽制攻撃ならそれはそれでいい。けど、仮にそれだけじ

やなかった場合はどうするつもりよ」

「どうするったって・・・そこは臨機応変に」

「臨機応変とはよくもまあ・・・無鉄砲なだけの小僧の言う言葉ではないな。そもそも君にそのような器用なまねは無理だ、衛宮士郎」

「むっ・・・」

愉快的道化を見るかのようにこちらを見るアーチャー。やはりこいつとは気が合いそうもない。・・・言っている事は正論なんだけどさ。

「何かが起こった場合、それに対応する人員も必要だって事よ。だからなのはやフェイト、ヴィータやシグナムが残ってるんじゃない」  
「そ、それはたしかにそうだが・・・」

でも正義の味方として納得がいかないというか・・・。

「そうだよ、士郎君。気持ちは嬉しいけどここはスバル達に任せて大丈夫だから」

「それとも、衛宮君はあの子たちが信じられないのかしら？」

「そんなわけあるかつ！4人の事は信頼してる」

挑発するような遠坂の言葉に声が半音上がる。信じていないわけがないじゃないか。

「なら大人しく信じて待ってなさいよ」

「あ、ああ・・・」

遠坂に諭されて頭を垂れた時には既にフォワード4名の戦闘は幕を開けていた。

「はああああ！」

ナックルで強打されたガジェットがまた一つ破壊される。既に数十機のガジェットがガラクタと化していた。

「クロスファイア・・・シュート！」

「フリード！ブラストレイ！！」

遠距離からの攻撃がガジェットの体を突き抜けてはまた火花がたつ。その隙にもスバルとエリオが連携して次々と破壊していく。順調すぎるくらい順調といえるような状態だった。

「ほう、雑兵風情にしてはやるな。こやつらが小娘が言っておった管理局の狗という奴か？」

モニターでそれを見ていたギルガメッシュはその現状に笑みを浮かべた。

「その通りさ。ま、連中もこれぐらいの数ならば本気を出す気はないようだね」

「ふむ、実に興味深いな。魔法とやらは」

道化としては合格点よな。とグラスに注がれたワインに口をつけながら悦に浸っている。

「やはりここはこのアサシンめが」

「その必要はないさ。今日は宣戦布告のようなものだし、やるからには徹底的にやってしまわないとね」

愉快げに自身の作ったガジェットが破壊されていく姿を見るスカリエッティ。

「もうすぐこの余興も終わりを告げるようだね」

ちっとも名残惜しそうではない口調で手を天空へと向けスカリエッティが語る。そのうち叫び声でもあげるのではないだろうかというぐらいの笑みをその顔に宿して。

「御苦勞様、皆。今日は追撃はなさそうだしクールダウンして自室待機ね」

「」「はい！」「」

なのはの号令に4人は背筋を正し声をそろえる。その顔には疲れが少しにじみ出ていたが、それでもまだ余裕さがうかがえた。

「それじゃあ、解散！！」

「ほんと、普段が緩くて誤解しがちだけどやっぱりあの子たちも軍人・・・局員なのね」

私は魔術教会所属の魔術師ではあるが敬語は心得ているものの軍隊的なそれは存在しない。そもそも魔術師は先にいった通りチーム戦には長けてはいない。他の魔術師は根源の渦を指すにあたって蹴り倒すべき敵でもあるからだ。そう、例外を除いて。

「・・・・・・・・」

大人しく引きさがったものの未だ納得がいかないのか、先程からその例外とやらはうんうん唸っている。元々あまり賢くはないのだからあまり考えていると知恵熱でも出すのではないだろうか。

「シロウ、さっきから何なんですか」

耐えかねてかセイバーが訝しげに士郎の顔を覗き込んだ。すぐに

正氣に戻った士郎は一瞬で間近にあった顔に驚き強張る。・・・毎回思うけど・・・その反応、私やセイバーに失礼だったの。

「ど、どうしたんだ・・・？セイバー」

「それはこちらの台詞です、シロウ。一体何を考え込んでいるのですか」

「え、いや……。そう見えたか……。？」

「はい」

「当たり前でしょ」

「む、遠坂まで……。？」

というより、まるわかり何ですけど。士郎はすぐに顔に出るんだから……。

「大方、まだ納得がいてないんでしょ？」

「理屈では理解してるさ。でも結局俺は見ていただけだった。それが我慢ならないんだよ」

・・・あんたは戦闘マシーンか。

「まあ士郎君の気持ちもわからないことないよ」

「え……。？」



「私もね、他人に傷ついて欲しくないから強くなろうって今まで頑張ってきて、皆がまっすぐにこの空を飛べるように、大丈夫なように鍛える仕事を選んだの。」

私は皆を守る戦技教導をするんだって。・・・まだただけどね」

「高町さん・・・」

「でも、だからこそだよ。私は私の教え子たちの事を信頼してるんだ。あの子たちならここまでの事ならやってくれる。私やフェイトちゃんがいなくてもこれぐらいの事は出来るんだって分かっている。だから待っていていられるの、皆を信じて」

それはきつと理想論だな、と思う。でもそんなことはなのはも分かっているだろう。そしてそれでも追い求める事が大事なことを知っているんだ、この人は。

「そっか・・・すごいな高町さんは」

「私がすごいんじゃないかって皆がすごいんだよ、きつと」

笑顔で堂々とそんな事を言える人がこの世界でどれほどいるのだろう。私には・・・無理だ。いつでも結果を求める魔術師に真の意味でそのように思う事は出来ない。

もしかしたら、士郎が目指しているのはこういう堂々とした姿のかもしれない。魔術師じゃなくて魔術使い・・・殺戮者ではなく正義の味方。どんなに間違ってもきつとこの少年は信じた道を一直線に進んでいくんだ。その結果が私の後ろにいるような奴にならないよう歯止めを利かせるのがパートナーである私の役割だろう。

「じゃ、夕食に行きましょ？」

「うん、そうだね♪」

「あ、ああ」

あえて何も言わず、その背中を押す。止めるのも私ならば進めるのも私なんだから。

## 信頼（後書き）

さてと、昨日出来ていたんですけど寝て投稿していませんでしたね。  
申し訳ない。

明日からはまた投稿ができない日が続きますが、それでもよろしければお付き合ってください^^;

## 無限書庫にて

「エリオ、動きが緩慢になってきたぞ！」

「はっ、はい！！」

ストラーダの矛先とレヴァンティンが幾度も重なり金属音をあたりに盛大にまき散らす。

精神という概念において共に騎士を連想させる二人はJS事件の折から師と弟子の関係を築き上げていた。かたや全てを一直線に貫く槍、かたや炎を纏い闇を切り裂く剣。二人の視線には全く曇りがない。

だが体力の差はある。既に2時間を越えた剣戟の数々にエリオは息を肩でしながらストラーダを構える。対するシグナムは疲れを顔にすら出さずに剣を振りかぶる。

そんな剣戟をさらにそれから数十分繰り広げ、途端にシグナムはレヴァンティンを構える手を緩めた。いつもの訓練終了の合図だ。

エリオもまたそれを見届けた後にストラーダの構えを解いた。

「ありがとうございました！シグナム副隊長！！」

エリオが姿勢を正し、敬礼する様を見届けると頷きながら、シグナムは制服の上着を手取る。

「さて、では汗を流して来い。30分後には無限書庫の方に向かう

ぞ」

「はい！失礼します」

もう一度敬礼した後、エリオは駆け足で部屋から出て行った。

無限書庫、管理局本局の一施設であり、管理世界の書籍ならば全てが揃っていると言われている。その司書長を務めているのはなのはやテストロッサ、主はやての幼馴染であるユーノ・スクライアであり、どうしても直に話しておきたい部分があるらしい。本来ならば主はやてやなのは達がいくことが出来ればよかったのだが、両者とも仕事に追われており、偶然非番だった私とエリオが抜擢されたというわけだ。

「うわぁ・・・すごい」

無限書庫内に入るや否や、エリオは壁に並べられている無数の本を見ながら感嘆の声を上げた。無限というだけあって本当に限りがないように見えるそれは毎日毎日増えているそうだ。そんなところの司書長を務めているユーノは本当に有能だったということだろう。

と、しばらく歩いた後ユーノが本の整理をしている姿が遠目に見えてきた。ユーノも気付いたのか眼鏡のずれを直しながらこちらを振り向いた。

「ユーノ、久しぶりだな」

「うん、久しぶり。わざわざご足労願っていただきすみません」

「いや。・・・そういえばエリオは初めてだったか？」

「いえ、一度任務の最中にお姿を拝見させては頂いています」

ああ、そういえばあの時たしかに話機会こそなかれ一度会ってたな。

「改めまして。エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「ユーノ・スクライアです。一応ここ、無限書庫の司書長を任されています。まあ、なのはやフェイト、はやてとは幼馴染的な関係だし、気楽にいいよ」

笑顔で答えるユーノに、エリオは「はい！」と頷く。

「早速ですまないが・・・それで、用事とは？」

「ああ、うん・・・。はやてに頼まれて聖杯戦争っていうのを調べてみたんだ」

主はやてが・・・。なるほど、手の早い事だ。

「・・・それで？」

「聖杯戦争についての本は確かに見つかったよ。・・・ただ、分からないことが多い」

「分からないこと、ですか？」

ユーノは頷きながら本の山から一つの本を取ると、タイトルをエリオに見せる。

「Heaven's Feel・・・？」

「そ。なのは達の世界ではこれを『聖なる杯』って読むんだ」

そういえば、主はやては衛宮や遠坂は並行世界の日本から来たとおっしゃっていたが・・・つまり、言語については変わらないという訳か。

「この本によると元々聖杯戦争っていうのは、始まりの御三家と呼ばれている魔術師の家系により作られた、大儀式の後の呼び方だそうだよ。元々は降霊儀式の一つ。彼にとってそれは魔法と呼べるほどのモノだとか。

そしてその始まりの御三家っていうのが、アインツベルン、マキリ、遠坂」

「遠坂・・・って、つまり」

「ああ、おそらくは遠坂凜はその始まりの御三家の出身なのだろう。彼女は聖杯戦争に参加しているのだしな」

ん、だがここは彼女等にとって異世界なのだろうか？ではなぜ遠坂の世界の書物がここにあるのだろうか・・・？

「話をつづけるね。彼ら始まりの御三家は役割を分担することによ

り聖杯を召喚しようとした。7人の英霊を召喚することに成功するものの聖杯の独占権を巡り御三家は争い結果、失敗に終わる。これが日本の冬木市と呼ばれる土地で行われた第一次聖杯戦争。

そして二次でもまた同様に失敗。三次からは聖杯戦争の大まかなルールが作られ、正式に聖杯戦争と呼称することになった。だけどこのときも7人の魔術師による戦いの最中、聖杯の器が破壊されることにより失敗している。

この書物にはここまでしか書かれていないわけだけど、どうやらこの聖杯っていうのはどんな願いをも叶える万能な杯であると同時にもう一つ用途があるっぽいんだ。

6人のサーヴァントを倒し残り1人となった時点で聖杯は願いをかなえるだけの能力を有しているらしい。だけど、この始まりの御三家にとって聖杯っていうのは7人のサーヴァントによってはじめて本来の能力をもつということになるようなんだ」

「つまり、自身のサーヴァントさえも倒すことによって聖杯は本当の意味で完成する、という事か」

そこまでして魔術師という生き物は何を求めようというのか、私には解らない。おそらく一生涯理解できないものなのだろう。少なくとも私たち魔導師には。

「そこに魔術師の悲願があるとも書いてあった。正直まだ半分ぐらいしか解読できていないんだけど、恐らくその並行世界から来た方々が言うように聖杯戦争が世界の危機となりかねないのは否定できないよ」

「ふむ・・・分かった主はやて達には私が伝えよう。引き続き、解析の方を頼めるか？」



「もちろん。こちらこそ、なのは達の事をよろしくお願いします。・  
・と、今日は遅いし、泊っていくいいよ」

「ああ、そうさせてもらおう、エリオもそれでいいな？」

「はい。・・あの。ユーノさん、少し本を読んでいてもよろしいでしょうか？」

「うん、いいよ。ゆっくりしてって」

ユーノが承諾するとエリオはぱあっと表情を明るくする。こういうところは年相応だな。

私も夕食までの間、適当に本を読もうと広い館内を歩き始めた。

## 無限書庫にて（後書き）

少々聖杯について語りたくなったのでつい……（え

ちなみに無限書庫にあるのは大体の人が気づいたかと思いますが、  
おじいちゃんの仕業です

## 信念を貫く死棘の槍

館内を歩き回るうちに紅の髪が視界に入る。何やら一冊のハードブックを抱えているようだが……。

「エリオ、何をしているんだ？」

「あ、シグナム副隊長！……それが、変な本を見つけて」

「……？変とは？」

おずおずとエリオはこちらへと本を見せる。……私には普通の本にしか見えないのだが。

「この本、ページが真っ白なんです」

「見せてみる」

「はい、どうぞ」

本を受け取り、ページを軽く捲る。ふむ、たしかに真っ白だ、なにも記されてはいない。確認するように一ページずつ捲っていく。そして本が7割がた終わったライン。そこに文字は記されていた。ベルカの言葉で準備を意味する一文、ただそれだけが。

「セットAnfang――」

「――ッ！？」

急に本が光り出し、自動的にページが捲られていく。しかも先程までなかった中身がいつの間にかに存在していた。

——ロストロギア！？これは、魔導書グリモアなのか・・・？

気付けば私とエリオは魔導書に吸い込まれるかのように光に包まれていた。

「私、貴方みたいな人好きよ」

「はんっ！小娘が。ちっとは年とってから出直してこい」

目尻を湿らせながらも声色だけはいつも通りの平静さを装って少女は槍兵に背を向けた。きっとそれが互いのためであると信じて。

槍兵もまたそんな少女にいつも通りの飄々とした態度で最後の別れを告げた。それは、本当に——また逢う日が来るかのような余韻を残して。

「あちっ!？」

皮膚が焼け爛れそうな熱さに僕は意識を半ば強制的に取り戻した。

「ん? 誰かいるのか？」

面倒臭いと言いたげな声色が部屋中に響く。しかもこの部屋・・・  
本当に燃えてる・・・!

「あっあの・・・!」

とりあえず声の持ち主を探して立ち上がる。

——と、探すまでもなかった。そこに、全身青タイツの30半  
ばぐらいの青年がいた。

「なんだ、他にもいたのか。すまないな、坊主」

青年はいきなり謝罪の言葉を述べる。よくは理解できないけど、  
この人が発火した・・・ということなのだろうか。そしてよくみる  
と青年の胸は貫かれていた。そう、恐らくは槍。普通なら死んでい  
るはずの体だった。

「その怪我・・・! 早く治療しないと!! とりあえず肩をお貸しし  
ますからここから逃げましょう!」

そうまくしたてる僕に彼は首を横に振った。大変なのは彼の方な  
のに、青年はいたって冷静な態度を示していた。

「無理だな。俺の槍で貫かれたこの胸はどんな治癒魔術であろうと

塞がらんし、坊主が俺を連れてこの部屋から出る事も不可能だ。そもそもお前一人でも怪しいだろうが」

——魔術……？ってことはここは士郎の世界……？一体どうなってるんだ……！

だけど今はそんな事さえもうどうでもいいように感じられた。とりあえず目の前の青年は絶対に死なせちゃいけないと僕の直感がサイレンを鳴り響かせる。

「そんなことは……！——あつつ！？」

そんな時、いきなり体全身が燃えるように熱く感じた。だけど火が飛び火したのだろうと僕はあまり深く考えなかった。その代わりに、

「ん？ちょっと待て。お前、そりゃ……！」

「え……？」

青年の視線が僕の左手に釘づけになった。一体何がどうしたというのだろうか……？

気になって左手を見てみると、そこには……。

「あれ、いつの間にこんな模様……。」

「模様じゃねえ。そりゃ令呪っていうんだ、坊主」

「令、呪……」

「俺達サーヴァントを従わせる三つの命令権だ。だが、何故そんなものがそこにあるんだよ」

——サーヴァント。彼もセイバーやアーチャーと同じってこと・  
・・?

息苦しそうに、だがはつきりと青年はこちらを見ながら問うた。  
だけど、僕にもその答えは分からない。むしろこちらが聞きたいことだった。

そういえば、士郎にも左手に模様があつたことを思い出す。形は違えど同じものだということだろうか。

「———!」

先程と同じ光が僕と青年を包み込み僕は眩しさのあまり目を閉じた。

「——お———おい、おい!」

「——う」

青年にどやされる様にして僕はまた意識を取り戻した。ただ先ほどと少し違っていた。青年の胸にあったはずの致命的な傷は跡形も

なく消えていたのだ。

「ようやくお目覚めか、坊主」

赤い瞳がこちらを覗き込む。その瞳は先ほどよりも穏やかだった。

「あ、はい・・・すみません」

「いや、礼を言うのはこっちかもしれねえ」

「え・・・？」

「どうやら俺はお前の今期のサーヴァントらしい」

えっと・・・つまり。

「僕があなたのマスターってこと・・・ですか？」

「ああ、そういうことだ。坊主はわざわざ俺との契約を結ぶために喚ばれたようだ。どうりで嬢ちゃんたちとの諍いの時にはいないはずだな」

そうだ、僕は光に包まれて気付いたらあの部屋にいて、今また目の前には、僕のサーヴァントと名乗る青年がいる。

「まあ、改めてだ。よろしくな、坊主。・・・っと、さすがにずっとこの呼び方じゃアレだな。マスター、名前は？」

「あ、エリオです。エリオ・モンディアルといいます」



「エリオか……。良い名前だな、風貌にピッタリな名だ。俺の真名はクー・フリーン。そしてクラスはランサー。ま、ランサーと呼んでくれ」

ランサーの手が空中で止まる。僕はそれに答えるようにその手を握り返した。

「はい！ よろしく願います。ランサー」

聖杯戦争についてはまだよくわからないけれど、目の前にいる青年に僕は憧れのようなものを感じていた。

だけど僕はその時聖杯戦争の当事者となってしまうたという事を上手く理解できずにいた。

## 信念を貫く死棘の槍（後書き）

はい、まあ・・・エリオとシグナムがマスターなのはもうだいぶん前から皆気付いてる・・・よね^^；あからさまだったしw

## 煉獄の巨人

夢を見た。いや、ヒュプノタナトス夢か真かもわからない世界を漂っていると表現した方がよいのだろうか。

「アイリ、僕は――」

一言を発するごとに、男の胸には刃が突き刺さるかのようだった。その刃とは、赤子の安らかな寝顔であり、その母の眩しい微笑みであつた。

「――僕は、いつか、君を死なせる羽目になる」

血を吐く思いで放たれた宣言に、アイリと呼ばれた女性は安らかな表情のまま頷いた。

「解っています。もちろん。それがアインツベルンの悲願。そのための私なのですから」

アインツベルン・・・たしか始まりの御三家の一つだ。雪を思わせる髪と肌の色に紅の瞳。彼女はその悲願とやらのために死を覚悟していた。

男は涙を流し、膝を折る。まるで自らの運命を呪うかのように。その顔は、年に似合わず我儘を言いながら泣きじゃくる少年のようだった。

「告げる――」

「――告げる。」

汝の身は話が下に、話が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

流暢に男の口から洩れる言葉が部屋中に響き渡る。

「――誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者――」

痛みが彼の体を支配するが男は揺らぐことなく、固唾を飲んで見守る妻さえも今は眼中にない。

「――汝三代の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

そう呪？の結びをつけるとともに、男は身体に流れ込む魔力の奔流を限界までに加速させていた。

そして、そこには――。

「――問おう。貴方が私のマスターか」

凜とした声で男に向かって問うた少女に私は目を見張った。横から見ても一目瞭然、私の知るあのセイバーだったのだ。だが私とは別の理由で男と女は目を見開いていた。まるで信じられないものを

見るかのように。

だが、これが・・・サーヴァントの召喚儀式、か。

そこで私の意識は途絶えた。

浮かび上がるのは灼熱の大地。そして大きな洞窟と入口を護るよう  
にして君臨する巨人の姿。

「――っ！」

気付けば次は暗闇の中。体は妙な痛みに襲われ強張る。

と、暗闇の中で何かが動いた。

「汝、我を召喚せしマスターか」

前方から聞こえる低い声に、自然待機状態にしていたレヴァンテ  
インを握る。

「貴様、何者だ」

声の聞こえた方へと言葉を投げる。数瞬の後、暗闇の中で炎が揺らめき、声の主は姿を曝した。

「――な、に・・・？」

そこには、巨人がいた。さきほど動いたのは彼自身か。

「我はセイバーのサーヴァント。改めて問おう。汝は我のマスターか？」

「知らん。そもそも私は召喚などしては――」

今度こそ私は騎士甲冑を身に纏い、レヴァンティンを構えた。

「――ほう、その剣。レヴァンティン炎の魔剣ではないか。やはり、我を召喚したのは汝のようだな」

「黙れ、言っただけだ。私は召喚などしていない！」

それ以上動けば切る、と視線で脅しをかける。だが、正直ここまですで大きな相手にどこまで太刀打ちできるかを考えれば肝が冷えた。

「ふむ、気付いてはおらぬようだな。自身の左手を見るがいい。炎の騎士よ」

「――何？」

横目で自身の手の甲を見る。そこに、先程までは確かに存在していなかった痣があった。そう、強いて言えば衛宮士郎の手の甲にあったのと似た文様が。

「それが、我のマスターである証拠だ」

「・・・つまり、私は今期の聖杯戦争のマスターに選ばれた、と」

にわかに信じ難いがこの異常な現象がそれを証明しているようで、私は目の前の巨人をキツと見据える。8 mはあるだろう長身がこちらを見下ろしているこの状態が、あまりにも常識離れしていた。

「その通りだ。それで我がマスターよ、名前は？」

「・・・私は烈火の将、シグナム」

警戒を解かずに、半音低めに名乗る。

「勇ましい主だな。べつに取って喰おうなどと思いはせぬ。我を常世に繋ぎとめているのは汝の魔力だからな」

その割には主従という風には感じられない。いや、元を正せば私はただの魔力補給機であって、その任さえなければ殺す相手だという感じだ。

「ふん、私は聖杯戦争について詳しくは知らんが・・・。どんな願いも叶える願望器・・・だったか、貴様もそれを求めるのか」

「おおとも、当然の事であろう」

そういうセイバーから放たれた邪気を素早く感じ取る。コイツだけには聖杯を渡してはならない、そう私の直感が告げていた。だがすぐにことを荒立たせる必要性もない。何より――

コイツと一対一で戦って勝てる勝算は何処にもない。

「そうか、分かった。それで、この世界はお前が作り出したまやかしか？」

「否。だがこれぐらいの結界、我にとって取るにも足らん」

言うより早く、セイバーがその巨身を揺らし、抜剣する。剣は炎を纏い、空間ごと切り裂いた。だが、それよりも驚いたのは。

――レヴァンティン・・・！

セイバーが握っていたのは自身が握っているレヴァンティンを大きくし、より鋭利にしたものようだった。

「ううっ――！」

空間が揺れ、衝撃波に体が反抗しようもなく吸い込まれる。



目が覚めると、エリオと二人で本棚にもたれかかるようにして気を失っていた。今までの夢だったのだろうか・・・？そこまで考えた後、手の甲が目に入り、それが現実のものだったと認識される。

——だが、あの巨人はどこに・・・？

『（案ずるな、我は霊体化しているだけにすぎん）』

考える必要もなく答えはやすやすとかえってきた。そういえばアーチャーもよく霊体化していたな。なるほど、便利なものだ。それに、霊体化している間も念話での会話は可能というわけか。

『（さて、だが早速仕事のようだな）』

『（なんだと・・・？）』

『（その少年、彼もマスターのようではないか）』

「——っ!？」

エリオも、マスター……。嫌な予感はしていたが本当に、そうなのか……。

『（待て、この少年は私の部下だ。手を出すことは許さん）』

「んっ……」

「エリオ、目が覚めたか」

エリオのサーヴァントも霊体化しているというわけか。さて、ど

うするべきか。

「はい、シグナム副隊長」

『（此奴は敵だぞ。何故止める）』

やはり、言う事を聞くというわけではないようだな・・・。

『（今は戦うべきではない。だいたいお前なら勝利するのは確実なのだろう？）』

『（ふむ、たしかにな。それに聖杯戦争もいまだ始まってはいない、か・・・。よからう今回は見逃してやろう）』

ふう、単純な奴で助かった。どうやら最初からぶつかるといふ事はなさそうだ。

『エリオ、お前もマスターになってしまったそうだな』

『え、ええ・・・。シグナム副隊長も、その・・・そうなんですよね』

どうやらエリオも自身のサーヴァントから聞いているらしい。それでもまだエリオのサーヴァントが動かない理由もエリオが止めてくれているからだろう。

『ああ、不本意ながらそういうことになる。すまないが、エリオ。今回は何とか止められたが、こちらのサーヴァントは言う事を聞くタイプではない。そちらは大丈夫か？』

『はい！こちらの事なら問題ありません。凄くいい方ですからっ』

そうか、エリオの方は本当に大丈夫そうだな。となると、問題はこちらか……。出来る限り早く戻って、衛宮や遠坂に相談するのが吉……。か。

「エリオ、やはり今日このまま、ユーノには申し訳ないが六課に戻るでしょう」

「そうですね、わかりました」

エリオもこちらを察してくれてるのか、大人しく従ってくれた。

気が重いが最善の選択を選ぶために。だがまさか、自身のサーヴァントを倒すために奔走するマスターとはな。まったく、笑えない構図であった。

願わくば、私の知っているあの気高きセイバーのサーヴァントのような英雄が召喚されればよかったのに。

## 煉獄の巨人（後書き）

はい、元々のシグナムのサーヴァントは別の予定だったのですが、急遽今日変更されました。なので色々と設定がボロボロです、正直。

本来はシグナムに似て凛々しく清純潔白な英雄が呼ばれる予定でした。ですがどうやら他の方の予定されているクロスとかぶるようでしたので、反英雄の中でも最悪なものが出てきてしまいました。

## 槍兵の矛先

予定より早く帰ってきた僕とシグナム副隊長に八神司令は少し驚きながら、「もう少し休暇のつもりでゆっくりしてきてよかったのに」と出迎えてくれた。

「とりあえず、二人ともお疲れ様や」

「いえ」

『（それにしても、エリオもそうだが司令っていうにはこの嬢ちゃんも若いな〜）』

と、それがランサーの八神司令に対する感想であった。

まあ、はやてさん、なのはさん、フェイトさんの3人は19歳という若さで管理局でも有名な魔導師だからなあ。

今はリミッターがかかっているとはいえ八神司令はSSランク、なのはさんとフェイトさんはS+ランクと数少ないオーバーSランクの3人である。

『（うん、そうだね。機動六課の隊長陣は全員19歳なんだよ）』

『（おいおい、マジかよ。そりゃまたすごいな・・・）』

声でもはっきり分かるぐらいのランサーの驚きように僕は少し心の中で吹き出してしまう。出逢って間もないが、このランサーの真っ直ぐさは結構気に入っているし、なによりやるときはやる、とっ

でもかっこいい・・・そう、既に僕にとって兄貴のような存在だった。 だけど――

八神司令には出来る限り隠しているけど先程からシグナム副隊長は時折苦痛な表情をちらつかせることがあった。おそらく自身のサーヴァントとの口論でもやっているのだろう。口調からしてどうやらあまり話を通じる相手ではないらしい。

「主はやて、遠坂さん達を連れてきました」

「ありがとう、リインフォース」

『（なっ――！？）』

途端までもやランサーは驚きの声を上げた。なんでだろう・・・？

『（どうしたの？）』

入ってくる遠坂さんと士郎、セイバーさんに軽くお辞儀をしながら僕はランサーに話しかける。

『（ああ、なんかいろいろとまズった気がする）』

『（・・・？）』

意味がわからず首をかしげるが、それは僕だけではなかったようだ。

「セイバー？どうしたんだよ」

士郎が構えを取るセイバーさんを訝しげに詰問していた。

「シロウ、皆さん。さがってください」

「セイバー、どうしたんや？」

『（えっと、どういうこと？）』

『（一応なりとも、以前聖杯戦争で聖杯をかけて戦った仲でな。あのセイバーのサーヴァントとは。あん？でもたしか、そののねーちゃんのサーヴァントもセイバーじゃなかったか？）』

さすがに疑問に感じたらしく、ランサーは途中で語気を弱めた。  
でもそうか、そういう可能性もあるんだよね。

『（二人は聖杯戦争に生き残ったそうだよ）』

『（はん、なるほどな。つまりお嬢ちゃんの魔力であらかたのアーチャーとセイバーの魔力供給を行っているってわけか）』

「こんなところでまたもや出逢うことになるとはな。再会などしたくはなかったぞ、ランサー」

おまけにアーチャーさえも出てきてこちらへと凄みを利かせた。  
いや、僕に、というよりは僕の後ろで霊体化して待機しているランサーに、か。

「ランサーって、あのランサー・・・！？」

遠坂さんが驚き、こちらを見る。そっか、ランサーが死にかけて

いたあそこ、シロウの世界なんだ・・・。

「まっ、待って下さい。ランサーは敵なんかじゃありません!」

ランサーがいるであろう場所を護るように、手を広げる。少なくともランサーが悪い人ではないことを僕は知ってる。

「エリオ・・・お前がランサーのマスターなのか」

普段よりも少し警戒がかった声。おそらく未だ混乱状態なのだろう、上手く呂律さえ士郎は回っていなかった。その隣で遠坂さんも普段の気さくさを失い、ただこの状態をどうするべきかと思案していた。

「はい」

とりあえず肯定する。そう、僕はランサーのマスターになったんだ。

「エリオの言うとおりで。待てや、おまえら」

ランサーが実体化し、僕の前に立った。

「ランサー!」

「おいおい、別に俺はおまえたちと戦うつもりねえよ」

手を上げて行動で示すランサー。

「・・・どういうつもりですか」



それでも警戒を解く気がないらしく、セイバーさんは士郎を背後に、アーチャーと並び立っていた。

「どうもこうもねえよ。俺のマスターはお前達との戦闘は望まない。それだけのことだ」

「それに従うというのですか。ランサーのサーヴァントであるあなたが」

「おうとも。別に俺には聖杯にかなえてもらいたい願いなんてねえからな」

あっけらかんと答えるランサーにセイバーさんとアーチャーが息を飲む。ランサーの答えはとてもシンプルだった。

「俺はおまえらと共闘しろと言われたならそうしたって構わないぜ？ただし、エリオに、俺のマスターに手を出すってんなら容赦はしねえ」

深紅の瞳がアーチャーを捕える。何故、セイバーさんではなくアーチャーだけにその視線がいったのかは知らない。だけど、ランサーとアーチャーの間に深い溝がある事は何となく察することが出来た。

「・・・いいんじゃない？ランサーは嘘をつくタイプじゃないし。誇り高い英雄なわけだから」

そう切り出したのは意外にも遠坂さんだった。

「やっぱわかってんじゃねえか。さすが嬢ちゃんだぜ」

「むっ・・・・・・・・」

だがそんなランサーの言葉に唸る士郎。一体どうしたというのだろうか・・・・。

「分かった。遠坂がそういうなら信じる。

・・・・セイバーもいいな？」

「はい、了解しました」

「・・・・アーチャー」

「・・・・心得た」

一部不服そうだったが、頷いてくれる。そんな皆の表情を見て僕は一気に気が抜けた。

「話がひと段落したところで、すまないが少し話がある衛宮、遠坂」

だけど、シグナムさんがそう切り出したとき、またもや波乱の予感が脳内をよぎった。

## 槍兵の矛先（後書き）

http://ncode.syosetu.com/n5088x/

→URLにて質問コーナー「教えて！知得留先生 英雄と不屈の心編」を設けました。よろしければご利用ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n33110/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers 英雄と不屈の心（Fate×なのは）

2011年10月12日22時30分発行